



ラストーン

～失われた都より～

7

segakiyui

1.宙道（シノイ）

宙道（シノイ）の闇には、朝も昼も夜もない。

それは深く重く沈む暗闇で、人によっては遥か太古の原始の夜を、あるいは胎児の時に温もりとともに感じていた闇を思い出させる。

「ユーノ？」

「目が覚めた、レス？」

少年は頷いてイルファの背中から滑り降り、ユーノの側へと走り寄った。不安な様子でユーノの手を探り、ぎゅっと掴まってくる。

その小さな汗ばんだ手を安心させるように握り返してやりながら、ユーノはぼんやりと見える相手に微笑んだ。

「怖いの？」

「だいじょうぶだよ！」

声が甲高く割れたところをみると、やはりかなり怖いらしい。くすりと笑って、アシャに問いかける。

「どのぐらい国を飛ばしている？」

「たぶん、六、七つは」

（アシャ、疲れてる）

声の張りのなさに改めて相手を見直す。

アシャは顔に汗を浮かべ続けている。髪の毛が額に張りつき、疲れた気配の顔に開かれた唇はいつもより濃い赤に染まっているようだ。常に精神を張り続けている疲労のためか、表情が頼りなげな妖しいものに見える。吐き出される息は熱っぽい。

これほど疲労困憊した様子のアシャを、ユーノは見ることがなかった。どんな危うい状況でも、いつも憎らしいほどの余裕で冷静で平然としていて、闘っている最中でさえ自分の綺麗さを利用するしたたかさの持ち主、そういう男がアシャだと思っていた。

宙道（シノイ）を進み始めて半日ほどたったあたりで、宙道（シノイ）への慣れを含めて半日ほどを休息に使ったのだが、その程度ではアシャの体力は回復しなかったらしい。

（やっぱり四人がきついんだ）

ユーノは唇を噛んで眉をひそめた。

アシャを疲れさせているのは、ユーノ達に他ならない。自分にもう少し力があれば、と考えている。

同じような想いでユーノを案じて、アシャが眠れぬ夜を過ごしたことがあるとは考えつかない。ましてや、アシャが宙道（シノイ）を四人で踏破するなどという無茶をしているのが、極端なことを言えば、ただユーノを傷つけないためだけなどとは思いつきもしていない。

「しっかしまあ、不気味なところだな、宙道（シノイ）ってのは」

戦いの最中でさえのんびりと聞こえるイルファの声が、さすがに薄気味悪そうに響いた。アシャが苦笑し、まるで演技のような艶やかな動きで額の汗を拭いながら応じる。

「まあな。一般人は通らないところだし……慣れていないせいもあるだろう」

「使っているのは視察官（オベ）だけ、ということか」

イルファがさりげなくアシャのもう一つの役割を口にした。

「ああ」

言外の意味を汲み取ったのか、アシャは一瞬軽く目を閉じた。

イルファが言った「視察官（オベ）だけ」ということばは、その地位にある者、という意味ではない。その能力を持つ者、という意味を含んでいる。つまりは、視察官（オベ）以外の、アシャと同等の力の持ち主、たとえばギヌアなら追ってこれるな、と暗に確認したのだ。

「厄介だな」

「そうならないようにする」

そっけなく言い切ってアシャは唇を結んだ。これ以上無駄な体力は使う気がないという気配、その余裕のなさに、ユーノは思わず口を開く。

「アシャ。少し休もう」

「ん？ 疲れたのか？」

そうじゃない、と口を尖らせかけたが、思い直してユーノは頷いた。

「うん、ちょっと」

「わかった、小休止していこう。あまりのんびりしてられないんだが」

どこからどのように空間が遮られているのかわからない暗さの中、アシャは見えない壁に沿うように腰を落とすと、深く体を曲げた。肩が軽く上下している。拭き取ったはずの汗が滑らかな頬を流れていく。

「疲れがとれたら起こしてくれ...」

言うや否や、膝を抱え込んですぐに眠りに落ちる。同時にあたりの空間が狭まったような感覚があった。気のせいかな、息苦しい。

「アシャ、もうねちゃった。つかれてるんだね」

アシャを覗き込んだレスファートがユーノを振り返る。重く頷くと、側に腰を降ろしてもたれてきた。

「ぼくはちっともねむくない」

「そりゃ、レスはしょっちゅう寝てたから」

混ぜっ返すイルファを、レスファートはじろりと睨んだ。

「だけど」

「ん？」

「ラズーンまで、後どれほど国があるのか知らないけど、こんな状態じゃ、アシャ、もたないよ」
ユーノが思わず呟くと、イルファもうなづく。

「ああ.....それに、厄介な問題も残ってるしな」

「ギヌア・ラズーンのことだね」

頷き返す。

ギヌアはアシャと五分五分渡り合える遣い手と聞いている。今の疲労し切ったアシャにギヌアが倒せるかどうか怪しい気がする。

「気にいらねえ奴だが、腕は確か...」

言いかけたイルファがことばを切った。立ち上がりながら抜けて来た闇を振り返る。

「...らしいね」

視線に応じて、ユーノも同じように暗がりを見やった。

「何? どうしたの?」

「しっ」

わけのわからぬ顔で尋ねてきたレスファートを制する。

「追手だ」

「どれぐらいだと思う?」

「そうだね...多いな.....二、三十人はいる...」

応えた自分の声が殺気立っているのをユーノは感じた。

アシャが自分達四人を通すのに疲労困憊する宙道(シノイ)に、これだけ大量の追手を送り込める『運命(リマイン)』の首領、ギヌア・ラズーン。彼一人でも十分な力を持っているのに、今ではその追手の中にカザドも入っている。

「アシャを起こすか」

これだけの気配に、アシャはまだ目を覚まさない。それは、彼が限界まで力を使っていることを意味している。

(できれば、もう少し休ませてあげたい)

「いや」

首を振り、ゆっくりと剣を引き抜きながら、ユーノはひたひたと迫って来る気配に対峙した。

(どうして、この娘は目覚めないんだ)

アシャは沼地に吸い込まれたような重い眠りの中で、ユーノが三日三晩目を覚まさなかったときのことを思い出している。

極度の疲労、止まらない出血、意識消失。

それはどれ一つとっても、大の男を命取りにする要素だ。

だが、傷ついて今、アシャの目の前に横たわっているのは、たかだか十八になるかならないかの少女、しかも、その危険な要素の全てを身に負っている。

浅い呼吸が静まり返った部屋に響いている。

(冷たい)

そっとユーノの手を取り、冷えきってしまったのにぞっとした。医術師としての知識が、目の前の少女の、間近に迫った死の影を押しつけてくる。

無言で立ち上がり、掛け物を重ねても重ねても温かくなならないユーノの体を優しく撫でた。やがて、少しためらってから、服を脱ぎ捨て、そろそろとユーノの隣に滑り込む。ぐったりと力の入っていない四肢を引き寄せて、静かに強く、自分の体の熱を伝えるように抱き締める。いつもと違って、何の抵抗もなく自分に沿ってくる体が、ひどく華奢で脆そうで、今さらながら、相手の体が自分の腕の中に包み込んでしまえるほど小柄なのだと気づく。

(気がついたら蹴り飛ばされそうだな)

苦笑したが、冷えたユーノの中心が、どこか強張り緊張しているのに気づいて笑みを消した。

ユーノは依然目を閉じたままだ。睫毛が淡い陰を頬に落としている。幾度も死の淵に追い詰められているのに、誰をも呼ばなかった唇が、やや苦しうに薄く開いている。

(誰も呼ばない.....自分が死のうとしていても、付き人の俺さえも呼ばない)

締めつけられるような切なさが募って、アシャは眉をしかめた。

(いつも、こんなふうにならずたになってから、俺の元へ戻ってくる)

そうしてアシャは考える、毎回毎回懲りもせず、どうしてこの娘は目覚めない、どうしてこの娘はこれほど傷つくまで戻ってきとくれない、と。

(それほど、俺の腕は信頼できないか?)

他の美姫達ならば、手練手管を尽くして求められるはずなのに。

(どうして)

「...ユーノ...」

湧き上がる切なさを込めて、アシャは静かに呼んだ。壊れ物を扱うように、額に落ちた髪をかきあげてやる。

「ユーノ？」

その動作の何かが意識の底に届いたのだろうか、ユーノが微かに身じろぎした。だが、それも一瞬のこと、再び昏々と眠り続ける.....いや、しかし、気のせいだろうか、ほんの少し、その体がアシャの側へ寄り添ったようだ。

(ユーノ？ 俺に?)

子どもっぽい戸惑いと喜びに心を揺さぶられて、近づけた唇を軽く相手の頬に触れたものの、それ以上は何とか自分を制して、アシャはユーノの体をそろそろと離れた。掛け物に移った温もりを逃がさないように、隣で腕枕をしてやりながら横になる。見つめるのはやはり相手の顔、気の強そうな口元や厳しい頬の線をゆっくり視線で辿りながら、胸の中で話しかける。

(一度ぐらい、俺の名を呼んでくれる気はないのか...?)

ふざけて呼ぶのではなく、助けが必要なときに、自分の支えとなる信頼を込めて。

(けれど...)

お前が呼ぶのは、ひよっとしたらイルファ、なのかもしれないな。

「ふう」

思わず暗い溜め息をつく。と、

「...」

ふいにユーノの唇が何かを囁いて、はっとした。ぐったりしていた手が、誰かを探すように持ち上がるのに気づく。

「さ...む...」

掠れた声に思わず手を握って掛け物をかけ直し、ユーノの体を元のように抱き寄せる。

(やっぱりエネルギーが足りないんだな.....すぐ体が冷える)

そのアシャの手を、まさに探していたもののようにユーノが握り返し、どきりとした。もう一方の手もアシャの方へと伸ばしながら、夢うつつのどこか遠い声でねだる。

「い...か.....ない...で...」

思わずきつく眉を寄せる。

(誰を呼んでる?)

幼い表情の相手が愛おしい。

(俺か? 違う、奴か?)

唇を引き締める。無意識的な動作を装った狡さ、ユーノの体に手を滑らせていく。手から腕へ、肩へ、首へ.....顎へ。抱きかかえて包み込んで、そのまま、少し開いたユーノの唇に偶然に触れたように唇を重ねる。

(誰を呼んでいる?)

「ユーノ...」

一瞬唇を離し、堪え切れずに自分が呼んだ。吐息が柔らかだ。唇から零れた温かなものが、自分の唇を満たし、癒していくのを、経験したことのない揺らめくような想いで受け止める。

(このまま、さらって。『ラズーン』も『二百年祭』も捨てて)

唇に触れ合うか触れ合わないかで寄せたまま、迷う。

(このまま、全部奪い去って.....忘れられぬ徴を刻みつけて)

胸が絞られるほど痛かった。

唇だけでこれほど甘いならば、体の奥はもっと甘いに決まっている。

だが。

(ばかなことだ)

ひやりとした感覚が蘇った。

(俺が? この、アシャ、が『ラズーン』をどうやって捨てる? 俺が.....俺こそが...)

続く思考は無理矢理断ち切った。そのまま動けずにいると、天上の管弦もこれほどの音色ではあるまいというような柔らかな声が囁いた。

「あ...しゃ...」

(俺を!)

跳ね上がる心臓に目を見開き息を呑み、ユーノを覗き込んだ。

相手は目を開いていない。目を閉じたまま、けれど、まるですぐ側にアシャが居るのを知ってでもいるように呟く。

「短剣...は...」

「ある」

(ばかな、何をうろたえて)

今の今まで仕掛けていた欲望塗れの悪戯を見られていたような気がして冷や汗が出る。震えそうになった声を必死にごまかした。

「よ...か、た」

(気づかれていたのなら、拒まれていないということだろう)

いつもなら押し通す男の傲慢が、ユーノのことば一つに不安になる。低く優しく問いを重ねるのは、それこそ慣れた処世術だ。

「起きているのか? もう寒くないか?」

「う...ん.....少し.....」

やはりぼんやりと遠く応じる内容は予想範囲、無言でもう少し自分の体近くに引き寄せる。狡さを自覚しての計算は、ふう、と小さく息を吐いたユーノが、まるで幼子が父親の腕に潜り込んでくるような無邪気さに砕かれる。

胸に、ユーノの吐息が。

びくりととんでもないところが疼いた。

「まだ.....寒い...?」

落ち着こうとはしている、だが自分の声が妖しい戸惑いに揺れている、危うげに、このままだこへでも落ちていきたくなるように。だが。

「う...ん...」

ほお。

静かに吐かれた息は深い安堵に満ちていた。蕩けていくような曖昧な声で応じて、やがてすうすうと寝息を立て始める。体の奥の緊張も消え、緩やかにくったりと、アシャの体に全身任せて眠り込む。

(俺に...)

安心している。

ぞくり、と体の芯が震えた。

部屋は静まり返り、呼吸の音だけが湿った温かみで安らかに響く。

(俺、に)

その中で、アシャの体だけが、場違いな熱さ激しさで脈打っている。

「...く...」

苦笑った。

「手を、出せるか？」

出せるわけ、ねえよな。

やさぐれた自分のぼやきに苦笑を深める。

これほど傷ついた相手に、これほどの安心を向けられて、押し開けるわけがない。

(それでも)

「俺を呼ぶときも...あるのか...」

口にしてみて、胸に広がった甘酸っぱい喜びも初めての経験だ。

「.....なら.....いいか」

自分の声が優しい、と感じた。

聞いたことがない、淡く消えそうな優しい声。遠く彼方の空から包み込んでくる薄い雲のようだ。

「今は.....お前の枕でも.....寝所でも.....」

けれど、いつか。

その時には、と考えるとたんに、節操なく高ぶる自分に苦笑いしたが、ふと首もとに冷ややかで重苦しい風が吹きつけたのに、ユーノを庇うように抱き寄せながら、顔を上げた.....。

「ふ、」

目覚めると、同じように冷ややかで重苦しい風が首もとに吹きつけていた。

当たりの気配が澁んでいる。視察官（オペ）なら間違えようがない、『運命（リメイン）』の気配だ。

「目が覚めた、アシャ？」

「ユーノ？」

相手が、薄暗がりでも猛々しい輝きを放つ細身の剣を抜き放っているのに、はっとして立ち上がる。

「追手か？」

「おそらくは。この気配だと、二、三十人はいる」

「何...？」

ユーノの声は緊張している。その声の厳しさと、夢の囁きの甘さとの落差に胸が痛む。だが、気配は確かにユーノが指摘した通りの圧迫感で宙道（シノイ）の中に満ちている。

（確かに、これはかなりの人数の気配だが）

眉をしかめた。

アシャでさえ、宙道（シノイ）に連れ込めるのは自分を入れて数人が限界だ。

（いくらギヌアとはいえ、これだけの人数を？）

「アシャ？」

ユーノが不審そうに振り返る。

「あれ.....ねえ、ユーノ」

レスファートが戸惑った顔でユーノを見上げた。

お互いの顔が何とかわかるぐらいの暗さの中で、レスファートの瞳が小さな明かりのようにきらきらと輝いている。

「宙道（シノイ）って、そんなにたくさんの人が一度に入れるの？」

ユーノがはっとした顔でアシャを見る。アシャも頷いた。

「普通なら、そんなことはありえない」

「じゃ、これ...」

「けどよ、アシャ」

イルファがひたひたと押し寄せてくる追手の気配を、眼力だけで追い返そうとでもするように、宙道（シノイ）の彼方を見つめた。

「この気配は、紛れもなく、多人数の追手だぞ？」

「ああ」

アシャもまた、イルファの睨み据えている方向を見やる。

気配は死のように、のろろと、けれども確実にその間合いを詰めてきつつある。それはまるで、回りを満たす闇よりねっとり濃く流れていきながら、その流れの後には何も生かしておかないという『黒の流れ（デーヤ）』のように、残酷な定めを含んだ物質がじりじり宙道（シノイ）の空間を埋めていくような不気味さだ。

「ユーノ...」

レスファートがユーノの背後に隠れながら、チュニックの裾をしっかりと握る。

「何か感じる？」

「うん...でも」

レスファートは首を傾げた。

「なにか変な感じ.....いろいろ.....あっちこっちに、はねかえってる、みたい」

「跳ね返ってる？」

アシャは不思議そうに繰り返した。むっとしたらしいレスファートが怒ったように、

「ほんとだよ。...こだま？ こっちの音が、あっちの山にあたってはねかえる？ そんな感じ。それが何度も何度もあたって」

「.....そうか」

はっとする。

「イルファ、ユーノ、剣を片付けろ」

「え？」

「何だ？ 勝ち目がないからって、降参するのはごめんだぞ」

イルファが不満そうに唇を尖らせる。

「ひよっとすると、『宙道（シノイ）の声』かもしれない」

「『宙道（シノイ）の声』？」

「宙道（シノイ）の中で、気配をわざと反響させ増幅させて、多人数に見せかけるはったり戦法だ。視察官（オペ）なら一度や二度は使っている」

にやりと笑ってみせる。

「それなら、とりあえず身を潜めてやり過ごせば、相手の状況も掴めるし、無駄な争いをする必要もない」

「簡単なの？」

ユーノの問いに頷く。

それほど簡単な方法ではなかったが、今はそれを事細かく説明している時間はない。手近の壁に向かって掌を向けて意識を集中し、ねじ曲げて小さな空間を作る。

「部屋ができた」

レスファートが驚いて声を上げた。

「そこに入ってくれ」

アシャが意識を強めて固定する間に、三人はそちらへ進んだ。最後にアシャが入り、今度は宙道（シノイ）側に掌をかざして集中する。

「ああ...」

レスファートが小さく声を上げた。

目の前の空間が、見る見るうっすらとした煙のようなものに遮られていく。その煙はゆっくりと厚みを増し、やがて回りに酷似した壁のようなものになった。少し違うのは、僅かに透けて向こう側が見えるような気がする、ということぐらいか。しかし、それも、確かにこの辺りに何かがあると思わなければ見つけられないぐらいの差に過ぎない。

「静かに」

アシャが制して間もなく、追手の気配が近づいてきた。

どっぴりとした宙道（シノイ）の闇の中を、ぎらぎら光る鎧を身に着けた黒尽くめの衣服の男達が、恐れた様子もなく進んでくるのが、壁を透かして見えた。誰もが筋骨逞しく顔立ち不敵なものが目立つ荒々しい戦士風の者達だが、動きには妙にぼんやりした鈍さがある。

「ぐずぐずするな」

その動きに苛立ったのか、全く違うくっきりとした容赦のない声が命じた。

声の主は、男達の最後尾、黒馬に跨がった、やはり黒尽くめの一人の男だ。色というものを絞り抜いたような白髪、色白で整った顔立ちだが、血のように輝く真紅の瞳は禍々しい光に満ちている。

ギヌア・ラズーン。

かつては、統合府ラズーンの第二正統世継ぎとして民人の仰ぎ見る存在であったその人は、今やいと暗き破滅の手『運命（リマイン）』の王となって、紋章を胸に光らせながら進んで来る。瞳に紅蓮の炎を燃やし、宙道（シノイ）の彼方を射抜くように見つめている。

（どういうことだ？）

アシャは作り上げた小部屋の中で眉をしかめた。

男達は少なく見積もっても十数人はいる。『宙道（シノイ）の声』で確かなにお気配を増幅させてはいるが、それでも予想以上の数だ。

不審そうなユーノの顔に、重苦しく首を振った。

考えられる可能性はただ一つ、ギヌアの以外にも『運命（リマイン）』に組して、宙道（シノイ）を安定させ開いていることに力を貸している視察官（オペ）がいるということだ。

（ついに、視察官（オペ）までラズーンを見捨てようとしているのか）

緊張した顔のレスファートがぎゅっとユーノの袖を掴んで体をすり寄せている。

男達は肅々と宙道（シノイ）を歩いていく。まっすぐ前方を見つめながら、暗黒の死の使いのようにためらいもなく進んでいく。その行列がゆっくりとアシャの前を、イルファの前を、レスファートとユーノの前を通り過ぎていく。

四人の呼吸がますます密やかに静かに闇に吞まれていく。

もう少し。

もう少しで行き過ぎる。

「.....」

このまま見事に隠れおおせるか、そう誰もが思った次の瞬間、

「臭いがする」

太い声がギヌアの口から漏れた。人の心を寒々とさせる冷えた笑みを浮かべ、

「獲物の臭いが」

先頭を歩く男が唐突にぴくりと立ち止まった。

「どうした？」

「このあたりに気配が」

アシャの作った小部屋の中で四人は緊張した。

「そうだろう」

ギヌアが満足そうに唇の両端を吊り上げる。

「確かにこれは、あやつの気配だ」

手綱を操り、するすると男達の間を擦り抜けて馬を進め、そして再び何かを探るように戻ってくる。その周囲を固めた黒尽くめの男達の顔にも、操られるようにうっすらとした奇妙な笑みが浮かび上がった。まるでギヌアの微笑が次々に伝わり移っていくような笑みだ。それは、何人もそこにいるのだが、実体なのはギヌア一人ではないのか、そんな錯覚を起こさせた。

ギヌアは楽しむように何度か馬を行き来させ、突然止まった。

「見つけたぞ、アシャ！」

大音声が呼ばわり、いきなり宙道（シノイ）と小部屋を隔てる壁が薄くなり溶け去った。

真正面に、きらきらとした正視に堪え難い真紅の瞳があった。宙道（シノイ）の暗がりの中で、吹き上がる風にばらばらと、散るように乱れる淡い色の髪が、憎悪の炎に見える。

ギヌアの高笑いが宙道（シノイ）に響く。

「うぬっ！」

ぎりっとアシャの歯が鳴って激しい気合いが漏れ、男達がわらわらと駆け寄って剣を突き込もうとした寸前、溶けた壁が再び立ち上がり塞がる。

「はははははあっ！」

嘲るような笑い声が宙道（シノイ）にまたもや響き渡り、レスファートがびくりと体を竦めた。

「甘い、甘いぞ、アシャ。そうやっていつまで逃げ切れるものか！」

ギヌアの嘲笑は続いた。

「おまえがいくら第一正当後継者だからと言って、宙道（シノイ）で三人も抱えては身動きとれまい！」

「ちっ、言いたい放題言いやがって」

忌々しそうなイルファの舌打ちに、ユーノは唇を噛んだ。

（確かにそうだ）

そっとアシャを盗み見ると、相手の目は依然鋭さを失っていないものの、その奥に、それと思わねばわからぬほどの疲労の影がにじみ始めているのが見て取れた。

ユーノ達には考えもつかない精神の攻防戦が行われているのだろう。

ず、とまた目の前の壁が形を失って崩れ落ちる。

「きゃ！」

突き出された黒剣がレスファートの片足を掠めた。少年が悲鳴を上げて後じさりする。

「く！」「レス！」

アシャがとっさに剣で黒剣を払いながら、すぐに壁を修復する。ユーノが引き寄せたレスファートは唇を噛みながらも、全幅の信頼を置いた目で彼女を見上げた。

「痛い？」

ユーノは瞬間相手を抱き締めた後、すぐに服の裾を剣で裂き、レスファートの傷に巻きつけた。

「へっちゃらだよ、これぐらい！」

本当は痛くて泣き出しそうなのを必死に我慢した声で、レスファートが応じた。頬が上気している。プラチナブロンドが乱れるのをうるさそうに振り払って、少年は気丈にアシャを見た。

「アシャは？」

「大丈夫だ」

アシャがに、と笑って答える。だが、次第に厳しくなる目は紫水晶の深みのある色ではなく、手負いの獣のそれに似た冷酷非情なものに変わりつつあった。

（『氷のアシャ』）

ふいにユーノの頭にそのことばが浮かんできた。いつか小耳に挟んだことのある、アシャのもう一つの呼び名だ。あの時は、いくら女連中にそっけないと言っても言い過ぎだろうと思っていたが、その呼び名を抵抗なしに受け入れられるほど、今のアシャは殺気立った、触れれば切れそうな気配だ。

「出て来い、アシャ！ そろそろ限界だろう！」

「っ！」

ギヌアの声とともに、またずるりと壁の全面近くが溶け落ちた。待ちかねていたように男達が声もなく剣を構えてのしかかってくる。

「ふ！」「は！」「でええい！」

同時に三筋の光が宙道（シノイ）を切り裂いた。

一筋はユーノの細身の剣、二人の兵の急所を確実に切っている。次の金の一筋は言わずと知れたアシャの剣、突っ込んできた相手の眉間を一闪、絶叫して仰け反る兵の脾腹にとどめを刺す。残る二人は、イルファの重い、例の赤いリボンつきの両刃で胴をなぎ倒され、呻く間もなく絶命する。

「ちっ！」

鋭いアシャの舌打ちが響く。今度は壁がなかなか戻せないのだ。

「かかれ！ ここで四人を屠ってしまえ！」

邪悪な喜びに満ちた声で叫ぶギヌアに促され、次々と飛びかかって来る男達をユーノとイルファ

が必死に防ぐ。

「アシャ、まだか！」

宙道（シノイ）に剣戟の響きが響く。レスファートは負傷した脚を蹴られ、呻いて座り込み丸くなっている。イルファの肩を擦った剣の持ち主は、次には胸板を狙ってきたが、イルファはとっさにそれを剣の柄近くで受け止めて、左手を相手の首に伸ばした。むんずと掴み上げ、力の限りにギヌアの方へ放り出す。だが、ギヌアはあっさりとそれを避け、邪魔だとばかりに切り捨て、三度嘲笑を響かせた。

「無駄だ！ 諦めろ、アシャ！」

「そうはいかん！」

きっぱりとアシャが応じ、ユーノが一人の兵士を撃退した直後、壁が復元した。

さすがにはあはあと息を荒げてへたり込むアシャの姿には疲労が濃い。次に壁を破られれば、もたないかもしれない。

「はっはっはあ！ 見事見事！ だが、私の作戦がちだ、アシャあ！」

ギヌアの挑発的なことばを聞くまでもなく、ユーノにもそれはわかっていた。このままでは、遅かれ早かれ四人とも倒れてしまう。

（四人、だから）

ぎゅっと唇を引き締めた。

そうだ、四人だからアシャの力に余裕がなくなるのだ。

「アシャ、宙道（シノイ）の出口って遠い？」

「いや」

アシャは荒い呼吸を何とか整えようとしながら首を振った。

「スオーガまでだから……もうそれほど……遠くはないはずだ……」

「この先にあるんだね？」

「そこは共通の出入り口だから…」

「入ったときの神殿のような？」

「……」

アシャは答えられない。必死に首を頷かせて肩を上下させている。

そのアシャを、ユーノは静かにじっと見つめた。

（アシャ）

禁を破って心の中で呼びかける。

（いろんなことが……あったよね）

セレドを出て、追いかけてきてくれて、魅かれて、けれど、レアナが好きだと知らされて。

幾度も無茶をしたのに、その度に怒りながらも助けてくれた。何度も命を救ってくれた。腕に抱かれたことも、口づけを受けたこともあった、けど……。

（いろんな……ことが）

ユーノは唇を一字に結んだ。そうしないと、取り返しのつかない一言を口走ってしまいそうだった。

しようとするのが、今までしてきたどんな無茶より危ないことは十分にわかっている。

アシャがどんなに怒るか、レスファートがどんなに泣くか、イルファがどれほど呆れるかも、ユーノには想像がつく。

（それでも今は、こうしなくちゃ誰も生きられなくなってしまうから）

なおためらう自分の心を、ユーノは必死に叱りつけた。

（何をぐずぐずしてるんだ。アシャはあんなに苦しそうだ。それに、今生の別れというんじゃない、ラズーンへ着けば会えるんだ）

それは、どれほど儚い望みだっただろう。

（ヒストに食料も水も地図もある、やってできないことはない、もともと一人で行くはずだったじゃないか）

揺らめくように記憶が蘇る。深い夜に炎を囲んで笑った。レスファートの優しい温もりに慰められた。イルファの大胆さに励まされた。そして何より、背後を護ってくれるアシャにどれほど自分が甘えていたのか、今ユーノはしみじみと感じていた。

視野の端、壁がぼとぼと崩れ始めている。もう、それほど時間がない。

（長い、夢だったんだ）

締めつけられる胸の痛みに繰り返す。

（幸せな、夢だったんだ）

一人で戦わなくていいという夢。仲間が居て、一人ではないという夢。

その夢が今、引き千切られようとしている。

(だから、全ては夢だったと思えばいい。最初から一人だったと思えばいいんだ)

そうすればきっと耐えられる。

「アシャ」

「うん？」

にっこり笑って、ユーノはいきなりアシャに両手を差し伸べた。

「ユー...?!」

うろたえて一瞬凍りつく相手の頬に軽く唇を擦らせ、すぐに離れながら笑った。

「しゃべり鳥(ライノ)のキスは返したからね！」

「ユーノ！」

アシャが我に返ったときは既に遅かった。ヒストの上に吸い込まれるように乗ったユーノが、掛け声をかける間も惜しむように、崩れ始めた薄い壁を突き抜けて宙道(シノイ)の方へ走り出す。

「逃げたぞ！ 追え！」

わあっと声が響き、ギヌアが叫んだ。

「ユーノ！ 馬鹿な！」

なだれるように遠ざかる一群にアシャは叫んだ。壁を消すのももどかしく、もう一頭の馬を引く。

だが、ヒストのような気性の荒い馬でこそ駆け抜けられた宙道(シノイ)、並の馬の胆力では無理難題、頼りのレスファートは突然のユーノの疾走に啞然として声もない。

「くそっ、ユーノ！ ユーノ！ ユーノッ！」

アシャは既に見えなくなってしまった少女、ただそのためだけに宙道(シノイ)行きに踏み切った少女の名を、空しく虚空に叫び続けた。

(ラズーンの神々よ！)

ユーノは唇を噛み、どこへ続くとわからぬ宙道(シノイ)の中を、ヒストの背中に身を伏せて、一路、スオーガにあるという出口を求めて速度を上げている。

追手は徒歩が多かった。追いつがってくるとすれば、あの『運命(リマイン)』の王、ギヌア・ラズーンのみだろう。

耳の近くで心臓の鼓動が鳴り続けている。恐怖と不安、全力疾走にべっとりと汗で濡れたヒストの体からは、獣の臭いを伴った湯気が立ちのぼっている。

(頼むよ、ヒスト)

心の中でユーノはずっと呟いている。

速く、速く。

一刻でも早く。

遠く、遠く。

たとえ一歩でも、アシャ達から離れて遠くへ。

明るさの差異のない宙道(シノイ)の中をただひたすらにヒストを急がせていると、走っているのか止まっているのか、次第に感覚が麻痺してくる。

喘ぐような自分の呼吸とヒストの荒々しい鼻息、汗で濡れた自分の体とヒストの体温、それらが溶け合い、溶かし合って、いつしかユーノは人馬一体となった、ある種の透明な境地を味わっていた。

「！」

ふいに、左前方に光が見えた。ヒストが眩さに驚いてたじろぎ、棒立ちになる。

「ヒストッ！」

かろうじてその体にしがみつき、ユーノは一喝した。激しく首を振って暴れかけたヒストがびくっとしたように前足を降ろし、再びぶるるっ、と首を振って蹄を鳴らす。乱れた息を弾ませながら、なおも戸惑うようだったが、ユーノの指示にゆっくりとそちらの方へ進み始めた。

「ようし、ほう」

次第に速度を上げて近づき、やがて、再び速度を落として、白く丸く開いた、洞窟からの出口のような境で立ち止まる。

「ふ...うっ...」

外に広がった光景に、思わず詰めていた息を吐いた。

空は曇天の灰色の布を敷き詰め、今にも雨が降ってきそうだ。地面には赤茶けた草が一面にそよぎ、湿った風が水の匂いを運んで来ている。耳を澄ませば、どおおっ.....という重い音が遠くから聞こえてくる。滝か、巨大な川でもあるのだろうか。遠く彼方には青水色の山々が

ぼんやりと霞んで見えている。

「ヒスト、行こう」

促すと、馬は宙道（シノイ）の入り口をそろそろと出た。興味深そうに草を踏みしめ、近くの岩棚に咲いている、鈍い紅の花の匂いを嗅ぐ。

「ここがスオーガかな」

ユーノは周囲を見回し、それから背後も振り返ってみた。途中まで確かに引き寄せていたように思っていた追手の気配が消えている。そう気づくと、ふいに堪え難い眠気が体を襲ってくるのを感じた。

「ちょっと休んでいこうか、アシャ...」

思わず呼びかけ、ユーノは固まった。

答えはない。

風がゆるゆると吹くだけだ。

「アシャ、か」

ユーノは苦笑した。

アシャはいない。レスファートも、イルファもない。

ユーノの回りには、もう、誰もいない。

不安とも恐怖ともいえないものが背筋を這い上がった。

(一人...なんだな)

「情けないぞ、しっかりしろ、ユーノ」

声を出して自分を叱った。

「もう、一人で生きていけなくなったのか？」

(もう、あの仲間といることに慣れてしまったのか?)

そうなんだ、寂しいよ。

そう心のどこかが答えたが、ユーノは強いてそれを無視した。

「よし、ヒスト！」

声をかけ、馬を進める。

岩棚の向こうに回り込むと、そこは小さく囲まれた平地になっていた。岩を背にすれば、すぐに襲われることはないだろう。

ユーノは溜め息をつき、剣を引き寄せ、ヒストの上で体を倒した。

(久しぶりだな、こうやって眠るの)

目を閉じると、ひしひしと寒い感覚が迫ってくる。

生まれて初めて感じる、深い孤独感だった。

(いまさら、何を?いつも一人だったじゃないか.....いつも、ずっと.....そうだ、ずっと)

自分はずいぶん弱くなった。

浅い眠りに入る直前、ユーノはそう心の中で呟っていた。

2.野戦部隊（シーガリオン）

（アシャ...）

呟けば、仄かな甘さが口に広がる。

（アシャ...）

闇の中に一条の光、金粉を散らし、膝を抱えて踞ったユーノを照らす。

その光は温かかった。凍てつき強張ったユーノの心を溶かしていく何かがあった。

（守って.....くれるの？）

自分を庇うように目の前に現れたアシャの背中に問いかける。

（姫として、守ってくれるの？）

アシャの気配が包み込むようにユーノを抱く。切ない吐息を身を震わせて吐き出しながら、ユーノは俯いた。ことん、と額をアシャの背中につけると、相手の体が静かに回った。そっと頭に置かれる大きな手、髪をまさぐり、優しく撫でてくれる、その甘さ。

（でも...アシャ）

眉をひそめ、おそろおそろためらいながら、そっとユーノは呟いた。

（私.....ちっとも姫らしくないんだ.....守ってもらえるもの...何一つ持っていない.....）

ふ、とアシャは笑ったようだった。

ばかだな、そんなことはないよ。

音にならない声がユーノの耳に快く響く。

ユーノはほっとして体の力を抜いた。微笑む、安心して、甘えようとして。

だが、その響きは、温かな優しさのまま、こう続けた。

レアナの大切な妹じゃないか。セレドの第二皇女じゃないか。そして、何よりも、ラズーンにとっはかけがえのない『銀の王族』じゃないか、それだけでも守られて当然だ。

びく、とユーノは体を強張らせた。そろそろ、顔を上げる。

（アシャ...）

違うのか？

響きは不審げに、どこかおどけてからかうように尋ねてきた。

それ以外の何かだっというのか？

（あ.....ああ）

ユーノは笑おうとした。

唇が震える。心が裂かれて血を流す。切なくひそめた眉を必死になって緩め、唇の両端を吊り上げ、目を細めて首を傾げてみせる。委ねてもたれていた体を、そっとアシャから引き離す。

（そう...だよ）

呟いた声が震えるのを堪えた。ひどく幼く舌足らずに聞こえるのに焦りながら、なおも唇を微笑ませる。とっさに、本当に不覚にも滲みそうになった涙を、できるだけ平然とした様子を崩さないように飲み下しながら、

（レアナ姉さまの.....妹、だものね）

くすり、と笑ってみせた。

（ほんとに、それだけだものねえ...）

くすくすと笑い続けるだけで、自分が壊れていくのがわかる。笑い声はユーノを嘲笑っている、主であるユーノの間抜けさを。

アシャも豊かで朗らかな笑い声を上げた。

どうしたんだ？ お前らしくないな。

（うん.....でも、そんなに、笑わないでよ、アシャ）

同じようにどんどん明るく笑いながら、ユーノは肩にかけられたアシャの手を冗談を装って払った。

その手は二度とユーノの体に触れては来ない。それとわかると、なんだか全てがひどくおかしくなってきた、ユーノはますます笑い続けた。

（ほんのちよっと.....間違えただけだよ、アシャ）

笑い続けている声は一点の曇りもなく響くのに、頬にひんやりと冷たいものが滑り落ちてくるのを感じる。

それを無視しようとして、ユーノはことさらアシャに話しかけた。

（あなたがあんまり優しいから.....私は姫君扱いされないってこと、ちよっと忘れてたんだよ）

涙が溢れる。とめどなく、胸に腕に体に降りかかり、夜露のように冷えてくる。

(だから.....ねえ、お願いだから、笑わないでよ、アシャ。私が.....ばかだっただけだって...認めるからさ.....私じゃだめだって.....認めるから.....お願いだよ、もう...笑わないで.....)

辺りに霜が降りたように寒くなった。

セレドではめったにみかけない、銀の霜。ざくざくと足下に固い抵抗を残して砕けていく霜。砕けた欠片は鋭い針のように、立ち竦むユーノの足を貫く。

と、その白々とした輝きの中から、ぐいぐいとギヌア・ラズーンの姿が立ち上がった。

はっとして笑いやんで、それを見つめるユーノの目に、世の魔『運命（リメイン）』を率いる長の紅の瞳が、残虐な輝きを増していくのが映る。

無意識に、さっきまでアシャが居た場所を振り返ったが、そこにはもう誰もいない。

ユーノ一人しか、ここにはいない。

淡く笑った。

(何を求めた？ 誰の姿を求めていた？)

向き直れば、ギヌアが、黒くなるまで人の血を吸ったと言いたげな『運命（リメイン）』の黒剣を差し上げているのが、目に飛び込んでくる。

(一人で戦え、ということだ)

唇を噛む。

いまさらだじろいでどうする。そんなに弱い娘だったのか。カザド相手に幾千もの、幾万もの夜を駆け抜けてきた自分が、アシャさえ手こずるような相手だからと言って、後ろを見せていいということにはならない。

ユーノは剣を引き抜いた。猛々しく青く、底光りする剣の重さが、今のユーノには唯一の慰めとなる。

気合いを込めた、と見る間に、ギヌアの黒馬がこちらを目指して駆け寄ってきた。待ち構え、呼吸をはかる。初めの太刀は耐え抜けるだろう。次の太刀も運さえよければ受け堪えられる。だが、三太刀めは？ その次の太刀は？

(考えるな)

ユーノは怯え始める自分を叱咤した。アシャ達のいる安心に慣れ切ってしまった心がぐずぐずと弱く座り込みそうになる。

(未来を考えるな。考えたところで、全ては一瞬、ラズーンの神のもとにしかない！)

黒剣が振り下ろされるのに、ユーノは渾身の力で剣を振り上げた。

ガキッ！

「っ！」

はっとして、ユーノは我に返った。

目の前に、夢の続きなのか、それとも現実なのか、ギヌアの冷たく整った顔が迫ってきている。一撃を受け止めた剣を支えた腕は、既にじんわりと痺れ始めている。

「ほほう」

満足げな声が相手の薄い唇から響いた。

「これは、たいした遣い手だったな」

にんまりと笑うと、端正な顔立ちが醜悪に引き撃れた。

「眠っていると思っていたのだが」

「く...」

受け止めたユーノには、そのことばに応じる余裕はなかった。押ししてくる力に抵抗するだけで精一杯、両脚の間で不安そうに猛るヒストを御する気力がない。食いしばった歯の間から、思わず細い呻きが漏れる。

「無茶なことをする『銀の王族』もいたものだ、こともあろうに、守り手たる視察官（オペ）を置き去るとは」

「こっ...ちの勝手.....だろ」

ユーノは小さく喘いだ。ぎりりっと刃が噛み合った部分から微かな火花が散ったように見える。

「そうだな、お前の勝手だろうよ。しかし、『銀の王族』狩りの格好の餌食となることまでは、考えていなかっただろう」

爛々と輝くギヌアの瞳の邪悪さに、ユーノはめまいを感じた。心を直接侵されるような不快感、じりじりとした痺れが腕の力を奪っていく。

殺られるな、と、心のどこかが悟り切ったように呟いた。

（死ぬ寸前なら、アシャを呼んでもいいかな）

醒めて冷ややかなその部分は、ぼんやりと虚ろに続けた。

死ぬ前なら、どここの誰にも迷惑はかからない。レアナに知られることも、アシャに届くこともなく、それでも満足して逝けるかも知れない。

その呟きは甘い香りを漂わせていた。心の空白を呼び込むような、全てを投げ出してしまえと誘うような声。

（死ねばいいのか？ 死ねば、この気持ちは.....全うされるのか？）

「ふふふふ...」

ギヌアは低い含み笑いを漏らした。片手でユーノに黒剣を押しつけながら、もう片方の手をマントの下に差し入れる。それから、ゆっくりと見せびらかすような仕草で、視察官（オペ）の徴の黄金の短剣を抜き放った。

装飾的な造りの剣が、どれほどの威力を備えているのか、ユーノはよく知っている。ガズラの湖での死闘、辺境の塔での戦い.....焼け焦げた傷を抱えてのたうち回る『運命（リマイン）』の姿と、肉の焦げ爛れるおぞましい臭いが、ユーノの感覚にはっきりと蘇ってくる。

無意識に体を強張らせたのだろう、こちらを凝視していたギヌアがことばの効果を十分に楽しむように、その短剣の切っ先をユーノに向けた。両手を塞がれ、無防備になっている彼女の鳩尾めがけて、すすると剣を進め始める。

「お前は幾度も、この剣による死を見て来ているな」

掠れるような、さっきまでの明瞭な声とは打って変わった、どこか妖しい喜びを含ませた不気味な声で、ギヌアは囁いた。

「だが、その体で感じたことはあるまい？ どれほどの苦痛か、どれほどの絶望か.....味わってみるのもよからう？」

ユーノの額から冷や汗が流れ落ちる。

塔での戦いで、ユーノは腹に傷を負った。その傷が再び口を開いて膿み出した気がする。今度はもっと酷い痛みかも知れない、そんな恐怖が勝手に体を走り抜け、力を削いでいく。

「他の『銀の王族』なら、私自ら狩りには来ん」

ユーノの体まで後少し、というところで、ギヌアは短剣を進めるのを止めた。ぎしぎし、なおもきしんでいる上方の剣の絡み合いを一瞥し、再びにやりと禍々しい笑みを広げる。

「だが、お前は特別だ.....アシャの保護下にあるからな」

くっくっくっ……と喉の奥で、ギヌアは陰鬱な笑い声を響かせた。

「私は、あいつの関わる全てのものを、できるだけ惨い方法で屠ってやりたいのだ。……そんなもので、あいつに味わわされた屈辱が消えるわけがないが……せめてもの代償としてな」

ギヌアの瞳はぎらついて憎しみに満ちている。その目の奥には、この前の戦いが再現されているのかも知れない。アシャの手加減、ミネルバの仲裁でようやく命長らえた戦いのことを。それは煮えたぎるような恨みとなって、ギヌアの心を呑み尽くし、焼き続けているのかも知れない。

ユーノが抵抗を強めたのを感じたのか、ギヌアは再び剣を進め始めた。切っ先が僅かにユーノのチュニックに触れ、横に揺れたような動きで擦れ合った、たったそれだけの接触だったのに、チュニックはあっさりと裂かれて、淡い色の煙を上げた。恐ろしい切れ味だ。

「く…」

竦む体に、ユーノは二重に焦った。

(このままじゃ…確実に殺られる)

危機感がぼやけた意識を払いのけた。その時、いかなる天の配剤か、曇っていた空からついにぼつりと雨滴が落ちてきた。ほんの一瞬、ギヌアの気がそちらに逸れる。

万に一つの活路を見出そうとしているユーノにとっては奇跡の瞬間、声にならぬ気合いとともに、重なっていた剣を引きはがし、同時に片足を振り上げ、突然剣から力が抜けたせいで前へのめり込むような姿勢になったギヌアの顔めがけて爪先を叩き込む。

「はっ」

「ち！」

だが、さすがに『運命(リマイン)』の王、ユーノの動きはギヌアに捉えられていた。すぐに体勢を立て直したギヌアは、寸前にマントで視界を遮りながら飛びすさって、足蹴りを避ける。

二人は再び間を空けて対峙した。

はあはあと息を荒げ、肩を上下させながらギヌアの動きを警戒しているユーノ、それをじっと見返すギヌアの目に、ふいに異様に朗らかな喜びが満ちた。

「なんと、な」

低く囁かれた声が、感極まったように呟く。

「お前は……素晴らしい獲物だ」

ユーノはぞっとして身を竦めた。

『運命(リマイン)』の立場の正否は別としても、ギヌア・ラズーンには持って産まれたと言ってもいい、独特な禍々しい気のようなものがある。

ギヌアはじろじろとユーノを、頭の前から足の先へ、再び足の先から舐め上げるように頭の上へと視線を動かした。

「ユーノ・セレディス……ふうん」

舌で転がし、噛み締めるように名前を呟く。

「さぞ、楽しい狩りになるだろうな」

薄い酷薄そうな唇を綻ばせた。

ぼつ…ぼつ、と間合いを縮めて落ちて来る雨に目を細める。

「お前が欲しいな」

切望に近い声音。

「お前の血を、我らが祭壇に、一滴残らず捧げてやろう……お前は、それに十分償する。このうえない扱いだ、感謝するがいい」

「不愉快な趣味だな」

ユーノが吐き捨てると、ギヌアはより嬉しそうに嗤った。

「それをかきたてるものを、お前は持っている」

ギヌアは黒剣を無造作に振り上げた。ユーノも剣を構えた。恐怖だろうか、それともぎりぎりの誇りだろうか、体を小刻みに震えが走る。

「まずは腕、一本」

「！」

何をする間もなかった。ぴりっとふいに左腕に痛みが走り、ユーノはとっさに悲鳴だけを何とか噛み殺した。

(剣筋もわからない)

衝撃に体がふらついている。左腕には、まるで稲妻に打たれでもしたような黒い焦げ痕が刻まれている。力がそこから一気に抜け落ち、剣も支えられなくなって、ユーノは右腕一本の力で剣を構えた。

(やっぱり、ただの剣じゃない)

もう剣はそこから離れているのに、傷痕そのものが何か別の生き物のように、ユーノの表皮から中へ、体を食い荒らしに入ってくるような感覚だ。出来る限り早く、傷を受けた部分を切り落とさなくてはな

らない、そんな不安さえ胸に広がる。

「それでも、本能的に避けた、か」

ギヌアはますます楽しそうに続けた。

「傷は痛いだろう？ ただの『運命（リマイン）』の剣と思うなよ……視察官（オペ）が使う黒剣、その威力は」

にいやり、とギヌアの顔が歪む。

「これから存分に味わえるがな」

（鬪り殺しにする気だ）

ユーノは左腕から広がってくる痛みから、必死に我を取り戻そうとした。

「次……左脚、一本」

気負いもせずに淡々と宣言した瞬間に伸びて来る剣に、ユーノは青眼から剣を動かさなかった。避けられるとすれば、ぎりぎりで躲すしかない。その躲した瞬間に飛び込んで仕留めるしかない。あえて左脚を餌にしての、相打ち覚悟だ。

（この一撃で終わりだ、勝つにしても、負けるにしても）

が、その時。

ふいに、予期せぬ叫びが密度を増していく雨の垂れ幕の彼方から沸き起こった。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

わああっ、と怒濤のような声が響き渡る。それと同時に大地を揺らす、重い蹄の音が辺りを圧する。

凄まじい音量だ。

「オーダ・シートス！ オーダ・レイ！」

レイ、レイ、レイ、と声が続いた。

ちっと忌々しそうに舌打ちするギヌアが振り向いた方向から、地面を這う黒雲のような塊が押し寄せてきた。驟雨の中をもものともせず、およそ百騎ほどの群れが声を上げながら走り寄ってくる。

馬ではない。深い緑色の肌、尖った耳と嘴を持った四つ足で走る竜、のような動物だ。

「シーガリオンか！」

ぐ、とギヌアは手綱を引いた。悔しげに、

「とんだ邪魔が入った！」

突進してくる竜達の進路から、少々うろたえたように馬を移動させる。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！ レイ、レイ、レイ、レイ、レイ！」

竜には武装した男達が乗っている。そして彼らは、ユーノが聞き慣れないことばを繰り返し叫びながら押し寄せてくる。

（シーガリオン？ ああ、そう言えば）

アシャから聞いたことがある。

ラズーンの南の平原には、野戦部隊（シーガリオン）という荒くれ男達の部隊があり、ラズーンの外部防衛に当たっている。見かけはごついが性格はおとなしい、しかし、一旦怒らせれば一都を灰燼にするという平原竜（タロ）を乗り回している、と言う。

今、押し寄せてきている一隊は、まさしくその野戦部隊（シーガリオン）に違いない。平原竜（タロ）の上に一人か二人ずつ、深い緑の鎧を着け茶色の衣の裾をなびかせた、体格の良い男達が乗っている。身に帯びている剣や抱えた投げ槍が、雨の中でぎらぎらとユーノの目を射てくる。

猛々しい壮観さ、草原の王者の群のような力強さは、ユーノを圧した。自分も避けねば、その流れに押し潰されると気づいた時には既に遅く、ユーノは奔流のように駆け抜ける野戦部隊（シーガリオン）の群れの中に呑み込まれていた。

時は少し遡る。

宙道（シノイ）の中でユーノに置き去られたアシャは、これ以上ないほどの不機嫌さを撒き散らしながら、短剣をおさめた。

ユーノの後を追おうにも馬は動かず、腹立ち紛れに飛びかかって来た兵を情け容赦なく切り捨てて、それでもなお怒りがおさまらない。

（一体、誰のために、何のために、俺が宙道（シノイ）を選んだと思ってる！ あの馬鹿は！）

心の中で喚き散らして、ふいにアシャは我に返った。

（そうだ.....俺はまだ、それをユーノに伝えていない...）

激情がみるみるしぼんでいくのがわかった。

（結局は、俺のせい、なのか？）

駆け去る寸前、ユーノはしきりと宙道（シノイ）の出口のことを聞いていた。あの時から、ユーノの頭にはこの計画があったのだろうに、アシャはそれを感じ取れなかった。

「レス...」

そこでようやく、アシャは自分の足下で丸く体を縮めているレスファートに気がついた。かがみ込むと、少年は傷に巻かれたユーノのチュニクの切れ端を押さえたまま、声もなく泣き続けている。

「大丈夫か？」

「どうして...」

ひくりとしゃくりあげながら、レスファートは目を見開いた。濡れたアクアマリンの瞳が眩いほどに煌めいて光を放つ。

「どうして、いつも、ぼくをおいていくの？」

ぼろぼろ涙を零しながら、レスファートは体を起こした。差し伸べたアシャの手に縋って、左脚を引きずりながら立ち上がる。

アシャはレスファートの間にしゃがみ、相手の顔を覗き込んだ。

「どうして、ゆーの、ぼくを...」

「レス...」

痛々しくなって、少年をそっと抱きかかえる。

レスファートの問いはそのままアシャ自身の問いでもある。

まるで、自分が小さな子どもに戻って、ユーノを求めて泣いているような気がした。

（どうして、俺を置いて行く？）

「俺だって、同じだよ、レス」

つい、弱音を吐いた。

「アシャ...」

う、わあっ、と堰が切れたように、いきなりレスファートはアシャにしがみついて泣きじゃくった。

ユーノをかけがえなく慕っているレスファートにとって、ユーノに置き去られたことは母親に捨て去られたことと同じように思えるのかも知れない。体中を震わせ、もはや傷の痛みもわからぬように、ユーノ、ユーノ、と繰り返しながら泣き続ける。

「...まあ.....いい度胸、だよな」

イルファが溜め息まじりに呟いた。

「自棄、と言った方がいいのかも知れんが」

「ああ」

重く応じながら、アシャはレスファートを抱き上げて立ち上がった。顔に両手の甲を押し当て、ひっく、ひっく、と息を引いているレスファートに優しく囁く。

「レス、泣くなよ。ユーノはきっと大丈夫だ。何かあったら、きっとレスを呼ぶだろう。それを聞いてもらわなくちゃならない。泣いてちゃ、わからないだろう？」

「ひっ.....う、うん...」

レスファートははっとしたように頷いた。頬の涙を、慌ててごしごしとこぶしで擦る。

「それに、お前が泣いていると馬が怯える。俺達がユーノを探しに行くのが、一層遅れるぞ」

惨い台詞だが、真実だ。

「ん」

きゅ、とレスファートは唇を結んだ。赤くなった目の縁や鼻の辺りをなおも擦りながら、何とか泣き止む。だが、突然支え手を失った不安が強いのだろう、片手でしっかりとアシャの首を抱えて離さない。

それと見てとったイルファがのっそりと馬に跨がった。両手をレスファートに差し伸べる。

少しためらった後、レスファートはイルファの方へ両手を伸ばして体に移した。

「レス」

イルファは少年の小さな体を抱き取って鞍の前へ乗せながら、珍しく真面目な声で続けた。

「あいつは大丈夫だ。あれだけの男が、そうやすやすと殺られるはずがなかろう。俺はあいつの腕を信じるぞ」

そのイルファの声には自覚していないのだろう、密かな尊敬がある。

(あれだけの男、か)

アシャは複雑な思いで宙道（シノイ）の彼方へ目を向けた。

「あ...あ？」

ユーノは思わず小さく声を漏らした。てっきり押し寄せた平原竜（タロ）の下敷きになったと思ったのに、大群は自分を避けて巧みに周囲を駆け抜けていく。

（あれだけの速度を出しながら、よくこれほど見事に私達を避けていける）

一糸乱れぬ統制で、平原竜（タロ）の群れは、ユーノの周囲に僅かの隙間を空けて、動く壁を作っている。

それはまるで、ギヌアの中からユーノを囲い込むかのようなようだった。

ヒストが今にも走り出しそうだったが、あまりの驚きに気力が萎えたのか、嘶き首を振りながら、その場から動こうとしない。

流れる深い緑の壁を呆然と見つめていたユーノは、その中から、より鮮やかな緑の肌をした平原竜（タロ）が、群れの中をすするとこちらへ走り出てくるのに気づいた。

（誰だ？）

乗っているのは、野戦部隊（シーガリオン）に共通した褐色の肌の大柄の男だ。硬そうな黒い短髪と口ひげをたくわえている。瞳は鈍い黄色で、鋭い光をたたえているものの、ユーノを見るとどこことなく和らぎ、側まで平原竜（タロ）を寄せて来ると、何かを叫んだ。

「え？」

やや小止みにはなっているものの、赤茶色の草原に降る雨音と平原竜（タロ）の足音でよく聞き取れず、ユーノは首を傾げた。それをすぐに察したらしい。男は濡れた黒髪をかきあげてから、その手をぐい、と平原竜（タロ）の向かう方向へ伸ばした。

（来い、と言っているのか？）

平原竜（タロ）のどこに呑まれたのか、姿のないギヌアを探したが、いずれにせよ選択の余地はない。今再び対峙すれば、次はもうもたないだろう。

ユーノは、そっとヒストの腹を蹴った。ぶるるっ、とヒストが首を振り、何か憑き物でも落としたようにゆっくりと向きを変える。やがて、周囲を走る平原竜（タロ）の中にじんわりと紛れ込みながら、ふてぶてしい様子で体を揺すり、小さく嘶いた。雪白（レコーマー）達と走ったことを思い出したのかも知れない。

そのヒストの動きにびたりと体を合わせ、ユーノは馬の背中に身を伏せた。男がにやりと笑い、それでもふと気遣わしげにユーノの左腕を見る。だが、それも一瞬、手にした紅の房飾りの槍を突き上げ、一声高く叫んだ。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

びく、と体を竦めたヒストに、ユーノは体をひたりと寄せる。安全と安心を体温と動きで保証する。馬の怯えはすぐにおさまった。

「オーダ・シートス！ オーダ・レイ！ レイ、レイ、レイ、レイ！」

どう、っと周囲の平原竜（タロ）の乗り手からも声が上がった。さすがのヒストも、今度は今にも縮み上がりそうだが、ユーノへの信頼か、それでも堪えて走り続けてくれる。

「オーダ・レイ！ オーダ・シーガル！」

男が再び声を上げると、レイ、レイ、レイ、レイと掛け声が戻ってきた。

（どこへ行くんだ？）

その群れから離されまいと、ユーノはヒストを必死に駆った。

ギヌアの悔しげな叫び声が空を衝いたようだったが、さすがにいくら『運命（リメイン）』の王と言えども、たった一人では、百騎近い野戦部隊（シーガリオン）相手に立ち回る余裕はないと判断したらしく、すぐに声も気配も消え去った。

野戦部隊（シーガリオン）は、どうやら遠征の帰りらしかった。

赤茶けた草原を走破し、岩棚が重なり合うような窪地近くに来ると、まとめる声もかからぬのに、それぞれ勝手知った手順のように平原竜（タロ）から滑り降り、鞍の後ろに括りつけていた厚布や棒や毛皮で天幕（カサン）を張った。

定められた配置があるのだろう、部隊全体が各自天幕（カサン）を張り終えた頃には、雨はすっかり上がっていた。

男達が笑いながら、布で自分と平原竜（タロ）の体を拭き、火を焚き、食べ物の調理にかかる。

ユーノは戸惑っている間もなく、先ほどの男に促されて、やや小振りの天幕（カサン）に入った。こ

ここで身支度を整えてくれればいい、と短く伝えられて、有難く服を脱ぎ、体を拭いて、ヒストに括りつけていた予備の衣服を身に着ける。かなり湿ってはいたが、これだけの火があつてあたらせてもらえれば、すぐに乾くだろう。

雨に濡れて冷え始めていた髪をごしごしと擦っていると、入り口の垂れ幕の向こうで低い声がした。

「入るぞ、客人」

「はい、どうぞ」

顔を覗かせたのは声をかけてきた男だった。相手も濡れた服を着替え、裾を引きずるような焦茶のmantleを、緑色がかつた金属の鎖で首から肩に巻き付けている。

「腕はどうだ？」

「たいしたことはありません」

ユーノは微笑した。

左腕はまだ微かに痺れているが、相手の意図が汲み取れないうちに手札を晒すわけにもいかない。

「助けて頂き、ありがとうございます」

「礼には及ばん」

男は穏やかな笑みを広げた。歳の頃は四、五十ぐらいか。したたかな面白がるような光を目に浮かべて、

「俺はシートス・ツェイトスと言う。ラズーン野戦部隊（シーガリオン）隊長だ。遠目でしかとは見えなかったが、『運命（リメイン）』を敵とするものは、何者であろうと我らの兄弟と同じだと考えているのでな」

「『運命（リメイン）』を敵とするもの...」

「そうだ。ラズーンより、近在の『運命（リメイン）』に降りた者共を叩きに遠征してきたところだった。気づいてなかったかも知れぬが、お前が戦っていたあの男は、濃い『運命（リメイン）』の気配をたたえていると物見（ユカル）が言うのでな。たった一人を全軍で襲うまでもあるまいと、とりあえずはお前を攫う方法を取ったのだ」

「それなら」

ユーノは眉をしかめて唇を噛み、低い声で応じた。

「ボクもろとでも、あの男を葬った方が良かった」

「何？」

「あいつは、ギヌア・ラズーン。『運命（リメイン）』の王です」

「何と！」

シートスの黄色の目に野獣じみた光が宿った。

「それでは、あいつが『太皇（スーグ）』に背反し、ラズーンを滅ぼそうとする下劣な魂の持ち主か！」

「そうです」

応じながら、ユーノは不安になった。

ギヌアはユーノを屠るのに失敗した。となれば、また矛先を変えて、アシャ達を追撃にかかるだろう。

「まさか、あんなところで、それも不敵にもたった一人で現れるとは.....。.....しかし」

シートスは悔しそうに唸ったが、ふと気づいたようにユーノを凝視した。

「なぜ、お前はそんなことを知っている？ 出で立ちからして旅の者のようだが、あまりにも軽装、かと言って、この辺りでお前のような姿を見たことがない.....仮にもギヌアと立ち会える腕はただ者ではないと思うが.....こちらにそんな旅人の情報は入っていない」

シートスの目は緩やかに細められた。

「お前ほどの者が、我ら野戦部隊（シーガリオン）に知られぬはずはない」

「申し遅れました」

相手の目の奥に宿った殺気に、ユーノは居住まいを正した。

「改めて名乗ります。ボクはセレドのユーノ・セレディス。ラズーンから招かれて旅をしていたところ、いきなり.....あいつに襲われたんです」

「何」

シートスはますます訳がわからないという顔になった。

「とすると、何か、お前は『銀の王族』なのか？」

「一応は」

「しかし...」

シートスはなおも訝しげに、

「武勇に優れた『銀の王族』など、いるとは...」

「ボクは...できそこない、なんです」

ユーノは苦笑した。

「しかし、なあ、ううむ.....。いや、おう、これはいかん」

納得しかねるという顔で首を捻ったシートスは、唐突にユーノを見た。
「客人を仲間に紹介もせず、こんな火の気のない所に凍えさせておくとは、俺もどうかしている。こちらへ来てくれ、皆が待っている」

促されて、ユーノは天幕（カサン）を出た。

あちこちに点在する天幕（カサン）の近くには、平原竜（タロ）が数匹ずつかたまっていた。滑らかな金属片を繋いだような緑色の鱗が、中央の広場に焚かれた炎にきらきらと光っている。尖った耳にはそれぞれの乗り手の紋章なのか、金、銀、青銅、赤銅などの薄板が挟みつけられ、見事な彫り物が施されていた。辺境のイワイヅタあり、『黒の流れ（デーヤ）』あり、クフィラあり、細工は様々で濃い陰影をたたえている。

「『銀の王族』には、視察官（オベ）が一人、付き添っているはずではなかったか？」

先に立ったシートスが考え込んだ声で尋ねてくる。

「ちょっと途中でもめて。ボクが飛び出してきてしまったんです」

ユーノは応じた。嘘はついていない。

「無茶なことを」

シートスは溜め息をついた。

「深窓育ちの『銀の王族』が、一人でラズーンへ向かおうとは正気の沙汰ではない。お前の視察官（オベ）は誰だ？ お前のような子どもに置き去られるとは、とんだ間抜けだな」

「えーと...」

ユーノはややくしくなった話の流れに口ごもった。

「『太皇（スーグ）』にご報告した方がいいかもな。いったい、誰なんだ？」

「.....アシャ・ラズーン」

「何と！」

シートスは驚きのあまり、立ち止まってしまった。のろのろと振り返り、ユーノが嘘をついているのではないかと怪しむような様子でゆっくりと口髭に触れる。

「あの、アシャ、だということか？ お前は知らないかもしれないが、ラズーンの第一正統後継者.....諸国放浪の旅に出してしまった、あの、アシャだと？」

「ええ、はい、まあ」

居心地悪くもじもじすると、シートスは静かにユーノを見下ろして呟いた。

「他の者なら疑いもする。だが、なるほど、それなら、ギヌアがお前を狙ったわけもわかろうというものだ」

続けて何事か言いたそうな顔になったが、考え直したように首を振り、火の側へユーノを導いた。

焚き火の間近で、数人の男が串に刺した岩とかげを焼いている。ジュツ、と熱い音がして肉汁が落ちると、香ばしい匂いが立ちのぼる。側の男は口から尻尾まで棒で貫いた岩とかげを次々と火に炙り、ひっくり返す。

岩とかげから上がる油っぽい煙と、炎それ自体から上がる清新な煙が入り交じり捻り上がって、あまり星の出していない灰色がかかった空へゆっくりとたなびいて行く。

煙は居場所を知らせるもの、それが立ち昇るのを妨げもしない様子に、野戦部隊（シーガリオン）の自信が伺える。来るなら来い、我らは野戦部隊（シーガリオン）、お前の覚悟を見せてみろ。響かぬ声が誇りを叫ぶ。

炎の熱が冷えた体と心をゆっくりと暖め、しばしユーノはぼんやりと炎を見つめた。

「おう、見られよ、客人」

ふいに、シートスが、その煙の上がる彼方の空を見上げて促した。上向いたユーノは鳥達が飛べぬ薄暗い闇を飛翔する影に気づいた。にっこり笑って、高々と左腕を差し上げる。

それをシートスは複雑な、しかし満足そうな顔で一瞥した。ユーノの左腕に軽々と舞い降りて来た白い姿に頷く。

「実は俺達がお前を見つけたのは、そのクフィラのせいなのだ。人には慣れにくいはずのクフィラが、何を知らせて巡回しているのかを知りたくなっとな」

「そうですか。.....ありがとう、サマルカンド」

「クェアツ」

真っ白な体躯に真紅の十字を額に刻んだクフィラは、夜もその額の十字の力で目的地を見定め飛ぶことができる。ユーノの左腕に爪をたてないようにそっと乗りながら、サマルカンドは甘えた声で鳴いた。

その一瞬、ひくりとユーノの体が強張る。傷の上にクフィラが乗ったのだ。だが、唇を噛むことすらなく、少し眉を寄せた程度で、クフィラの背中を撫でた。

「ユーノ」

シートスが低く深い声で尋ねてきた。

「幾つになる？」

「十七」

「それでもう、傷を受けた左腕を庇わない癖と、右腕を空けておく習性を身につけているのか？」

「あ...」

ユーノは素早くシートスを見上げた。

せっかくの命の恩人の機嫌を損ねてしまっただろうか。

やや不安になって相手を見つめる。

「ごめんなさい。あなたを疑っているわけじゃありませんが...つい」

「なるほどな」

シートスは吐息をついた。

「どうやら、お前の戦いはこの旅で始まったようなものじゃない、もっとずっと昔からのものらしい」

(私の...戦い...)

ユーノは僅かにシートスから視線を逸らせた。

(うん.....昔から.....長い...長い戦いだよ、シートス)

そして、何と肌寒い想いだっただろう、その戦いに伴う記憶は。

「それだけの武人には、我ら野戦部隊（シーガリオン）も、心からの敬意を払わなくてはなるまいな」

沈んだユーノの気持ちを引き立てるように、シートスが口調を変えてにやりと笑った。

「ギヌア・ラズーンはかなりの遣い手と聞き及んでいる。その男を相手に持ちこたえていたお前と、是非手合わせを願いたいと仲間の幾人かが申し出ているのだが」

「え？」

ユーノはぎょっとした。二人が現れたのに気づいたのだろう、焚き火の近くに居た男達が、ちらちらとこちらへ視線を投げてくる。横顔を火に照らされた顔はどれも精悍、髭面あり、傷痕あり、誰一人たるんだ気配のものなどいない。

「まさか！」

「まさかではない。今回の遠征は意外に手応えがなくてな、皆、退屈しているのだ」

シートスははからかうように言い放つと、男達の方を向いた。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

「オーダ・シートス！ オーダ・レイ！」

炎を囲んでいた男達が、シートスの呼びかけに、わっと片手の拳を突き上げて応える。

「何？」

「栄えあれ、ということだ。栄えあれ、野戦の民！ 栄えあれ、永遠に！ 我らの祈りと言ってもよい」

「そうだ、栄えあれ、シートス、我らが隊長よ」

一番近くの岩に腰を降ろしていた、まだ年若い男が頬を上気させて続けた。

「こら。客人の話も聞かず、身内を褒めてどうするのだ、物見（ユカル）」

シートスが苦笑いして窘めるのに、ユカルと呼ばれた男は肩を竦めて見せた。物見（ユカル）と呼ばれるだけあって、はしこそうなきらきらした焦げ茶色の目をしている。

「ようし、皆、聞いてくれ」

シートスの声に、男達が雑談を止めて集中した。

「この客人は、ラズーンの『銀の王族』、セレドのユーノだ」

「何？」

「『銀の王族』？」

「しかし、そのクフィラは...」

「『銀の王族』が剣士などとは...」

「そして、彼の視察官（オベ）は誰だと思う？」

騒然とした野戦部隊（シーガリオン）の声を軽く制して、シートスが問いかけた。続くことばを、それとなく予想した者がいたのだろう、ごくりと唾を呑む緊張した気配が広がる。聞き手の期待を焦らせたシートスが、薄笑みを浮かべながら言い放つ。

「アシャ・ラズーンだ」

うおおっという興奮した叫びが上がった。

「従って、我らは今日よりしばらく、アシャからの客人を受け入れることになる。皆、心して働けよ」

「おうう！」

地鳴りのように同意した男達は、それぞれに熱っぽい目でユーノを見た。だが、ユーノが戸惑っている気配をすぐに察したのだろう、どこか照れくさそうに、それぞれの仕事に戻っていく。

「我らはかつて、あの方の下で働いたことがあるのだよ。あの方はまさに真の武人、卓越した指導者、機を読み、策を練る最高の軍師だ。武術に優れ学を保ち、なおかつあの美貌だ」

シートスは焚き火の一角にしつらえられた場所にユーノを案内しながら、髭に隠された口元に懐かしそうな笑みをたたえて、男達の興奮の理由を話してくれた。

一枚の薄い皮の敷物、その上に落ち着いたシートスの隣に腰を降ろす。ユーノの腕から離れたクフィラは、差し出された岩とかげの皿からユーノが投げた肉片を数切れついばんだ後、再び暗い空へと哨戒に舞い上がっていく。

「ボクはアシャのことはほとんど知らない」

問いかけるようなシートスの視線に、ユーノは呟いた。

「それほど凄い人なんですか？」

アシャの凄さは十分に知っている、が、ラズーンに絡んだアシャについては何も知らない。シートスは、そのユーノの知らないアシャについて話してくれそうな気配だった。

「ああ、それはもう」

シートスは皿から岩とかげの肉を取り、唇の端で噛み千切った。

「俺があの方と戦いに出たのは一度きり……『黒の流れ（デーヤ）』反乱のときだ」

淡い苦笑がシートスの日焼けした顔に滲んだ。

「その頃の俺の目ときたら、ひどく曇っててな。『黒の流れ（デーヤ）』の反乱鎮圧のためにラズーンから来る総隊長と聞いて、どれほどの男が出てくるかと思っていたが、あのよういきらびやかな容貌の持ち主が来たと知って、ずいぶんと荒れたものだ」

ぱちっ、と湿り気を帯び出した夜気に炎の中の木の枝が弾け、火の粉が舞い上がった。ユーノはもちろん、ゆっくりとシートスの話を聞くように火の回りに集まり出した男達も、思い思いの格好で、ある者は酒杯を空け、ある者はとかげの串を手にはしている。

「アシャ・ラズーン、が何者かさえ知らずにな……」

「いったい、あんな優男に何ができる！」

シートスは若かった。この窮状を理解していないとしか思えないラズーンの判断にも苛立っていた。無理もない。

その頃のアシャは、当時のシートスよりもまだ若く、まだ十七、八。ラズーン内部でも、武人の間というよりは、主として貴婦人達の間で有名な男だったからだ。

ある詩人は、波打つ髪は黄金、瞳は山深い谷の紫水晶、誇り高い唇は紅瑪瑙、肢体は真珠、視線は銀、と歌った。また、他の詩人は、太陽の冠を戴きし、ラズーンの泉の光の少年よ、と褒め讃えた。

確かに、アシャがただでさえ眩いその髪に、真紅の髪留めを巻きつかせ、同じ濃い紅のマントを羽織り、細身に優雅な仕草を備えて人々の前に現れれば、大方のものは男も女もことばを失った。華美というにはあまりにも無駄のない、華麗というにはあまりにも嫌みのない、ただただ整ったその美貌は、多くの婦人の憧れの的だったし、男達の密かな羨望と嫉妬の標的となった。

ほっそりしたたおやかな姿や女性的な顔立ちからは、その手に剣を想像させなかったし、人々の願いを見事に叶えて楽器も歌も、踊りも語らいも、アシャは巧みで得意だった。

だがその本分が、実は他の何者も比類出来ないほどの戦いの才能だと知ったのは、シートスが『黒の流れ（デーヤ）』の反乱一厳密に言えば、『黒の流れ（デーヤ）』流域の隠れ『運命（リマイン）』の反乱一鎮圧も大詰めに入った、ある夜のことだった。

その夜、シートスは呼び出されて、不承不承、アシャの天幕（カサン）に入った。

アシャは殺気立ち疲れ切った部隊の気配を知らぬ顔で、のんびりと寝そべり、気怠げな、どこか艶っぽささえ感じさせる仕草で髪をかきあげていた。

（話があるならさっさとしろ）

中央から来る愚かな司令官は、時に、自分の疲労を癒すためにとんでもない要求をこちらに吞ませようとする。そういうことに野戦部隊（シーガリオン）が、ましてや隊長シートス・ツェイトスが応じるはずもないが、それをアシャが理解しているとも思えない。豪華華美な宮廷文化に慣れた男が、一夜の寛ぎを求めるならば、正当防衛を盾に切り捨ててもいいだろう、そういう目論みさえあった。

横を向いて、その実アシャの一挙一動に注意を払っているシートスが焦れているのを、知っているのか知らぬのか、アシャは外したマントを無造作に放り投げた。

「シートス」

「はい」

「この戦いで、こっちが勝つのはどれぐらいの確率だと思う？」

「.....」

シートスは相手の意図を量りかねた。だが、今頃になって、そういう間拔けたことを口にする指揮官に対する侮蔑は、十分視線に込めたはずだ。相手が気づかないとは思えなかったが、アシャは気にした様子もなく、問いを重ねた。

「正直に言ってみてくれ」

「.....おそらく、三割強か、と」

「俺もそう思う」

予想外のアシャの応えにおやとは思った。だが、いや、まだわからんぞ、と思い直して、依然むっつりしたまま、シートスはアシャを見返した。

その彼を平然と見上げて、アシャは続けた。

「しかし、負けるわけにはいかないだろう」

（当然だ）

「.....」

シートスの沈黙にアシャが婉然と微笑んだ。

「今夜殴り込むが、ついて来るか？」

「っ」

さらりと黄金の髪が垂れ落ちる、その背後の瞳に紫の炎が煌めいた。

今でもシートスは、その時のことをありありと思い出すことができる。不敵というには、あまりにも艶やかに微笑んだアシャの顔も、揺らめく灯火も。

「さすがの俺も、すぐには返事ができなかった。『黒の流れ（デーヤ）』流域の住民から、扇動者を引きずり出そうというのが彼の計画、『黒の流れ（デーヤ）』を馬で下っていくというとんでもない作戦

も、それが聞き始めだった。結局、俺はあの方と一緒に殴り込みをかけ、見事に成功した。もちろん、反乱鎮圧が成功したのは言うまでもない」

シートスは自慢げに、周囲の男達のぼかんとした顔を見回した。

「『黒の流れ（デーヤ）』を馬で下る、だと...」

「そんな.....鬼神ではないのか、アシャというの.....」

「あのアシャが...」

「何を言ってる！」

新参らしい男達一物見（ユカル）も入っている一が、呆れ声を上げるのに、古参が言い返した。

「『太皇』（スーグ）』以外で、『泉の狩人（オーミノ）』を御せるとすれば、アシャか、ミネルバだと言われておるのだぞ」

「げ」

「『泉の狩人（オーミノ）』をねえ...」

まだ半信半疑の新参兵に、やれやれと古参が肩を竦めるのに、シートスは静かに、だが力強く笑った。

「まあ、ラズーンでアシャに会えば、すぐにわかる。今度の『運命（リマイン）』との戦いは、これまでにない大規模なものになるとのことだからな」

シートスはユーノを振り向いた。

「.....アシャがラズーンを出たのは、それから、半年ほどがたった日のことだ」

「どうして？」

「さあ.....詳しいことは誰も知らんだろう、アシャ本人以外にはな。だが、冗談まじりには聞いたことがある。『探し出すべき人を探し出しに、出会うべき人と出会うために』と言うことだった」

ユーノの問いかけに、シートスはやや白けた笑いを浮かべた。

（『探し出すべき人を探し出しに、出会うべき人と出会うために』）

ユーノは心で、そのことばを繰り返した。

（そして、アシャはレアナ姉さまと会った.....）

ギアナの裏切りによく逃げ込んだセレドの往来、あの美しさも埃に塗れては人を魅きつけることもなく、ただ路上に倒れていたアシャを、レアナは優しく救い上げた。その白い腕がどれほど眩しかったのか、薄紅の唇がどれほど甘く微笑んだように見えたのか、ユーノには容易に想像がつく。

同じように、今までどれほど多くの国の王子が、レアナの笑みのために遠い山を駆け抜け、流れを渡り、馳せ参じることか。

（懐かしい...）

アシャと出会ったのが、ずっと昔のこのようだ。

ユーノはそっと唇を綻ばせた。

（こうして、何もかも思い出になっていくんだろうな）

これほど切ない想いも、いつかは若い頃の思い出の一つとして、心の宝石箱に転がしておける時が来るのだろう。

ユーノはそれまで待てばいい。それまで、この想いを、一言一動作にも示さなければいい。

「あれほどの才を持ちながら、さても夢見がちな男だ。.....もともと、あの容貌には似合っている かな」

シートスのことばに、ユーノはくすりと笑った。

イルファのことを思い出したのだ。妻にしようとしてまで思い詰めていたと聞いたことがあるから、アシャが男だと知った時はさぞかし驚いたことだろう。

（無理もない）

溜め息まじりに温かい赤と黄色の炎を見つめながら考える。

（あの顔立ちだもの.....それに、あの髪。娘に見えない長さじゃないし、何よりも紫の瞳のきれいなこと.....あ.....れ.....）

じわっと滲んできたものに、ユーノは慌てて目元に指を当てた。少し濡れている。

（涙？）

違うことを考えよう、と思った。違うことを.....あ、あの向かいの男、レスファートと同じような銀の髪をしている。

（でも、レスの方がもっときれいだな、さらさらで艶があって。かなり伸びて肩に触れてた。そろそろ前髪がうっとうしいから切ってくれて、言ってくる頃だ）

こちらを見上げて甘えて笑う瞳、『ね、ユーノ！』。

どさりと肉をこちらの皿に盛るイルファ、『男ならもっと食え！』。

『大丈夫か？』

尋ねてくれるアシャの振り返った顔。

『大丈夫か、ユーノ』

置き去ってきた。

全部、自分で置き去ってきた。

(どうして)

大事だから。失いたくないから。なのに、自分で失ってきた。

(どうしていつも)

「！」

不意にばさりとマントが頭からかけられ、ユーノはぎょっとした。跳ね上げようとした頭を、軽くマントの上から押さえ、シートスが低い声で呟いた。

「ちょっと体が冷えてきたようだな、客人。これを被っているがいい」

「...」

心遣いが優しく、ユーノは少し頷いてマントをかき寄せ、身を竦めた。炎の燃える音、人々の話し声、身近に寄せる温かな気配が、逆にユーノに孤独を押し付けてくる。

「よほどの理由があったのだろう、客人？」

低い穏やかな声が囁いて来た。

「.....」

「世の幸福を約束された『銀の王族』がギヌアと剣を交えるとはな.....痛ましいものだ」

「シートス...」

「何だ？」

「ボクがここにいること、アシャには知らせないでくれる？」

沈黙が先を促す。

「ボクがアシャといると.....かえって危ないんだ」

「どういうことだ？」

「.....ボクはカザドにも狙われている」

「！」

シートスは動きを止めた。そして、徐々に力を抜き、重い溜め息をついた。

「それで.....こんな無茶をしたのか」

「.....」

「辛い旅をしてきたな」

その柔らかな労りの口調に思わずしゃくりあげそうになって、ユーノは息を詰めた。

「.....よかろう。それでは、お前を我らの野戦部隊（シーガリオン）の一員として迎え入れ、ラズーンへ帰還しよう。ただし、神々のお引き合わせによってアシャと巡り合ったなら、その時はお前のことを知らせるぞ」

「うん.....ありがとう、シー.....」

ことばをとぎらせたユーノの頭を軽く叩いて、シートスは誰に言うこともなくつぶやいた。

「動乱の期は、誰にとっても辛いのだよ」

「.....」

ユーノは頷いて、零れた涙を見せるまいと俯き、唇を噛んで体を竦めた。

3.スオーガの嵐

(サマルはユーノに追いつけたらどうか)

アシャは天幕(カサン)の外を吹き過ぎる風に、悶々と眠れぬ夜を過ごしていた。

宙道(シノイ)を抜けるとすぐにサマルカンドに追わせたが、ユーノがひたすらヒストを駆り続けたら、国一面、茶褐色の草原に覆われているスオーガのこと、探し出すのは難しいだろう。(それに...)

アシャはごろりと寝返りを打って俯せになり、腕を引き寄せて顎を埋めた。

考えたくないもう一つの可能性をも、視察官(オペ)としてのアシャは考えずにはいられない。

ヒストを駆り、宙道(シノイ)の闇を走り抜けていったユーノ、その後に追いつくギヌアの真っ白な輝きの髪が、アシャの目に焼き付いている。

(ギヌアがユーノを追っていった)

それはどういうことを指すのか。

視察官(オペ)の選ばれ方は二通りある。

生まれた時より資質を認められ、視察官(オペ)として訓練を受けたものと、少年の頃より視察官(オペ)を志願し、そのオーラの力で地位を認められたもの。

ギヌアは前者に当たっている。

生まれ持った視察官(オペ)の素質、あれほど自分の技量に傲慢にならなければ、ひょっとするとラズーンの第一正統後継者となっていたかもしれない資質。

それだけの能力を持った男が、ユーノを狙っている。

(もう、三日、だ)

思わず溜め息が出る。

未だにユーノのいない夜に慣れず、ともすれば天幕(カサン)の隅に丸くなっているはずのユーノを振り返っては、ぼっかりと開いた空間にレスファートが小さく身を竦めて眠っているのを見つけ、口元まできたユーノという呼びかけを呑み込んでいる。

(この国さえ抜ければ、ラズーンだったのに)

溜め息を重ねる。

腕を伸ばし、天幕(カサン)の垂れ布を開ける。冷えた風が吹き込んでくる。

その風に、慣れた匂いを嗅ぎ取って、目を細めて赤茶色の草原の向こうの山を見つめる。

そこに、アシャの故郷、ラズーンがある。

世界の果て、いろいろな意味で、人の行き着ける果ての果て、性を持たぬ神々が住み、視察官(オペ)と『泉の狩人(オーミノ)』に守られた、『太皇(スーグ)』おさめるラズーン、この世界の頂点である統合府、ラズーンが。

(なのに...)

それなのに。

遥かなるセレドから、両の掌で守り続けて来た宝石は、アシャの手から零れ落ちていつってしまった。長く暗い宙道(シノイ)の闇の中へ転がり落ちて、その所在さえわからない。

(生きて...いるのか)

アシャの想いはやっとそこへ辿り着いた。それと同時に、締め上げるような苦しさが心臓を襲い、両腕に顎を埋めた姿勢のまま、きつく唇を噛んだ。

ギヌアがユーノを追っている。宙道(シノイ)から出る前に追いつかれたかも知れない。ギヌアの馬に引きずられ、今頃は冷たい骸と化して、どこかの闇に打ち捨てられているか、『運命(リマイン)』のおぞましい狂宴の晒しものになっているかも知れない。

寝苦しい想いのせいか、二夜続けてユーノの夢を見ている。

夢の中のユーノは、いつもの意地っ張りが弱まり、はにかんだ笑みを向けてくれていた。嬉しくて、その笑みを全て抱き締めようと手を伸ばす度、そのユーノの背後から黒い魔手が彼女の腕と喉を掴み、あっという間に鮮血を撒き散らしながら、彼女を深みに引きずり込んでいく。

絶叫して脂汗に塗れて飛び起き、それが夢だと気づいても、胸は激しく轟いたまま震えている自分に気づく。

ラズーンのアシャともあろうものが。

(もし、そんなことになってみる)

心の中心が闇へ落ち込む気配に必死に耐える。

(この世の『運命 (リマイン)』という『運命 (リマイン)』をすべて根絶やしにしてやる.....たとえ、『泉の狩人 (オーミノ)』を解き放つてしまおうとも)

「ユーノ...」

低い呻きがアシャを唇をつき、風吹きすさぶ荒涼とした景色の中へ消えていった。

「冷え込んできたな」

「『風の乙女（ベルセド）』が出るかも知れんぞ」

野営している野戦部隊（シーガリオン）は、空を見上げながら、火の側に集まっている。夜になり、風が吹いているのに、昼間から重くたれ込めた雲は星を見せなかった。

「しかし、あの客人は見事なものだな」

「ああ。平原竜（タロ）の中に居ても、馬を操って見劣りせぬからな」

「あの馬も見事だ。怯えもせん」

「.....へへ」

ざわめく男達の横を、誇らしげに笑みを浮かべたユカルは、急ぎ足にユーノの天幕（カサン）へ向かっていった。肩に真新しい剣帯をかけ、片手に花、片手に濃緑の額飾り（ネクト）を持っている。

やがて、彼は天幕（カサン）の外で立ち止まり、軽く咳払いして声をかけた。

「ユーノ」

「何？」

ひょいと無造作にユーノが顔を出し、知った顔を見つけて笑顔になった。

「やあ、ユカル」

「シートスからの褒美だよ。額飾り（ネクト）と剣帯」

「額帯（ネクト）.....」

微かな驚きがユーノの瞳に広がった。

「いいのかな、そんな.....それは？」

続いてユカルの手にした花束に落ちた視線が、一層戸惑う。

「近くの街の娘から」

「え...」

ユカルを天幕（カサン）の中へ招き入れ、花束を受け取りながら、ユーノは複雑な表情になった。

「困ったな...」

「困ることはないだろ」

相手が本当に困っているのだと気づいて、ユカルは首を傾げながら、天幕（カサン）の右の、毛皮を敷いた所に腰を降ろした。明るく揺れる灯皿の火に照らされたユーノを見つめる。

「女ってのはいいもんだぞ」

「へえ...ユカルは女を知ってるわけ？」

「ばっ...ばっ！」

悪戯っぽい声に、思わず頬が熱くなった。

「野戦部隊（シーガリオン）で一人前に認めてもらってないんだ、知ってるわけがないだろ！」

ユカルは十七歳、野戦部隊（シーガリオン）ではひよっこもいいところだ。

「そういうお前は知ってるのか？」

「え...ボク...？」

唇を尖らせるユカルにくすくす笑っていたユーノは、ユカルと同じように頬を紅潮させた。口ごもって、手にした花を弄り回す。

「そんな、ボクは...」

だが、唐突に何かを思い出したように唇を薄く開いたまま、ユーノはぼんやりとした。黒い瞳が柔らかく潤って、紅を帯びた頬が緩んでいる。揺れる灯皿の光に、それはどこか妖しげな気配、なぜか自分の胸の内を奇妙に揺さぶられるような気がして、

「ユーノ？」

思わずユカルは声をかけた。

「！」

どきりとした顔でこちらを見返すユーノに強いて笑いかける。

「どうしたんだよ、にやにやして」

「え？」

「さては、女を知ってるんだろう。それを思い出して、そんな甘ったるい顔して...」

「知ってるわけないだろ！」

見る見る赤くなったユーノの頬が、違うと教える。同い年なのに、もう女を知ってるのかよ、といささか面白くない気分で、からかい半分に言い返す。

「じゃどうして、あんな顔してたんだよ」

「あんな顔って、どんな顔なんだよ」

「だから、えらく甘ったるい、ふやけた……」

微妙に不愉快そうなユーノを見ながら、ユカルはどんな顔か、を説明しようとした。

与えられたばかりの濃緑の額帯（ネクト）をつけようと両腕を上げ、焦げ茶色の髪をかきあげているユーノの姿は、いつもより細く華奢に見える。野戦部隊（シーガリオン）の無骨な茶色の長衣も、そのしなやかな体にまわりつくると、わざわざその少女じみた骨格を強調するために選ばれた生地のように見えてくる。とにかく細い。全てが小作りだといつも思う。

（だけど、この体で、あの腕、だものなあ）

額帯（ネクト）は、野戦部隊（シーガリオン）の中でも戦士として認められたことの証、ユーノの白い額に結びつけられたそれを、ユカルはまだ与えられない。

（今日だって）

ユカルは思い出すともなく、昼間の『運命（リマイン）』支配下（ロダ）との小競り合いを思い出す。

野戦部隊（シーガリオン）はじわじわと歩を進め、今やスオーガの中央付近まで戻ってきていた。ユーノの乗ったヒストは、いつものように、シートスの平原竜（タロ）と鼻先を並べている。

「ユーノ」

セレドやレクスファなどの南寄りの国々とは違う、冷たくどこか荒々しい風を吸い込みながら、目を細めて前方を見据えていたユーノが、シートスの声に振り向く。呼びかけの意味を問う視線、少し頷いたシートスが、紅の房飾りの剣を上げ、遥かな青白い山並みを示しながらぼつりと告げる。

「あれが統合府ラズーンだ」

「！」

はっと、体の全ての筋肉を緊張させる勢いで、ユーノが山脈を見やった。蒼く霞む麓、尾根の目の眩む白さ、まばらに零れ落ちた水滴のような深緑の森。

「あんなところに...ラズーンが？」

「ラズーンは国の名だ。セレドやスオーガとかわらない」

シートスがユーノの口調の不審感に気づいたのだろう、苦笑まじりに応じた。

「だが、そこに、この世界を統べる『太皇（スーグ）』がおられるのだ」

「『太皇（スーグ）』...」

考え込んだ、どこか強いものを秘めた瞳が、瞬きもせずラズーンの方角を見つめる。

なぜかその動きから目が離せず、二人のやりとりをひたすら眺めていたユカルは、次の瞬間、ふっと心の中に割り込んで来たどす黒い雲に、自らの役目を思い出した。舌打ちしたい苛立たしさで叫びを上げる。

「オーダ・シーガル！ ユカル・クアント！」

「クアント！ クアント・シーガル！」

ユカルの側に居た男が、はっとしたようにことばを継ぐ。

「何？」

ユーノがシートスに尋ねている声がした。

「クアント、つまり注意せよ、ということだ。物見（ユカル）が注意を促したということは、とりもなおさず、『運命（リマイン）』或いは『運命（リマイン）』支配下（ロダ）の接近を知らせる」

「『運命（リマイン）』支配下（ロダ）って.....そんなにあちこちにいるの？」

「残念ながら。はいっ！ ホウッ！」

掛け声をかけて平原竜（タロ）を急がせ始めるシートスに、ユーノのヒストがぴったりとくっついていく。

「モス、グルセト、ベシャム・テ・ラ、クエトロムト、レトリア・ル・レ、ガデロ、プームなどは、完全に『運命（リマイン）』支配下（ロダ）にある。カザドもちろん見逃せないが、ラズーンの周囲が次々『運命（リマイン）』に投降している今、そこまでの遠征はさすがに無理だ」

「そんなに...」

ユーノは乾いた声で呟き、ことばを失ってしまったようだった。

「運命（リマイン）』は人の心の脆さにつけ込んでくる」

シートスが苦い口調で応じる。

「そして、人は、己の心に対しては無防備なことが多いのだ」

二人の会話を聞きながら、ユカルの知覚は、全く別の方向へと向けられていた。言うまでもなく、心に湧き出してくる不吉な予感だ。それは禍々しい悪意を露骨に放射している。

「ユカル！」

「はいっ」

「敵はどこにいる？」

「前方、やや右の集落と思われ、かなり強烈な気配！」

きびきびと答えながら、ユカルは、軽々とヒストを操り、シートスに付き従うユーノを目の覚めるような思いで見た。意気込み過ぎることもない、緊張していないわけではない。ただ、戦うのに必要になる力を着々と蓄えるように静かにヒストを操り続けている。

それは百戦錬磨の勇士の胆力と同じ、凄まじい自制心によって支えられている心の制御力、ユカルも伊達や酔狂で野戦部隊（シーガリオン）の一員であるわけではない、戦いに臨んでの平静さがどれほど重要なことか、そして、それを保つことがどれほど困難なことであるかをよく知っている。

その平静さを保ち続けるためには、自分の状態に対する酷薄なほどの客観視と、続く緊張に疲れを知らぬ情熱が要る。氷のような精神力と攻撃を十分に燃やし尽くす激情、相反する二つの要素を等分

に備えた者こそ、真の勇士として賞讃を受けるに価するのだ。

だが、それを、完全ではないにせよ、この自分と同じ年の少年が備えているのが透けて見える。

(負けたくない)

きゅっとユカルは唇を引き締めた。

(おれだって)

ユーノ、シートスに遅れまいと、平原竜(タロ)を操りながら、剣を背中から抜き放つ。

「ユカル、クアント！」

「シートス・クアント！ オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

間髪入れずシートスが応じ、呼びかけた。

前方に集落、その少し手前に茶色の革のチュニックと黄色のマントのモス兵士達がたむろしているの見える。

「モスの遠征隊だ」

シートスのことばにこっくりと頷き、ユーノも剣を抜いた。祈るように一瞬掲げ、しっかり握り直す。

モスはどうかユカル達を待ち構えていたようだった。認め合った一瞬後、相手方も馬を駆り、見る見る近づいてくる。黄色のマントが翻りはためて、赤茶けたスオーガの草原に鮮やかに映える。いかつい顔、がっしりした体つき、馬共の気性も荒く、爛々と光る眼は火を吐くばかりだ。

そして、それらの遠征隊の背後に、暗く澱んだ冥府の気配、先頭を走ってくる馬に跨がった男の顔が見分けられるほどになり、ユカルは思わずシートスを振り向いた。

(ジャントス・アレグノ！)

ユカルをちらりと見返したシートスが頷き返す。

ジャントスの部隊はモスの中でも選り抜き揃いだ。遠征から疲れを溜めて引き上げてきている最中の野戦部隊(シーガリオン)としては、いささか不利な相手と言えなくもない。

「知り合い？」

ユーノの声が平原竜(タロ)のたてる地響きの合間を縫って聞こえてくる。

「というほどでもないが、よく知られている男だ。ジャントス・アレグノ、ラズーン国境付近の攻めに入っていたと聞いていたが、どうしてスオーガまで…」

はっとしたようにシートスは口を噤んだ。

さすがに野戦部隊(シーガリオン)隊長、すぐに理由を悟ったらしい。

「ボク…だね」

ヒストの上に身を伏せながら、ユーノが呟いた。

(きっとそうだ)

ユカルはその小さな横顔を見ながら顔を引き締めた。

おそらくジャントスは、ユーノの捕縛、あるいは殺害のために、『運命(リマイン)』から派遣されたに違いない。

(けど、どうして)

ギヌアが、ユーノをこの動乱期のこの上ない狩りの獲物と見、来るべき『運命(リマイン)』の世のための供物と見た経緯など知らぬユカルにすれば、この、たった一人の少年一たとえ、それが、アシャ・ラズーンが連れて来た『銀の王族』であるとは言え一のために、モス歴戦の勇士を駆り出すことは不思議でならない。

(あいつ一人のために)

だが、ユカルの思考はすぐに断ち切れた。双方の先鋒が接触したと見る間に、たちまち、野戦部隊(シーガリオン)とモスの遠征隊、相乱れての乱戦となったのだ。

「ちっ！」

巻き込まれまいと、ユカルは必死にその渦の中を横切り始めた。物見(ユカル)の役目は、その剣で敵を叩き潰し、切り倒すことではない。何よりも大切な、真の敵『運命(リマイン)』を追うことにある。

そしてユカルは、若輩ながらも、その腕をとっては決して他の勇士に見劣りすることはないと自負している。

「はいっ！ はあっ！」

平原竜(タロ)を叱咤激励して、喧噪の中、剣の作り出す虹色の幻の中を駆ける。と、その視界に過る気配、とっさに剣を振った。

ギャッ！

耳の鼓膜の隅まで震わせる嫌な音がして、相手は受け止めた剣の向こうからにっこり笑ってみせる。

「ユーノ…」

「せめて味方ぐらい見分けろよ」

「戦線から逃げる気か？」

「冗談」

ユーノはきらりと黒い目を輝かせた。その次に相手の唇から漏れたことばに、ユカルは戦いの最中だというのに、一瞬我を失った。

「『運命（リマイン）』を追っているんだろう？ ボクも付いて行く」

ユカルが『銀の王族』を見たのは、これが初めてというわけではなかった。だが、今まで見た『銀の王族』の中で、これほどその名にそぐわぬ荒いことばを吐く人間はいなかった。

「わけがわかっているのか?!」

再び平原竜（タロ）を駆り始めながら、ユカルは叫んだ。

「遊びじゃないんだぞ！」

「遊びじゃないさ」

相手は淡々とことばを返した。

手にした剣はまだ血塗れていない。ということは、ユーノも、ユカルが戦線を抜け出すのとほぼ同時に離脱し始めていたに違いない。

「このままでは、野戦部隊（シーガリオン）の方が危ない」

こいつは、いつの間にそこまで戦況を読んでいたんだ、と愕然とした。

確かに、今のままでは、遠征帰りの野戦部隊（シーガリオン）が崩れて行く可能性は高い。もっともそういう時のために、『運命（リマイン）』支配下（ロダ）とやり合う時は、物見（ユカル）が動くことになっている。

しかし、そういった野戦部隊（シーガリオン）の仲の仕組みを、いつの間にユーノは見抜いていたのか。

（部隊に加わって、まだ一週間足らずなのに）

「.....追ってどうする？」

少し呼吸を乱しながら、ユーノが問いかけてきた。

「追ってどうするって.....追うだけでも役目さ。『運命（リマイン）』を惑乱させられるし...」

「もう一声」

「何？」

「ボクなら『運命（リマイン）』を襲う」

「！」

こちらに投げられた視線の燃えるような熱さに、ユカルは気圧された。

ふっと相手が微笑する。

「ユカルは物見だけでいいよ」

「何をっ！」

かっとしてユカルは喚いた。

たった一週間かそこらに入った新人に、ユカルは物見『だけ』なぞと言わせた自分が腹立たしかった。

「おれもやる！」

にやっとうーノが笑って前方を向いた。うなじに流れる髪に妙に甘い感覚を嗅ぎ取り、ユカルはますます体が熱くなるのを感じた。

是が非でも、物見（ユカル）の名にかけて、『運命（リマイン）』を見つけ出して、ユーノに一泡吹かせてやらなくては気がすまない。

荒々しく考えた次の瞬間、自分達と同じように混戦を抜けてきた一人のモス兵士が目に入った。岩のようにいかめしい顔がこちらを向く。

ぞくりと体中の血が凍るような気がして、ユカルは低く吐いた。

「ジャントス.....アレグノ...」

「...」

無言でそちらを見たユーノが、肩越しに視線を投げてくる。

「『運命（リマイン）』？」

「あいつに固まっている気配が濃厚だ」

「...どうやら、ボクの相手らしいね」

ゆっくり速度を落とし始めるユーノに合わせるように、ジャントスも落としした.....いや、落としかけると見せて、次には一瞬の動作でこちらへ突進してきていた。

「いやあああーっ!!」

凄まじい裂帛の気合い、瞬時反応出来ずに呆然としたユカルの前で、万に一つの生きる機会を掴むように、振り下ろされたジャントスの剣を、ユーノの剣が受け止める。

ガギャッ！ ドスッ！

そのまま体重をかけて捻ろうとしたジャントスの顔が歪む。どうして動きを止めたのか、と不審に思ったユカルの目に、ジャントスの左腹部に深々と、ユーノの片足が蹴り込まれているのが見えた。茶色のチュニックに振り込むように突き出された足が一瞬退き、再び目にも留まらぬ素早さで腹部に突き込まれる。

「ぐう...っ」

鈍く重い呻きを上げて、鉛色になったジャントスの顔が引き攣れた。が、さすがに名のある勇士、力に任せてユーノの守りを破ろうとする。ジャントスの重い剣がギリギリと音をたてて、ユーノの剣に噛み付く。

そこでやっと、ユカルは己を取り戻した。自分の剣を振り上げ、無言でジャントスに斬り掛かる。

「ユカル！」

ユーノの警告の叫びはわずかに遅かった。

弱りつつあると見えた体の、一体どこにそんな機敏さがあったのかと思える速さで、ジャントスはユーノの剣を跳ね上げ、その反動でユカルの剣を跳ね飛ばし、ぐっとのしかかってきた。

「っっ」

片目を固くつぶり、ユカルは身の竦む恐怖に捉えられた。迫り来る剣のぎらついた形相、怖さに、視界一杯に広がった銀の煌めきから目を離せなかった、という方が正しいかもしれない。

同時にユカルは、その剣の向こうの恐ろしく無感動なジャントスの顔を、そこに異様に熱っぽい感情に燃え上がる瞳を見て取っていた。

それは近づく者を爛れさせる地獄の業火に似て、物見としての力を持つユカルにとって、自分も同じような憎悪に汚されていくようなおぞましさを感じさせるものだ。

ジャントスは自信に満ちて、ユカルを屠ろうとしていた、脳裏にユーノの存在を刻みつけたくないという唯一の誤算以外は。

そして、その誤算の重大さにジャントスが気づいたのは、開き切った腹部に、瞬間に数撃叩き込まれ、危うく馬から落ちそうになってからだった。

「ぐっ！」

「はあっ！」

間髪を入れず、ユーノの剣が閃く。切っ先がジャントスの肩を掠め、とっさに避けながらジャントスは苦痛の呻きを上げた。体勢を立て直す間も与えるまいとするように、千の切っ先となったユーノの剣捌きが彼を追い詰める。と、少し離れた所で起こっていたぶつかり合いの中から、わああっと新たな歓声が上がった。はっとしてユカルがそちらを見ると、数騎の野戦部隊（シーガリオン）がこちらへ向かってくるのが見えた。

それは、戦いがユカル達にとって有利に進んだことを示している。

（よし！）

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

ユカルは叫び声を上げて片手を打ち振った。応えて、こちらへ駆けつける野戦部隊（シーガリオン）が槍を振り上げ、叫び返した。

「レイ！ レイ・レイ・レイ・レイ!!」

ビュ.....ウン！ ドスッ！

「！」

槍がジャントスのすぐ近くに落ちた。野戦部隊（シーガリオン）は正確無比な槍の遣い手達でもある。ジャントスは動揺を走らせ、鋭い舌打ちをした。ユーノの剣を一度だけの攻めとして渾身の力を込めて跳ね返し、すぐさま向きを変える。

「待てっ！」

追いつがるユーノの声も追いつけぬほどジャントスの去り方は速かった。総大将が崩れたとあって、見る間に隊の中から落伍者が出、後は雪崩を打っての遁走となった。

「大丈夫？ ユカル」

僅かに呼吸を乱している程度、頬の赤みに歯向かうような冷静な目の色で振り返るユーノに、ユカルはもう反発は感じなかった。彼はただただ、彼はユーノを仲間に入れたシートスの眼力に尊敬の念を抱き、同い年だというのに、おそらくは野戦部隊（シーガリオン）のどの勇士もあれ以上には戦えまいという剣の冴えに感服していた.....。

「ユカル」

「うん？」

呼ばれてユカルは目を上げた。

額に濃い緑の額帯（ネクト）をつけたユーノが、こちらを見つめていた。

「これでいいのかな」

「ああ。とても似合ってるよ。おれは…」

ふうっとユカルは溜め息をついた。落ち込むまいと思っても、さすがに同い年で額帯（ネクト）を受けた者がいるのといないのでは、かなり気分が違う。ユーノが誇らしいのに、何となく妬ましい、妙な気持ちを味わいながら、ユカルはことばを継いだ。

「まだ、だめらしいや」

「ふうん」

ユーノは同情するような目になったが、ふいにいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「さっき、シートスが来てね」

「ふん…」

興味なさそうに頷くユカルをじっと見つめる。

「これを渡しておいてくれないかって」

「ふん？」

少し興味をひかれて、ユーノが差し出した掌を見たユカルは目を丸くする。

「え？」

信じられない、とユーノを見返した。相手はにっこりと、どこか少女じみた可憐な笑みを返してくる。

「おれに？」

「うん」

「これを？」

「うん」

おそろおそろ手を伸ばし、ユーノの差し出したものを受け取る。

それは濃い緑も眩く見えるほど細かい、手の込んだ造りの額帯（ネクト）だった。

「今日の褒美だっさ」

「ユーノ……っ、この…っ！」

だまされた。思わず叫んで、怒った振りでユーノに飛びかかる。

「あははは…」

明るい笑い声が、飛びすさって逃げたユーノの唇から漏れた。ユカルの手を軽々擦り抜けて、何か続けようとする。

だが、その声はふいに天幕（カサン）の外から響いた大音声にかき消された。

「セレドのユーノ！ ユーノはどこにいる!!」

その声に混じって、叫んだ人間を落ち着かせようとする数人の宥め声が聴こえたが、声の主は納得しなかったらしい。ますます苛立たしげな声を張り上げて、

「コクラノ様が探しているんだぞ！ わずか七日で額帯（ネクト）を手に入れた感想と手管を知りたくてな!!」

酔ってるんだ、とか、まあ落ち着けよ、とかいったことばが、やや荒々しく紡がれた。だが、コクラノに対しては逆効果だった。

「俺は信じぬ！ あんな子どもが実力で額帯（ネクト）を手に入れたとはお笑い種だわ！ え、ユーノ！ シートスに一夜の伽でもしたのか!!」

「あいつ！」

あまりの傍若無人さに耐えかねて、ユーノより先に、ユカルが天幕（カサン）の入り口を払い、飛び出した。

「お！」

「コクラノ！」

炎の紅を背景に、丸っこい体をそびえさせているコクラノに噛み付かんばかりに叫ぶ。

「ことばを取り消せ！ 我らがシートスを侮辱する気か！」

「何が、我らがシートス、だ！」

ひっく、とコクラノはしゃくりあげ、べったり汚れた口元を手の甲で拭った。ぎらつく目は血走っ

ている。片手に持った酒の袋を地面に叩き付け、踏みにじった。

「あんな小僧に額帯（ネクト）をくれてやるとはな！」

「それなら、おれもしているぞ！」

負けじとユカルも怒鳴り返した。コクラノはちらりとユカルの額帯（ネクト）を見たが、鈍い動作で肩を竦めて見せ、のろのろと続けた。

「ユカル、お前は仲間だ、言わば、身内だ。だが、あのユーノはよそ者！ どうして俺より先にあいつに額帯（ネクト）が渡されねばならん！」

「額帯（ネクト）は魂に贈られるものだ！ お前のような奴に、野戦部隊（シーガリオン）の額帯（ネクト）が許されるものか！」

「お前はいい！ ユーノをだせ！ ユーノを!!」

わめくコクラノの顔は真っ赤になっている。ユーノが出た瞬間に、持てる技の全てを叩き込んできそうな勢いだ。

（仕方ない、こうなったら）

ユカルは顔をしかめ、正面切ってやりあう覚悟を決めた、その瞬間。

「待てよ、ユカル」

静かな声が背後から響いた。

コクラノの罵声は十分聞こえていた。ユカルが苛立ち、今にも爆発しそうになっている声も。

（まずい）

唇を引き締めて、ユーノは天幕（カサン）から出る。

「おう！ 待っていたぞ、ユーノ！ どうだ、俺の伽もしないか、満足させてやるぞ！」

「ボクはそんなことはしない」

冷やかに言い放つ。自分を貶められるのは仕方ないが、嫉妬のあまり、自らの長まで踏みにじろうとする罵倒は、ユカルだけではなく、せつかく彼女を保護してくれている野戦部隊（シーガリオン）の皆にも迷惑をかける。

押さえ損ねた感情が瞳から零れたのだろう、コクラノがますます顔を赤くした。

「ほう！ それでは、その実力とやらを見せてもらおうか！」

コクラノは、喉の奥で不気味な笑い方をした。側に居た男が、慌ててコクラノに耳打ちする。コクラノの名誉を慮ってのことだったが、その気持ちは通じなかったようだ。

「わかっているわかっている！」

さも五月蠅そうに手を払った。

「確かに、ラシュモもカースも負けている、だが、俺はまだ負けていない！」

するりとコクラノは剣を引き抜いた。重そうな、昼間の血が未だこびりついているところを見ると、碌な手入れもしていないのだろう。その剣は相手を斬り殺すというより、叩き潰し、殴り殺すためにつくられたようにも見えた。

「よせよ、コクラノ！」

ユカルが相手にされなかったのに、嘲笑するように言い返す。

「勝てるわけないぜ、あのジャントス・アレグノと互角に戦った腕だぞ」

「俺だって助っ人一人頼めば、ジャントスなんぞ相手にもせんわ」

ユカルへの当てこすりを含んでいるのが明らかな口調、ぐ、とユカルが歯を食いしばる。

（どうする）

ユーノは思い迷った。

おそらく、この男一人、ユーノの手に余るほどの勇士ではあるまい。それに、相手は今酔っぱらっている。

真っ当な勝負ではないという気持ちと、今は絡まれているが、それでもいざとなれば背中を預けなければならぬ仲間を傷つけないという気持ちの間で、心が頼りなく揺れる。

ふと目を転じると、コクラノの少し後ろに、シートスの冷やかな黄色の目があった。してみると、さっきからの状況は既に見守られていた、ということらしい。

（シートスは止めに入らない。やれ、ということか？）

ユーノはシートスの目を覗き込んだ。そこには特に誰をも避難する色はない。

（こういうことはたびたびある、そう言いたげだな）

戦う集団で実力を問われるのは公私ともに当然のこと、降りかかる災厄を自ら払ってみせてこそ、ということか。

ユーノは喚き続ける相手に向かい、ことさらゆつくりと剣を引き抜いた。剣が抜き身になるにつれ、周囲が静まり返る。

「やっとやる気になったか」

にやりとコクラノは笑って剣を構えた。緊迫した空気が満ちる。時折、炎の中で燃えた木々が崩れる音だけが妙にはっきりと響く。

ごくりと唾を呑み、不安そうに空を見上げたユカルが、どす黒い灰色の空に眉をしかめる。かなりひどい天気になるかもしれないと思ったのだろう、なお眉を寄せた次の一瞬、全身を弾けさせるような勢いで周囲を見回す。

「ユカル・クアント！」

叫びがユカルの口を衝いた。振り向くユーノの前で、悔しげに顔を歪めたユカルが、

「オーダ・シーガル！」

天空を穿つような警告、ぎょっとした男達が周囲に目を配るまでもなく、野戦部隊（シーガリオン）はすっかり『運命（リマイン）』支配下（ロダ）の者に包囲されていた。

「.....」

アシャは遠い空を見上げていた。

重くたれ込めた雲の彼方に白い反射を探す。だが、今夜もサマルカンドは帰ってきそうにない。
(一体どこにいるんだ)

眉を寄せる。心の中の嵐に耐えかねて呻きそうになる。

「アシャ」

イルファが呼ぶのに込めた力を解いた。のろのろと気のない動きで火の側へ戻る。

「焼けたぜ」

「...ああ」

岩とかげを突き刺した棒を受け取り、アシャは膝を抱えて丸くなっているレスファートに目を止めた。少年は沈んだ生気のない表情で、半眼にした目をどこかに彷徨わせている。

「レス」

「...」

イルファが差し出す岩とかげの肉にも無言で首を振るだけだ。こけた青白い頬、尖った顎、プラチナブロンドも心なしか、色褪せぱらついているように見える。ユーノを失ったことからくる憔悴が、少年の容貌を大きく変化させていた。

「食わなきゃだめだぞ、レス」

「.....いらない」

「レス！」

「お腹すかないんだ」

「.....ふう」

イルファはやれやれと言いたげに、それでも多少の心配は浮かべて溜め息をついた。

レスファートがユーノを失ったことに泣いたのは一日だけだった。次の日から彼は、泣かない代わりに、他の感情まで失ってしまったように表情を動かさなくなった。

「じゃあ、水だけでも飲め」

「...」

こくん、と器から一口。残りを静かにイルファに戻して、レスファートはまた膝を深く抱えてしまう。

(レスファート...)

アシャは眉を寄せる。

イルファによると、母親を失った時もこんな状態だったらしい。

その頃のレスファートは、ほんの子どもだった。病気で臥せっていた母親が死んだのだということを理解し切れなかった。彼には、いつも微笑とキスを与えてくれた温かな存在が、突然彼を見捨てたように思えたのだろう。母がいなくなった後も、母の眠っていた寝室に通っては、誰もいないベッドに身を縮めて踞り、じっと母の帰りを待っていた。

見かねた王が無理矢理母親の墓に連れていき、母はそこだ、と宣言した。そのとたん、レスファートの心の堰は切れた。声を上げて泣き、墓にしがみついて、繰り返し母の名を呼んだ。それから、どうしてももう帰ってきてはくれないのだと唐突に悟ったのだろう。レスファートは泣き止んで、母は死んだのだ、という王のことばを頷きながら聞いたのだ、と言う。

(ユーノの生死がわからないのが、一層レスを追い詰めている)

痛ましい想いで、アシャは少年の虚ろな瞳を見つめる。

ユーノが死んでいるなら仕方がない。しかし、もし生きていたのなら、それはどういうことなのだ。母は確かに死んで側からいなくなった。だが、ユーノはもしかして、生きていてもレスファートの元へ帰って来てくれないのではないのか。つまり、もうレスファートと一緒に居るのが嫌になって、戻って来てくれないのではないのか。

乗り越えたはずのその疑いが、もう一度少年の心に蘇り、苛み続けているのだろう。

(俺もまた)

アシャもある意味ではレスファートと同じだ。

ユーノの生死を知るのが怖い。もし彼女が死んでいたとしたら、自分がどういう行動に出るのか、それを押さえ込めるのかどうか、今はかなり自信がない。世界を焦土としかねない『泉の狩人(オーミノ)』を解き放ち、ミネルバのように『運命(リマイン)』狩りを唯一の生きる意味として生き抜かかねない、そう思ってしまう。

今ならお前の気持ちがよくわかる、そうミネルバに告げたのなら、きっと高らかに哄笑されることだろう、そなたにも人らしい心があったのだな、と。

「誰も食わないのか？ 食うぞ？ いいのか？」

それじゃあ、とイルファは相変わらずの健啖ぶり、焼いた岩とかげはことごとくイルファの胃の腑におさまった。

執拗な勧めに、レスファートがかろうじてほんの一切れ肉を口に入れ、さもまずそうに水で飲み下し、早々に天幕（カサン）の中に引っ込んでしまう。たぶん今夜も眠れないまま、またじっと瞳を闇に凝らし続けるのだろう。

「アシャ」

「...」

「なるべく早く、ラズーンへ入っちゃったほうがよかあねえか？」

火の側に陣取ったままのイルファがぼそりと呟く。

「レスはそう保たないぜ」

「...そうだな」

アシャはおおげなりに答えを返しながらか、炎の中を見つめる。

眩く光を発している木が幻想的な美しさだ。だが、火のつきはあまりよくなかった。大気が重苦しく湿ってきている。嵐の前触れかも知れない。

「お前がユーノを探しているのはわかっている」

イルファは率直に切り込んできた。

「俺だって、あれほどの剣士が殺られてるとは思いたくねえ。ユーノを失ったまま、ラズーンに入っても、どうしようもねえ、その理屈もわかる」

ことさらぶっきらぼうに続けた。

「だが、俺達までここで一緒に野垂れ死に、というのもいただけねえ」

「わかっている」

汗と埃で湿った前髪をゆっくりと手櫛でかきあげた。

「こんなことをしていることが、いい結果を生み出すはずがないってことも」

スオーガの端で、アシャ達はもう四日以上、無駄に足踏みして野営を繰り返している。

「それでなくとも、このあたりは『運命（リマイン）』が跳梁する暗黒地帯だ」

宙道（シノイ）の入り口近くに留まっていれば、ひょっとして戻ってきたユーノ、もしくは彷徨っているユーノを見つけることができるのではないか、アシャはまだ、その儂い望みを抱えていた。

「わかっている」

無意識に空を見上げた。サマルカンドの白く雄大な姿を探す。だが、その願いを挫くように、上空には振じくれた鉛色の雲がのたうつばかりだ。

（わかっている）

ユーノはもうここにはいない。

アシャの知らないどこかに消えてしまったのだ。

（いい加減に、自分の失敗を認めろ）

そもそも、セレドに自分が入り込んだことが間違っていたのかもしれない。もっとまともな視察官（オペ）が辿り着いていれば、ギヌアに執着されることも『運命（リマイン）』にここまで注目されることもなく、ラズーンまで進めたかもしれない。

（俺が、居なければ、よかったのか）

こんな気持ちになったことなど、なかった。

目を伏せる。一瞬歯を食いしばり、それでも曇天に向かって告げる。

「明日からは、再びラズーンに向かう」

その夜半。

「ユーノ...」

小さな呟きにアシャは目を覚ました。

ユーノを見捨ててラズーンへ向かう、その煩悶が知らずに口から零れ落ちたのかと思ってどきりとする。だが、

「ユーノお...」

ひっく、と小さくしゃくり上げる声に気づいた。

「やだよ...行かないでよ.....ぼくをおいてかないで...よ...」

「レス？」

「ユーノ.....ユーノお...」

覗き込んで、寝言だと知った。だが、閉じた瞼から次々と涙が溢れ出し、少年の頬を濡らしている。えっ...えっ...と押し殺した鳴き声が響き、眉を潜めた。

夢に泣き続けているレスファートの体を優しく引き寄せてやる。と、少年はそのアシャの手を手繰り、懐に潜り込んでくるようにすり寄ってきた。アシャの胸にしがみつき、しばらく泣き続ける。

「レス...」

よしよし、と背中を撫でてやっていると、やがて力が抜け、

「おいて...かないで...」

小さな囁きに続いて微かな寝息が聴こえた。

「.....おいてかないで、か...」

涙で汚れた頬を拭ってやり、自分も身を横たえながら、アシャは唇を囁む。小さな子ども特有の体温の高さが、夜気に冷えたアシャの体を温めていく。

(こんなぬくもりに背中を向けて)

天幕(カサン)を通し、遙かな空へ、ユーノが駆ける、その上に広がる空を思っで見上げる。

(お前はどこへ行こうというんだ、ユーノ)

外はますます嵐の様相を呈し、風が荒々しい唸りを上げている。

その中で、ユーノを含む野戦部隊(シーガリオン)が、今まさに新たな戦いに突入していこうとしているとは、思いもつかないアシャだった。

4.星の剣士（ニスフェル）

重い沈黙が野戦部隊（シーガリオン）を包んでいた。

完全に囲まれ、じわじわと追い詰められ、ユーノ達は炎を背後に、身につけている長剣、短剣のみで、深い闇の中に濃厚に漂う『運命（リメイン）』の気配と対峙している。

どこか一カ所でその沈黙が破られれば、雪崩のように『運命（リメイン）』が押し寄せてくるだろう。平原竜（タロ）から切り離された状態で囲まれているのが、とにかく厳しい。

ついさっきまでユーノとコクラノの勝負を見守っていた湧き上がるような熱気も、冷え込む殺気に吸い込まれている。コクラノもまた、やや青ざめた顔を闇に向けている。

それを見たユーノの唇に、ふと時ならぬ笑みが浮かんだ。

（怖いのか）

コクラノへとも、自分へともわからぬ眩きを胸の中で漏らす。

（いや...怖くない）

まるで、それを自らへの問いととったように、心の奥底が応えた。

（ラズーンは目の前だ。ここで死ぬわけにはいかない）

ふっとコクラノがこちらを見つめ、ユーノの薄笑みにむっとしたように眉をしかめた。その横で、シートスがわずかに目を細める。彼の視線がある箇所注がれているのに、ユーノはゆっくり目だけ動かした。

見覚えのある黄色のマントが薄明かりを浴びてぼんやりと浮かび上がっている。

（モスの遠征隊？）

「！」

ユーノはシートスの視線の意味を悟ってはっとした。

確かに『運命（リメイン）』本体より『運命（リメイン）』支配下（ロダ）の方が突破しやすいだろう。

そして、そのモスの遠征隊の向こうに、平原竜（タロ）のたまり場がある。

ほとんどが騎馬の『運命（リメイン）』相手に歩兵のままではあまりにも不利だ。モスの遠征隊の部分を切り抜ければ、平原竜（タロ）に辿り着ける。

（崩すとしたら、あそこしかない）

じわりとコクラノの前方が押した。それに吊られて、波頭が続く滑らかさで『運命（リメイン）』の前線が押し出し、呼応するように半歩退いたユカルが、片手を炎に炙られたのか、びくりと体を強張らせる。同じように後ろへ下がった自分の脚が、焚き火の木を折り、すぐに炎と化す気配にユーノも動きを止めた。

後はない。

風が唸って、はるか高空を翔け猛っていく。

「う...おおお!!」

鬨り殺される恐怖に耐えかねたコクラノが雄叫びを上げ、前方へ突進した。

ちいっ、とシートスが高い舌打ちを漏らす。先に動いた方が不利になるのを知り尽くしている、だが、いくら不出来とはいえ、部下を見捨てるようでは野戦部隊（シーガリオン）の長は勤まらない。決意を濃い眉に浮かべて剣を抜き放ち、コクラノの後へ続く。

「ユカル！」

「おう！」

同時にユーノも行動を開始していた。コクラノのために散りかけた戦線の一つにまとめるように、モスの兵の中へまっしぐらに切り込む。ユカルが額帯（ネクト）にかけて遅れまいとするように、後を追ってくる。

「はっ！」「うっ！」「わあっ！」「ぎゃっ！」

たちまち魂消るような悲鳴と、生死を一瞬にして分つ気迫を込めた気合いが満ち、見る見る敵味方入り乱れての乱戦となった。コクラノの重い剣が唸ってモス兵の腕を叩き潰す。『運命（リメイン）』の黒剣が、例の、気配を持たぬ不気味さで忍び寄り、犠牲者の首を刎ねる。シートスがあわやの切っ先を避けつつ、近くの『運命（リメイン）』の胸を薙ぎ払う。

絶叫、怒号、剣の噛み合い絡み合う、鼓膜を震わせる金属音、何とか獲物に辿り着けたものがいたのだろう、得意の槍が唸る音、折れて飛び散る剣の鈍い響き、あいとあらゆる戦いの物音が空間を埋め尽くす。

「ぐわあっ!!」

声を限りに叫んで倒れるモス兵士の血が柄にかかってぬめり、ぎゅっと握り直しながら、ユーノは感触に体を震わせた。生暖かく粘りつく鮮血、返り血を浴びながら、モスの遠征隊の中を走り抜けていく自分の姿を想う。自嘲気味に唇が歪むのを感じた。

(きっと)

右から打ちかかって来た相手を柄で殴りながら、返す刃先で前の敵を屠り、同時に斜め左のモス兵士の腹に振り上げた片足を叩き込む。

(こんな娘を愛する人はいない)

口元を引き締め、流れ落ちる汗を振り払い、ユカルの姿を探す。いた。右前方、二人のモス兵士に手こずっている。ユカルが無防備に向けた背中に、新たに別の兵士が斬り掛かろうとするのに地を蹴り、走り抜け様に三人倒し、間一髪、ユカルの背へと滑り込み、振り下ろされた剣を受け止める。

ガキヤッ!

「ユーノ！」

「だらしがないぞ、ユカル！」

「何言ってるんだ！」

ユカルはく、っと唇を結んだ。ようやく一人の兵士を倒す。

「お前のような剣の天才とは違うんだ！ こっちはただの物見（ユカル）なんだぞ！」

「じゃあ、どうして天幕（カサン）の中で震えていなかった？」

にやりと笑いながら、ユーノは剣を押し返し、瞬間にできた相手の隙に乗じて、鳩尾、脛へとそれぞれ痛烈な一撃を見舞って崩れさせた。

「今そうしようと思ってたのさ！」

ユカルが叫び返し、剣を握り直すと同時に刃先を滑らせた。ギャギャギャギャッとした嫌な音が響いて、思わず眉をしかめながらも相手の剣を跳ね上げ、刺し貫いて倒す。

「走るぞ！」

「わかってる！」

それぞれに敵を倒して、一瞬周囲にできた間隙を縫って、ユーノとユカルは平原竜（タロ）の集めであるたまり場へ走った。平原竜（タロ）達が走りたがっているのは一目瞭然、放つだけで近年にない大暴走となるだろう。

二人の意図を察した『運命（リメイン）』とモス兵士が追いつがってくる。息の続く限り走ろうと速度を上げる二人に、他の野戦部隊（シーガリオン）が気づき、素早く援護に移り始める。

「ヒストーツ！」

胸が張り裂けそうな苦しい息の中から、ユーノは一声高く愛馬を呼んだ。平原竜（タロ）の中で騒ぎが起き、一頭の栗毛の馬が苛立たしげに棒立ちになり、天の嵐を呼ぶように高く嘶いた。自分を繋いでいる紐を泡を吹きながら噛みちぎろうともがく。努力は間もなく功を奏した。縛めを解かれた野性の獣よろしく、その名の白い星（ヒスト）を額に白々と燃え上がらせながら、ユーノに向かって駆け寄ってくる。間近に来ると僅かに速度を落とし、ユーノと並走、ユーノが手綱を掴んだと見るや、振り回すように体を振って主を背中へと引き上げる。

息を呑むユカルの目の前で、奇跡のような安定感と軽さで馬を操り、ユーノは平原竜（タロ）の中に走り込み、手綱を次々と断ち切った。ようやく群れに辿り着いたユカルが、自分の平原竜（タロ）に乗るのももどかしく、平原竜（タロ）達が走り始める。

「オーダ……レイ！」

息を切らしたユカルの声が、それでも朗々と響き渡る。深い緑色の鱗を、燃え上がる炎よりも猛々しく輝かせて、平原竜（タロ）は怯むそぶりさえなく、戦乱のまっただ中にそれぞれの主を捜して走り込んでいく。

「オーダ・シーガル！」

その一匹の手綱をぐい、と捉えて、平原竜（タロ）の上に躍り上がったシートスが、手にした剣を高々と上げた。どよめきが戦いの混乱を渡っていく。平原竜（タロ）に踏みつぶされる者、蹴飛ばされる者、暴走に巻き込まれて命を落とす者が続出し始めた。だがもちろん、伊達や酔狂で野戦部隊（シーガリオン）を名乗っているわけではない、仲間達は次々と平原竜（タロ）に飛び乗り、或いは並ぶ平原竜（タロ）の背中を渡り、それぞれの持ち平原竜（タロ）に身をおさめ始めている。

「オーダ・シーガル！」

「オーダ・レイ！ レイ！ レイ！ レイ！ レイ！」

レイ、レイ、と後を続ける声が次第に増え出し、平原竜（タロ）のたてる地響きと相まって怒濤のように『運命（リメイン）』とモス兵士を襲い始めた。一度怒れば一都をも灰燼に帰そうという平原竜（タロ）の暴走の前では、『運命（リメイン）』の操る馬の激走など見事に等しい。

レイ、レイ、レイ、と掛け声が上がる度に『運命（リメイン）』の姿が見る見る少なくなっていく。

「はあっ！」

荒くれた平原竜（タロ）の暴走の中で、ヒストに乗ったユーノの姿は目立った。

平原竜（タロ）に追われ逃げ惑う『運命（リメイン）』の乗る馬は次々と蹴散らされていくのに、ユーノの乗るヒストは、まるで平原竜（タロ）に守られてでもいるように一しかし、よく見れば、馬を平原竜（タロ）の中で遅れず急かさず操る腕がどれほどのものなのか、すぐにわかって感嘆の念を抱かずにはおられない一悠々と進み続ける。

焚き火の炎が蹴散らされたのか、赤茶けた草原に炎の絵巻物が広がっていく。ほぼ同時に、『運命（リメイン）』、モス兵士の中から叫びが上がった。

「退け！ 退くんだ一っ！」

「！」

その後は素早かった。形勢不利と見ていた者が多かったのだろう、来た時と同じように、あっという間に、炎の照らし切れぬ夜闇へ消えていく。

「オーダ・レイ！」

平原竜（タロ）の暴走に次第に制限を加えていきながら、シートスが叫んだ。手近の者に指示を与え、燃え広がろうとする火を追わせて踏み潰させる。

「はいやっ、ほうっ！」

乾いた草地を疾っていく炎に飛び込むのは並大抵ではない、だが、野戦部隊（シーガリオン）の面々は怯んだ様子もなく、先回りし、炎とじゃれ合うかのように軽々と、その道筋を蹴り潰し、消し止めていく。躍る炎、舞う土埃、翻るマントに火をもらう間抜けは一人もいない。炎の中を緑の鱗の平原竜（タロ）が駆け抜けた後は、重く沈んだ黒色の闇が残るだけだ。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

ユカルが汚れた頬に誇らしさを漲らせて、高々と叫んだ。物見（ユカル）としてはもっとも嬉しい叫び、勝鬨の声だ。

（倒されたのは十人ほどか）

ユーノはシートスの視線を追って、主のいない平原竜（タロ）の頭数を数えた。

シートスにすれば、その状況は少々不満だったらしい。難しい表情で、ぼんやりと薄明るくなってきた空を睨みつけていたが、ふっと溜め息をつき、髭をしごいてユーノを見た。眉を上げ、苦笑して見せる。

「シートス」

「うむ」

ユカルが、例の紅い房のついた槍を手渡す。シートスは重く頷いて、それを受け取った。ゆっくりと天へ突き上げる。

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

「オーダ・シーガル！ オーダ・レイ！」

声が唱和するのを待ち、シートスは気迫のこもった動作でそれを投げた。しなる筋肉に支えられて、槍は軽々と空を飛び、踏み荒らされ消された焚き火の跡に深々と突き刺さる。静まり返った闇にびい...ん、と端まで震える槍を見つめ、シートスが呟いた。

「同胞（はらから）はこの槍の下に集い、槍の下に従い、槍の下に死んだ。それを忘れる者は野戦部隊（シーガリオン）たる資格はない」

無言で男達が頭を垂れる。

ラズーンに属するとはいえ、野戦部隊（シーガリオン）は独自の掟に基づき、時にラズーンを遠く離れて転戦する。互いの背中を預け、互いの最後を見届け合う。絆は、平原竜（タロ）に跨がった瞬間から、固く強く結ばれている。

それは、厳しくも淡々とした野辺送りの儀式だった。頭上に遙けく高まる天空と、足下に果てしなく広がる大地と、それぞれの存在の狭間に生きる、小さく脆い人間との。

（温かい）

ユーノは目を閉じ、小さく息をついた。

アシャ達とは違った安心がここにはある、ただ一人、コクラノの妙にぎらつく視線は気にはなるが、ふ、とシートスが息を吐き、天を仰いで命じた。

「長居は無用だ！ 移動する！」

「このあたりの宿でいいよな」

イルファが馬を止めるのに、アシャは頷いて腕の中のレスファートを覗き込んだ。

アクアマリンの瞳は光を失ったのかと思えるほど、虚ろなままだ。スオーガの街にようやく入ったというのに、これまでのように異国の見知らぬ風景にはしゃぐこともなく、食べ物は水で何とか流し込んでいただけという状態が続いている。

アシャはふわりと馬から飛び降り、両手をレスファートに差し伸べた。

「レス」

硬い表情でその手に掴まり、馬から降りると、それ以上誰の接触も拒むように、レスファートはすつとアシャの側から離れた。

「...」

イルファは溜め息まじりに首を振り、のしのしと近くの宿屋に入り込んでいった。しばらくして出て来て、レスファートを気遣いながらも快活に笑う。

「あいてるそうだ。ベッド2つ、一部屋。レスはお前か俺か、どちらかと一緒に眠ればいいだろ？」

「そうだな」

アシャは重く頷く。

近頃ではレスファートを一人で眠らせるのが危なっかしくなっている。眠っている時でも、ふいにふらふらとユーノの心象を追って立ち上がり、どこへとも知れずに姿を消していきそうになる。

レスファートの心の隅に確かにユーノの気配はひっきり続き続けており、思いが募ったあまりの妄想ではないようだったが、動乱のこの時期にあっては、レスファートのような愛らしい子どもであるなら、よからぬことを企む輩もいるだろう。

(くそ)

レスファートを導きながら、アシャもぶるりと頭を振った。

奇妙な感覚は実はアシャの方にもあって、一瞬気が緩んだ時に、自分が人ごみの中にユーノの姿を探してぼんやりしているのに気づき、ぎよっとすることがある。

いつの間にか、これほど強く、心の中の見えないところまで深く、ユーノの存在が根を張っている。いつの間にか、自分の生きる基盤の中に、ユーノが刻みつけられている。

気力が削がれる。体力が落ちている。感覚が鈍っている。

(この俺が)

ユーノがいない、ただそれだけで、これほど生きていくのが苦しい、まだ体さえ繋いでいないのに。生きていく意味がない、そう呟く心を必死に見まいとしている自分を、レスファートが否応なしに突きつけてくる。

(一体何なんだ)

こんな気持ちは味わったことがない。

(ユーノと出会ってからは、こんなことばかりだ)

今まで全く知らなかった自分ばかりに出会う。

「夕飯がもう食えるそうだ」

「それは、ありがたいな」

イルファの声に我に返った。

「レス、おいで」

「...ぼく」

馬を馬屋に入れ、楽しそうに宿屋に入ろうとするイルファに続こうとして、レスファートを促すと、相手は柔らかく頭を振った。表情をなくした顔に疲労を色濃く滲ませてアシャを見上げる。瞳はまるでガラス玉だ。アシャを全く見ていない。どれほど止めろと言いつけさせても、心の中で微かに感じ取れるユーノの心象を追いつけている。止めさせるためには、眠らせるか、ユーノを見つけるしかない、だが。

(眠れない、見つけられない)

ぐ、とアシャは歯を食いしばった。

(俺だって)

どちらも果たせないのは同じだ、この幼い無力な少年と。

(ラズーンのアシャだって)

ユーノを得られない無力さにおいては。

「ぼく.....いない...」

「レス」

アシャは声を荒げた。

「食べずに旅は続けられない。ユーノを探すのだって、体力がいるんだ」

自分に言い聞かせているようなものだ、と苦く思う。

「うん...」

レスファートは物憂い様子で頷き、渋々やってくる。

イルファは既に準備された食卓について、二人を待っていた。ちょうど食事時間なのだろう、食堂には泊まり合わせた者同士、賑やかに相席している。

「さあ、レス。今日はこれだけ」

どん、と肉、野菜、穀物を炒めたものなどを盛り合わせた皿を、レスファートの前に置いたアシャに、少年は露骨に嫌な顔になった。

「お水...」

「水ならいくらでもやる。だから、これを平らげろ」

「うん...」

こくりと人形のように頷いて、レスファートは皿に盛られた食べ物を黙々と口に運んでいく。おそらく味などわかっていないのだろう。

「俺達も食おう」

「ああ」

アシャの促しに、気がかりそうな目をレスファートに向けていたイルファも、止めていた手を動かし始める。さすがのイルファも、レスファートのしょんぼりしている様子が堪えるらしく、いつもの健啖ぶりは見られない。食事に関して比較的变化がないのはアシャで、眠れなくとも緊張し続けていても、必要な栄養は確保し続けている。

(視察官(オベ)の習性というところか)

醒めた笑みが思わず浮かんだ。

旅を生活とする視察官(オベ)には、自制力と統御能力が必須条件だ。自分を極限まで客観化できるほど優れた視察官(オベ)と評価され、なかでもアシャは指折りの視察官(オベ)と呼ばれている。

(だが、その俺にしても)

今はその客観視できる能力の高さが恨めしい。

いつもの自分からどれほど外れていっているのか、克明に認識してしまう。国を破滅させ、世界を揺るがせるような状況においても安定しているはずの自分の心身が、たった一人の少女、ユーノ・セレディスの不在という、ただそれだけのことで、信じられないほど調整能力も統御能力も失っていきつつあるのが自覚できる。

このままではきっと、遅かれ早かれ、アシャも自分を制御できなくなる。

(.....ああ、そうだ)

ユーノを失った痛手にこれほど平静でいようとする、それが十分におかしいのだ、と唐突に気づいた。その必死の努力、それはもう、アシャの非常にまずい部分が発動し始めてる、ということではないのか。

(『太皇(スーグ)』...)

胸の中で呟いた名前に、噛み締めた食べ物の味を意識した。側にいるレスファートとイルファの存在を認識した。自分の中に広がりつつある虚無を、もう一度きちんとしたエネルギーの形に編成し直すように、集中する。

(破壊するな。破滅するな。今ここで自らを放棄するな)

まだ全てが終わったわけじゃない。

「.....だろう？」

ふいに、近くのテーブルでの会話がアシャの耳に入ってきた。

「ああ、あの草原の焼け跡な」

「なんでも、凄い戦いだったそうだけ。さしもの野戦部隊(シーガリオン)も十人ほど手勢を失ったそうだ」

近くの卓の男達の話に、来る途中で過った黒焦げの草原を思い出した。

焚き火の跡らしいところに、真紅の房のついた槍が突き立ったまま放置されていたが、やはり野戦部隊(シーガリオン)の葬送の儀式だったのか、と納得する。

「シーガリオンってなんだ？」

イルファがきよとんとした顔で聞くのに、囁んでいた肉を呑み込んで応じる。

「ラズーンの遠征隊だ。タロと呼ばれる平原竜を操る、野戦を主とする勇士達だ」

「へええ...頼めば、俺も入れてくれるかな」

「腕によるな。『足手まといは連れ歩かない主義』だ」

応えながら苦笑いした。野戦部隊（シーガリオン）隊長、シートス・ツェイトスのことを思い出す。かつて、面と向かってそう言われた。黒い短髪と口髭、鈍い黄色の瞳、嘲る口調にはアシャの地位に対するへつらいなど一切なかった。

（まあ、そう言われても仕方がなかったな、あの頃の評判では）

宮廷を遊び歩く浮かれた男、そういう感覚だっただろう。

「ふうん...」

イルファはちらりとレスファートを見やり、興味がなさそうな相手に溜め息をついた。相変わらず、食べ物というより、毛皮か土くれを呑み込んでいくように食べ物を口に運ぶレスファートに首を振り、自分の食事に戻る。

「で、その時に大活躍した凄い剣士がいるんだろう？」

男達の興奮した話し声は続く。

「ああ、そうとも、星の剣士（ニスフェル）と呼ばれてる」

「そりゃまた、きらびやかな」

「何でも、その戦い方が、まるで天空の星を引き連れて流れる、伝説の星のようだからと聞いている」

「伝えの...？ たいした評価だな、まだ若いのか？」

「額帯（ネクト）はもう授かっているらしいぞ」

（また、星の剣士（ニスフェル）か）

ふと、アシャはひっかかった。

確かにここへ来るまでにも、星の剣士（ニスフェル）の噂は時々耳にしていた。まだ年若いながらも、物見（ユカル）を真の友として常に寄り添い、隊長シートスの片腕にもなろうかと言う剣の冴えの持ち主だと。

野戦部隊（シーガリオン）の年齢層は広い。若くして志願して加わる者も入れば、歴戦の勇士が是非にと腕を頼りに入隊を希望する場合もある。いずれもシートスが認めなければ野戦部隊（シーガリオン）を名乗ることは許されない。その少年も、おそらくは際立った才能の持ち主なのだろう。

（若くして額帯（ネクト）を与えられるほどの、際立った才能...）

カタン！

ふいにレスファートが手にしていた木さじを取り落とし、振り向く。

「どうした、レス？」

「.....」

レスファートは星の剣士（ニスフェル）について話し続けている二人の男の方を、食い入るように見つめている。

「レス？」

「.....星の剣士（ニスフェル）...」

「かなりの遣い手らしいな」

「...ちがう...」

「え？」

くるりと振り返ったレスファートの瞳が蘇ったように生き生きとした色になっているのに驚く。イルファが忙しく肉を噛みちぎりながら、問い直す。

「違う、って、何が」

「星の剣士（ニスフェル）は...」

レスファートは微笑しようとした。だが、し損ねて泣き笑いのような表情になる。虚ろだった瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「ユーノだ...」

「え！」 「何っ」

いきなりアシャとイルファがレスファートにのしかかるように立ち上がったのに、男達は不審そうな目を向けて話を止めた。

「本当か、レス！」

「ぼくが、ユーノの心象をつかまえそこねるわけがないよ！」

レスファートは叫んだ。

「まちがないよ。星の剣士（ニスフェル）はユーノだ！」

「.....あんたら、どうしてあの人のことを知ってるんだ？」

繰り返される名前に、男の一人が不思議そうに口を挟んでくる。

「見れば、旅の者なのに。確かに、星の剣士（ニスフェル）はユーノ、とも名乗ってるぜ」

「...っ」

一瞬感情が押し寄せ溢れて、アシャはことばを失った。そうとも、当然それを考えてもよかったのだ、と歯噛みする。

野戦部隊（シーガリオン）。

まさにユーノによく似合った、そして絶好のラズーンへの道案内ではないか。

「よし」

アシャは慌ただしく席を立った。

「必ずユーノを連れ帰ってやる。待ってろ、レス。頼むぞ、イルファ！」

「アシャ、お願い！」

レスファートの声を背中に、宿屋を飛び出す。

「レスのことは任せとけ！」

「おい、あんた！」

駆け出して行こうとするアシャに、ただ事ではないと思ったのだろう、男の一人が声をかけてきてくれる。

「野戦部隊（シーガリオン）は、今、南西の台地にいるはずだぜ！」

「わかった！」

感謝を込めて軽く一礼し、アシャはスオーガの南に広がる台地へと馬を駆った。

スオーガには、世界創世を語る伝説がある。
それは必ず、こう語り始められる。
昔、戦いがあった、と。

昔、戦いがあった。
それはおおいなる戦であった。

東には雪と氷をしもべとする神が、西には熱と炎を味方と頼む神がいて、二人はことあるごとに対立した。

戦いのきっかけは悠久の空間と時間の中ではほんの些細なこと、太陽がなぜいつも東の神の背後から昇るのかといったことだった。

神々の時にしても長き時間を、二人の神は憎み合い、睨み合い、戦い続けた。その戦いは、時にはお互いの弱点を探り合う冷えた戦いであり、時には双方の持ち得る力を叩きつけ合う熱した戦いであった。

だが、お互いの力が伯仲していたため、戦いにはなかなか決着がつかず、それ故、二人の神の戦いは始まったときのような単純さを失い、複雑な幾万の鬘を持つようになった。

ある日、ついに戦いは行き詰まり、終局を迎えた。本当は、二人の神は互いに争いを止めるべく歩み寄ろうとしていたのだが、その折の礼の示し方が僅かに食い違っており、それが二人を決裂させたのだ。

最後の戦いは熾烈を極めた。

二人の神は雷を投げ合い、炎を撒き散らし、天を穿ち、地を裂いた。空にある星を降らせ、地底の大河を干上がらせた。人々は嘆き悲しみ、流される血潮を、倒れ伏す仲間を愛しんだが、神々はその祈りを聞き届けなかった。

そして、破滅はやってきた。

世の終わりを告げる凶星が禍々しく輝きを増したとき、星々は、神々の上に光と死を携えて降り注いだ。

永遠にその生命を長らえるはずであった二人の神は、死して伏した。

後には無惨な戦場のみが残された。

美しかった大地は荒れ果て、水は乾いた。地勢は一変した。山上に海は満ち、海底は山となった。あらゆる生き物が本来の形を失い、命を失った。

やがて、荒廃し切った世界に再び星が流れた。

それは、彼方より流れ来た星であったらしい。

その光は、かつて二人の神が操ったどの光よりも、清浄なものであった。

星は、この世に、その創造と守護の任を命じ、ラズーンの神を送られた。

新しい世界の始まりであった。

「……………」

ユーノはじっくり時間をかけて磨き上げた槍を横に置き、剣の手入れに取りかかった。

(星の剣士(ニスフェル)か……)

その呼び名に潜む畏敬と希望を、ひしひしと感じる。スオーガに伝わる創世の伝えを聞かされた後では余計に、自分に与えられた呼び名が気恥ずかしくなる。

『星』はスオーガでは決断と実行の象徴だ。世界の命運を担う、祈りの形だ。

野戦部隊(シーガリオン)の中で、ただ一人、白い星(ヒスト)の馬を操るためにそう呼ばれているのだろう、始めはそう思っていた。けれど、近頃では、星の剣士(ニスフェル)、そう呼びかけられるたび、或いは野戦部隊(シーガリオン)に遭遇した旅人が、夜空に輝く星のような聡明さ、眩く人を導く剣の冴え、そう讃えるのを聞かされたとき、それほど単純な話ではないと思うようになった。

揺れ動く世界を、誰もが不安に思っている。それは野戦部隊(シーガリオン)といえど、無関係ではない。

きっと、自分達とは異質な何かに願いを託す、その無意識が、よそ者のユーノに『星の剣士(ニスフェル)』と呼びかけさせているのだ。

(でも、私一人じゃ、何もできない)

アシャ達と旅をしていた時は、もっと自分の力を誇っていた。最後は自分が背負えばいい、そう思っ

ていた。

だが今は、ユーノ一人ではどうにもできない大きな集団と戦う時、仲間と連携し、互いに背中を守り合うことの意味がよくわかる。

(私は.....本当にあなたを守れていただろうか)

思い出すアシャの顔に問いかける。

(あなたが背中を預けて安心できる、仲間だっただろうか)

そうではなかった。

いつも一人で暴走し、一人で死地に飛び込み、なのに、アシャは必ず助けにきてくれた。

ユーノはアシャの言うとおり、上っ面と気負いばかり先走った、本当に幼い傲慢な剣士だった。

(情けない)

失って当然だ、と胸に走る痛みにユーノは思う。

動乱の世界を渡っていく仲間としても不十分だったのに、愛してほしいとまで願ってしまった、アシャの優しさにつけ込んで。レアナの妹、セレドの皇女、ラズーンにとって必要な『銀の王族』、おそらくはその範疇を越えてまで、アシャは体を張ってユーノを支え守り救ってくれたのに。

何度も叱られた、一人で行くな、と。

ラズーンの正統後継者、視察官(オペ)、セレド皇族の付き人、どの役割を考えても、ユーノの無茶を諫めるのは当然だったのに。

「.....ほんと...」

私って、ばかだ。

(心配ばかりさせて、迷惑ばかりかけた)

はあ、と溜め息をついたとたん、

「星の剣士(ニスフェル)！」

「んっ」

呼ばれて振り返った。

茶色の長衣の裾をなびかせながら、ユカルがやってくるのに微笑む。

「剣の手入れか？」

「ああ」

近くに腰を降ろそうとするユカルに、剣を鞘に納める。

「今日あたり、ガデロの兵達が来そうなんだろう？」

「ああ。もっとも、ガデロよりモスの方が気になるがな」

ユカルは渋い顔になった。

「ジャントス・アレグノか？」

くすりと笑ったユーノに、ユカルはますます渋面を作る。

「そうだ。あの時、討ち果たしときやよかった」

「仕方ないよ」

ユーノは肩を竦めてみせる。

「ぶつかる時はぶつかるさ」

「そうだな」

ユカルは溜め息をついて、ユーノの指が槍を撫でるのを見守る。やがて、

「星の剣士(ニスフェル)」

ためらいがちに呼びかけてきた。

「ん？」

「アシャに...会わないな」

「.....そうだね」

スオーガにしては穏やかな風が吹き過ぎていく。ユーノの前髪を額帯(ネクト)にもつれ込ませるように吹きつけ、そのままずりと耳元を掠めていく。

「野戦部隊(シーガリオン)がもっと自由に動けりゃ、見つけやすいんだが」

「...」

ユーノは応えず、槍の穂先に映った曇り空と、それを背景にした自分の姿を見つめた。乱れる焦げ茶色の髪、その奥で隙のない漆黒の目が殺気に輝いている。

くすりと、と寂しく笑った。

「ん？」

「いや.....」

不審そうに覗き込んでくるユカルを見返す。

「やっぱりボクは生まれ間違っただな、と思ってさ」

「何が？」

ユカルはきよとんとする。

「お前ほど腕が立てば、男として十分誇らしいだろう？」

「...そうだな」

僅かに目を伏せ、滲みそうになった傷みをユカルの視線から隠す。

「きっと、ボクに一番似合うのは剣、なんだろうな」

「槍も似合ってる。それに、その格好も」

ユカルはにやにやと笑ってユーノを上から下まで眺める。

硬めで跳ねた肩までの髪、額を覆う前髪の下には濃緑の額帯（ネクト）。他の野戦部隊（シーガリオン）同様、ただ細め小さめの長衣、上半身に緑の鎧、背中に剣を负っている。鎧の繋ぎ目に飾り結びされた数本の革ひもは、額帯（ネクト）を与えられた一人前の野戦部隊（シーガリオン）のみが受けられる手柄の徴だ。

「まあ、ちよつとばかし、細くてちっこいがな」

ユカルがからかった。

「今じゃ、野戦部隊（シーガリオン）は烈光放つ小さな星こそ脅威だと言われてる」

勇猛果敢なシートス・ツェイトス、その背を狙えるのは星の剣士（ニスフェル）に骨身を削られてからだ、とも。

「野戦部隊（シーガリオン）か...」

呟いてユーノは吐息を重ねた。

「このまま、ここに居るのもいいな」

「そうだよ、ユーノ」

ユカルが顔を輝かせた。

「ラズーンでの用が済んだら、また野戦部隊（シーガリオン）に戻ってこいよ。お前なら、隊長だって除隊後復帰を認めず、なんて言わないさ」

「ユカル」

ふいに気づいて、ユーノはユカルを見た。

「野戦部隊（シーガリオン）はラズーンの遠征隊だと言ったよね？」

「ああ...それが？」

ユカルは要領を得ない顔で頷く。

「じゃあ、ラズーンのことよく知ってるんだろう？ 『銀の王族』って言うのは、ラズーンで一体どんな『用』を果たすために、集められているんだ？」

「う〜ん...」

ユカルははしこそうな焦茶の瞳に悩んだ色を浮かべた。

「俺達は確かにラズーンの一部だけど、ラズーンにずっと居るわけじゃないからなあ...」

呟いて、広々と続くスオーガの草原の彼方を、敵の姿を求めように見渡したユカルの髪に、さっきよりやや強くなった風が吹き付けた。

「ただ、噂程度なら知ってるぜ。『銀の王族』はラズーン到着後、身なりを整えて、ラズーンを中心、『氷の双宮』に召されることになっている。『氷の双宮』は『太皇（スーグ）』のおわすところで、俺達も易々とは入れないんだ。山を包む氷河と天から降りしきる雪で作られているとも言われてるけど、中は花が咲き木々が芽吹くほど暖かいらしい。『氷の双宮』で『銀の王族』は『太皇（スーグ）』に謁見し...」

ユカルはためらうようにことばを切り、迷ったように頭をかいた。

「謁見し？」

促すユーノに小さく息をつき、思い切ったように続ける。

「未来を語る、と言われてるんだ」

「未来を、語る？」

ユーノも戸惑った。導師ならいざ知らず、『銀の王族』が未来を語る？

「でも、ボクは語るべき未来なんて知らない...」

考え込みながら唸る。未来どころか、自分が生き抜ける明日のことさえ語れないというのに。

「だよな？」

ユカルも肩を竦める。

「俺も噂で聞いたただけだから」

隊長もそのあたりははっきり教えてくれないんだよな、とユカルは不服そうに唇を尖らせた。

「前は額帯（ネクト）も与えられていない半人前だからだと思ってたけど、どうもそういうことじゃないようだし」

「未来を...」

「単に謁見して、地方の忠誠を伝えるだけかも知れないぜ。ほら、地方の忠誠が確かなら、ラズーン

にとって安定した未来が描けるってことだろ？ 何せ、ラズーンってところはいろいろ伝説が多いんだよ」

「う...ん」

だが、たったそれだけのために、子飼いとも言える視察官（オペ）を各地に放ってまで『銀の王族』を集める必要があるのだろうか。

（それに、『銀の王族』は皇族ばかりとは限らない...）

もし、地方の忠誠や安定を確かめるためなら、それぞれの国の主を集めればいだろうに。

それに、とユーノは考えを進める。

（もし、『銀の王族』が恭順を示す使節なら、どうして『運命（リメイン）』があれほどまで阻もうとする？ あれだけ犠牲を払って？）

きっと世界には多くの『銀の王族』が散らばっているのだろう。一人や二人欠けたところで、それこそ大きな問題にはならないのではないか。

なのに、『運命（リメイン）』の動きは、そのうちの一人でも屠ることができれば、それがそのまま自らの勝利に繋がっていくと考えているようだ。

（なら、どういうことになる？）

『銀の王族』のラズーンにおける役目は、きっと忠誠を誓うとか、謁見し恭順を示すとか、そういう形式のものではないのだ。もっと何か、ラズーンに大きな影響を及ぼすもの.....それこそ、存亡に備えるような。

（うん、それなら）

『運命（リメイン）』が手勢を繰り出し、視察官（オペ）とやり合い、『銀の王族』のラズーン到着を阻もうとするのもわかる。国に居るときに襲わなかったのは、視察官（オペ）が着くまで、それとわからないからではないのか。

（ということは.....）

それまでして、『銀の王族』は隠されている、のか、本来？

なのに、ここに至って、わざわざその存在を晒すようなかき集め方をしている、それにどんな理由がある？

（二百年祭）

そうだ、アシャは『銀の王族』が何かそれに関係するようなことを口にしていたではないか。大きなその動きに対して、のんびりしていられなくなった、だから手練の視察官（オペ）を放って、全世界から『銀の王族』をラズーンへ引き寄せてきている、というのはどうだろう。

（かなり近いかもしれない）

ユーノは顔を上げた。

「じゃあ、ユカル、ラズーンの二百年祭って何だ？」

「ラズーンの.....にひやくねんさい？」

「うん」

「.....何だ、そりゃ？」

「えっ」

わけがわからないという顔のユカルに呆気を取られる。

（ラズーンの間人が、知らない？）

「二百年なんて、長生きの者なんていないだろ？」

「あ、いや、年齢じゃなくて.....お祭り、みたいなんだけど」

「祭り.....？ 地方の祭礼儀式みたいな？」

ユカルは繰り返し首を傾げている。

「じゃ、じゃあさ、太古生物の復活は？ 知ってるよね？」

「ああ、レガとかクフィラとかだろ？ 『運命（リメイン）』の陰謀らしいな」

「『運命（リメイン）』の陰謀...」

（いや...たぶん、そうじゃない）

ユーノは妙な胸騒ぎに眉を寄せた。

確かに、レガは『運命（リメイン）』が使っていたことがあるし、ガジェスにも『運命（リメイン）』の影があった。

だが、太古生物の復活について話してくれたアシャの口調には、もっと違うもの、身内にある汚れを語るような苦さかあったように思った。非道で悪辣な攻撃を仕掛けてくる『運命（リメイン）』への非難というより、動かし難い宿命に歩まされた道筋を話すような重い憂いがあった。

（まるで、ラズーンが全ての元凶みたいに）

今世界を覆う動乱の嵐には、ラズーンそのものが大きく深く関わっている、それはきっと間違いのない。太古生物の復活も、『運命（リメイン）』の暗躍も、全てがそこに繋がりが結びついている。その

動きそのものを『二百年祭』と呼んでいるような、そんな感覚だ。

(だけど、ユカルが知らないなんて)

考え込んだユーノの脳裏を、ふっと一つのことばが掠める。

(ラズーンの正統後継者)

では、世の人々、ラズーンに属する者さえ知らぬその謎は、ラズーンを継ぐ者のみに伝授されているのだろうか。

(なぜ...)

思いつく理由は二つある。

余りにも難解な謎なので、選ばれたほんの一握りの人間しか理解できない。あるいは、長い時間をかけて導かれ教え込まれないとわからないという場合。

もう一つは、余りにも危険な謎、この世の全ての意味を覆す謎ゆえに、世界を支配する一部の者にしか知らされていないという場合。

(ひょっとすると、その両方、か)

理由もなく、ぞくり、と背筋が震えた。

ユーノがラズーンへ向かうということは、今まで思っていたより複雑な事情を含んでいるのかもしれない。

「一体何だろうな、その、二百年、祭ってのは...」

なおも首を捻り続けるユカル、そのことばをふいに低く深い歌声が遮った。

「...いと美しき乙女よ...」

野戦部隊（シーガリオン）の野営の片隅から響いてくる。

「歌...?」

「トシエンだ。あいつは歌がうまいよ」

「ふうん」

「おおかた、また、頼まれた恋歌でも教えてるんだろ」

「教える?」

「そ」

ユカルが悪戯っぽく片目をつぶる。

「野戦部隊（シーガリオン）の暮らしは、年がら年中、戦ばかりだ。それでも俺達だって人の子だからな。たまには本気で恋もするさ。ところが、いくら気持ちが募っても、それを伝える術なんて持ってやしない」

ひょいと自分の姿を見回すように両手を上げてみせる。

「だから、せめてああして、トシエンに恋歌でも教えてもらって、目当ての娘に歌ってみようってのさ」

「へえ...」

「...いと...美しい.....乙女よ...」

背の高いトシエンの側に立った、いかにも野戦部隊（シーガリオン）の典型のような武骨な男がおどおど音律を繰り返す。

「その優しい腕もって...」

「その.....優しき...か...かいな.....もち...もって...」

「幼子を抱くか...」

「おさ...おさなご.....を.....いだ...くか...」

「あーあ、見てられねえな」

ユカルがふてくされた口調で言って、トシエンに背を向けた。くすりと笑みをこぼしたユーノは少し目を閉じ、トシエンの豊かな響きの声に耳を傾けた。

「その甘き唇もて我を癒すか...」

習っていた男の方は気が挫かれてしまったらしい。その後を繰り返す声はなかった。

「我は傷つけり

そなたのことばにて

この胸は血を流し

この目は涙に濡れる.....

ああ

哀れみたまえよ

そなたを恋うるにはあまりに惨めな我と言えども

この心はすでにその側にあり

あああ

哀れみたまえよ

哀れみて

いくばくかの時を

我のために笑みたまえよ...」

（あわれみたまえよ...か）

ユーノは目を開けた。

その祈りは幾度、彼女の心の中で繰り返されたことだろう。アシャの笑みを受けるたびに、アシャの目が注がれるたびに、その時が永遠に続けばいいと思い、すぐにその場から消えてしまいたいと思った。

（笑わないでね、アシャ.....想うことは自由だと.....誰かが言っていたんだ.....私より可愛い娘が、ね）

ふと、どんな想いをしてもいいからアシャの側に居たい、と切ない気持ちになって、ユーノは眉をひそめた。

（ああ...私らしくない.....ばかなことを考えている）

「いい声だろ」

「そうだね…」

「どうした、星の剣士（ニスフェル）？」

「…いや」

不審そうなユカルの声にとっと笑って、ユーノは槍を取り上げた。

「さ、仕上げをしておくか」

「頼むぜ、星の剣士（ニスフェル）。野戦部隊（シーガリオン）を代表する剣士なんだから」

「ああ」

振り仰いで任せといて、と微笑むと、相手が一瞬奇妙な顔になった。戸惑うようなたじろぐような、それでいてまじまじとこちらを覗き込むような。

「星の剣士（ニスフェル）！」

唐突に呼ばれてユーノは視線を外す。

「何だ」

「隊長がちょっと来いってさ」

「わかった！　じゃ、ユカル」

「あ、ああ」

剣を背に負い立ち上がり、ユカルの側から離れようとして、相手が已然、どこかぼんやりとした顔で自分を見上げているのに気づく。

「ユカル？」

「……」

妙にぼうつと、いや、うっとり、とも言っていないような甘やかな表情にユーノは戸惑った。

（ユカルも誰かを好きなのかな）

「行くぞ？」

「えっ、あつ、うん」

はっとしたユカルがいきなり見る見る赤くなっていくのに二重に戸惑う。

「どうしたんだ？」

「あ、いや、そのっ」

ぶるぶるぶるっ、とユカルはふいに激しく顔を振った。顔ばかりではない、立ち上がったかと思うと、ぐいぐい両手を押し下げるように体を動かし、何考えてんだ俺、とか、ちがうちがう、とか呟き続ける。

「男なんだぞ、男だ」

挙げ句にユーノに背中を向けて言い聞かせるように唸るのに、ユーノはますます首を捻る。

（男？）

ひょっとして、ユカルの好きな相手というのは男性なんだろうか。

（ありえなくもない…）

脳裏を掠めたのはイルファだ。ただ、イルファの場合は、アシャを女性と考えてしまって、という経過もあるが。

（野戦部隊（シーガリオン）にそういう対象になりそうな人はいないよなあ…）

周囲のがっしりぎっちり筋肉群を見回して、いやそういう場合もあるのかと思い直し、いやいやそれはどうだろうとぐるぐる考え出した頭を、ユーノは慌てて振った。たとえそうであっても、ユーノには力になることなんてできそうにない。

（自分の気持ちさえ持て余しているんだもんなあ…）

「話があるなら、また後で聞くよ」

「えっ、話っ？　いやっ、あのっ、後でっ、後でなっ！」

ぱっと振り向いたユカルがばたばたと大きく両手を振るのにくすりと笑って背中を向けた。

「おい！」

ユーノは辺りを見回して叫んだ。

「どこにいる？」

先を走っていたはずの平原竜（タロ）もいなければ、呼び出したはずのシートスの姿もない。

呼びに来た男に従ってきて、いやに飛ばすなと思いつつ、仲間から見えなくなるだろう、これほど離れて何をするんだというあたりまで引張ってこられ、そしてついさっき、男は岩かどを曲がると平原竜（タロ）もろともに姿を消してしまったのだ。

（あいつの名前は何て言ったっけ）

野戦部隊（シーガリオン）全員の名前をまだ覚えていない。覚えていないうちに、額帯（ネクト）を受け、星の剣士（ニスフェル）などという異名を当てられたユーノと、何となく距離を取った隊員

もいる。

そう言えば、あの男とはまだことばを交わしたことはなかったかもしれない。

「シートス！」

返ってくるのは沈黙のみ、応えはない。

周囲を見渡しつつ、あちこちを見回って、ユーノは嫌な予感に顔をしかめた。

(おびき出された?)

可能性は高い。

(でも、なぜ?)

手綱を引き、向きを変えようとする、突然、曇り始めた空から風が吹き下ろし、赤茶けた草原をそよがせる。スオーガ特有の疾風だ。

「ん？」

波打つ草原を眺めたユーノの視界にふと、一カ所、妙な揺れ方をする部分が飛び込んだ。そこだけ何かで区切られたように、草のそよぎ方がずれている。

近づいて思わず息を呑んだ。

そこには、かなり深いだろうという裂け目が口を開けていた。スオーガに時々見られる『風の乙女(ベルセド)の住みか』と呼ばれる場所だ。遥か昔の大きな地震が、このように台地に傷を残したのだと言う。スオーガの風はこの裂け目を通り抜け、物悲しい声を上げて草原を走り抜けていく。

スオーガの人々は、それを『風の乙女(ベルセド)』と呼んでいた。ごくまれに、家畜がこの風に誘われて物狂いし、裂け目の中へ誘い込まれる。『風の乙女(ベルセド)』に呼ばれたと噂される現象だ。

薄暗い曇天の空は低く、光は重かった。裂け目の上層、ごつごつした岩肌はおぼろに見えるものの、下層から底は闇に沈んでほとんど見えない。その裂け目の奥に引き込まれるような気がして、ユーノは慌て気味に体を立て直し、ヒストの向きを変えた、次の瞬間。

どっ。

「っ！」

衝撃に目を見開くと同時に、硬直した体が一気に背後へ持ち去られた。警告するように嘶くヒストの音が遠ざかる。馬の背中から軽々吹っ飛ぶ自分の右肩に突き立っている槍、その朱房を、ユーノは呆然と見やった。

(なに.....?)

明らかに野戦部隊(シーガリオン)の槍、味方の武器に射抜かれたことが信じられない。とろとろと流れる時間の中で、必死に答えを探して見回した目に、前の岩陰からのそりと現れたコクラノの姿が映った。それだけではなく、その後ろ、コクラノの背中を守る盾のような黄色のマント、モスの遠征隊、ジャントス・アレグノの姿もある。

(不覚...っ)

「っう！」

どさっと地面に投げ出され叩き付けられ、激痛に意識が明滅した。傷の痛み、衝撃の大きさ、何より視界に入ってくるコクラノのひねくれた笑みに吐き気がする。

「いい様だな、え？ 星の剣士(ニスフェル)」

「くっ」

勢いよく槍を抜かれ、ユーノは小さく声を上げた。熱いぬめりが右肩からじわじわと背中へ腹へ広がっていく。

「運のいい奴だ、急所をそれてる」

ジャントスが皮肉っぽい笑い方をしながら屈み込んでくる。

「だが、そう幸運でもあるまいよ」

コクラノがにやにや笑いを顔中に広げながら、槍の穂先を拭う。

「...卑怯.....者.....モスと通.....じた...のか.....」

込み上げる吐き気と戦いながら、ユーノは呻いた。

「俺は自分の力を認めてくれるところへ行つたまでさ。それに、お前とは...」

相手は一步、ユーノに近づいた。必死に体を引きずって後じさりをする。また近づく。また下がる。肩の下でざらりと岩が砕けて転げ落ちる音がし、総毛立った。背後から吹き上げてくる冷たい風、あの裂け目に追い詰められたと知るのに時間はかからなかった。

にたり、とコクラノが笑い崩れ、片足をこれ見よがしに引き上げる。

「これまで、だ！」

「あ!!」

がっ、と激しい一蹴りがユーノを跳ね飛ばした。何を掴む間もなく、一気に裂け目に落とされる。

「さらばだ！ 星の剣士(ニスフェル)!! あははははあああ！」

「く……う…つ」

響く哄笑がみるみる遠ざかる。

落下していく、底なしの闇。恐怖が体を押し包む。

(裏切り……野戦部隊(シーガリオン)が危ない…)

「ユカ…ル…」

シートス。

「アシ…」

声は途絶えた。

ユーノの意識は体とともに、深い闇へと吸い込まれていった。

5. 『風の乙女（ベルセド）』

「……ここにもいない、か」

野戦部隊（シーガリオン）隊長、シートス・ツェイトスは難しい顔で、草の上の野営の跡を見つめた。黒く短い髭に囲まれたその顔には、厳しいものが漂っている。

「隊長!!」

ドスツ、ドスツ、と疲れた平原竜（タロ）の重い足音を響かせて、部下の一人が偵察から戻ってきた。

「どうだった？」

「それがおかしいんですね。ガデロの奴らどころか、ここ数日、辺りをうろついていたモス兵士の姿もありません」

「ふうん」

シートスは髭に指を当て、考え込む。

「どうなったんですか？ 『運命（リマイン）』の奴ら、スオーガから手を引くつもりなんじゃないか」

「そうは思えんな……ん？」

視線を上げて、シートスは赤茶色の草原を蹴散らしてくる一騎の武者に気づいた。栗毛の馬をひたすらに駆り立ててくる。かなり至急の用件と見える。

「隊長…」

部下が緊張した気配で剣の柄に手をかける。

「…いや」

シートスは馬上できらりと光ったものに気づいて眼を見開いた。笑みがこぼれる。

「大丈夫だ、敵じゃない」

「お知り合いですか」

「知り合いも知り合い…あれは、アシャだ」

「え！」

部下は高名な男の名に姿勢を正し、平原竜（タロ）の手綱を握り直した。

騎馬の男の姿は、それほど待つまでもなく目の前に拡大されてきていた。鈍い日の光を浴びて、なお華やかに輝く金褐色の髪は、細い革ひもで留められている。その下にあるのは、馬の勢いに不似合いな優しい顔立ち、深く澄んだ紫の瞳は激情に炎とならんばかりなのが、顔立ちに妙な不安定さをもたらしていた。

「珍しい格好をしてるな。あの髪型はあまり好きじゃなかったはずだが」

「あの」

「ん？」

「あれ……男……でしょうね、やっぱり」

部下のぼんやりとした呟きにシートスは苦笑いした。

「それをあの方の前で口にするなよ。半殺しにされるぞ」

「はっ、はいっ！」

「シートス！」

突然響いた鋭い声に、部下は怯えた顔を一層強張らせた。何せ、名にし負う野戦部隊（シーガリオン）隊長を、シートスなどと心安く呼びかける男を相手にしようというのだ。

「シートス！」

「お久しぶりです、アシャ・ラズーン」

「挨拶など後回しだ」

アシャはひどく苛立った声で応じた。上気した頬に、そう意図したわけではないだろうが、この上もなく悩ましい色を浮かべてことばを継ぐ。

「野戦部隊（シーガリオン）に星の剣士（ニスフェル）というのがいるそうだが」

「ええ、いますよ」

シートスは呆気にとられた。彼の知っているアシャというのは、『氷のアシャ』の噂通り、常に冷静沈着、どんなことにも動じない男で、シートスはアシャに感情の起伏があるのかと訝ったこともあったのだ。それが、たかが『銀の王族』一人の行方にこれほど動揺している。

「星の剣士（ニスフェル）がユーノ、というのは本当か」

「ええ。セレドのユーノ、『銀の王族』で視察官（オベ）はあなただと言っていました」

「そうか…」

アシャの顔に心底ほっとしたような表情が浮かび、彼は少し緊張を解いた。ぱさりと額に乱れかかった金の髪をかきあげながら、ようやく、シートスが自分に向けている奇異の眼に気づく。

「あ、その」

アシャはうっすらと赤くなって、ことばを重ねた。ただでさえ華やかな顔が、炎の色で開く花のように悪目立ちするのに、側に居た部下が礼儀もわきまえずにごくりと唾を呑む。だが、その反応に構わず、アシャは不安げに問いかけてきた。

「ユーノは無事なのか？」

「無事も無事」

シートスは微笑しながら平原竜（タロ）の向きを変えた。呆然としている部下に、ついてこい、と眼で合図する。そのシートスに馬を並べながら、アシャはようやく落ち着いてきたようだ。

「あなたも聞いた通りですよ。星の剣士（ニスフェル）。星の剣士の名前の方が恥じるでしょうな」

「...」

淡く微かな、どこか誇らしげな笑みがアシャの唇に滲んだ。

「それに、あの子の剣は何ですか？ 『銀の王族』があれほどの剣を使えること自体が驚きだが...」

「どのように見える？」

「そうですね」

シートスは少し考え込んだ。頭の中にこれまで戦って来た相手を浮かべてみる。だが、どれもユーノの剣の冴えに重なる者はいなかった。シートスは軽く首を振って、ちらりとアシャを見やった。

「強いて言えば、あなたの.....視察官（オペ）の剣に似ている」

「...」

「もっとも、『銀の王族』のように優しくか弱い一族が、視察官（オペ）の守り即攻撃の荒々しい剣を身につけられるとは思いませんが」

「そうだ、と言ったら」

「え？」

「視察官（オペ）の剣を未完成ながら身につけた『銀の王族』だと言ったら？」

「.....あなたが教えられたんですか」

シートスはアシャの悪戯っぽい眼が含んでいる問いに応えた。

「...道理で、並の野戦部隊（シーガリオン）じゃ敵わないはずだ」

「...」

ふっと、悔しいほど魅力的な笑みがアシャの唇から零れた。教え子に対する自信と信頼、自分が育て上げた相手の評価に満足した顔、今まで見たことのない大人びた微笑。

側に居た部下がもじもじと体を動かす。どうやら、その男もユーノに手合わせ願って、見事一本取られた口らしい。

「『銀の王族』が、視察官（オペ）の剣を、ね」

繰り返しながら、ユーノが初めて彼の前へ姿を現した時のことを思い出していた。

どこか追い詰められた緊張感漂う黒い瞳、戦場ばかりを見てきているような振舞い、野戦部隊（シーガリオン）のふてぶてしい男達にもたじろぐことなく、ことばの端に宮廷生活を思わせる上品さが漂うのに、質素な天幕（カサン）の生活も黙々と耐え忍んだ。

（なるほど）

シートスは平原竜（タロ）の上に体を安定させながら考えた。

（アシャに見込まれた剣士ならば、それも頷ける...しかし）

ふと閃いたことばを口に乘せる。

「アシャ、星の剣士（ニスフェル）は、『あなたにとって』何か特別な人間なのですか？」

視察官（オペ）の剣は特殊な剣だ。単に才能だけでは身につけられない。感覚から組み直されると聞いたことがある。

だからこそ、それを視察官（オペ）以外が使えるようにはならないとされる。教えられる者の教師への強い信頼、教える者の生徒への深い理解、それらがうまく重なって初めて教えられる類のものだとも。

それだけ手間ひまかかる難しい仕事、言い換えれば、それほど、誰かに、自分の全ての時間を注ぐような接し方をするアシャを、シートスは知らない。

（子ども？ まさかな）

親子の絆ならあり得るかも知れない、だが、そんな絆自体がまずあり得ない。

「.....」

沈黙があった。

駆け続ける草原、その地平の彼方へ向けていた目を、緩やかにこちらに回してきたアシャが、低くぱつりと口にする。

「そうだ」

く、っと引き締められた唇が、先ほどまでの興奮を消し去っていた。削いだような線の頬、暗く陰った紫色の目の語る想いをシートスは読み取る。

「失うわけにはいかない、ですか」

「...」

(たとえ自分が側に居なくても、その命を守り切るために)

その想いの深さに価値するのは、おそらく、世界でただ一人の存在だから。

「よろしい。では急ぎましょう」

「ああ」

怯えがちな一頭の馬と、重い地響き立てる二匹の平原竜（タロ）は、速度を上げて野戦部隊（シーガリオン）の野営場所を目指した。

ピツ……チャーン……チャーン……チャ……。

「ん……」

岩肌で妙な形に区切られた闇に、遙かな高みからの水音、小さな雫が滴った音が胥して広がった。

ぐったりとしていたユーノは微かに呻いて身動きし、ぼんやりと目を開いた。

「……」

体の下にあるのは、ごつごつとした岩だ。自分の体が不自然な形で横たわっているとも感じる。

そろそろと上げた手で額に触れると、べっとりとしたものが指に絡んだ。見開いた目の前にもってこずとも、それが何だかわかる。血糊だ。かなりの出血の後、時間が経ち、自然に固まり始めた血が塊になりかけて指にへばりついている。

でも、『なぜ』だろう？

「う…」

腰と肩の辺りにずきりと痛みが走る。眉をしかめて痛みの部位を押さえたユーノは、右足が細い水の流れに浸かっていたのに気づいた。引き上げ、のろのろと茶色の衣の裾を縛る。

鈍く痛みを訴え続ける体とは違った、別種の違和感がユーノを悩ませていた。

何か違う。そういった漠然とした思い。

もう一度そっと額に触れた。今は止まっているが、再び出血してくるかも知れない。

衣の片袖に剣で切り目を入れて裂き、額に巻こうとすると、ふいに固いものが指に触れた。それは頭にしっかりと縛り付けられている。今の今まで気づかなかったのは、傷のせいかな。

自分の物ではないような指を動かして、紐を解く。血糊で額に張り付きかけていたのだろうか、引きはがす時に鋭い痛みがあったが、それほど傷を抉ったわけではないようだ。

血でぬめりべとべとしている物を、そろそろと水で洗い、目を凝らして見つめた。

微かな光に浮かび上がったのは、濃い緑色の細工もの。紐がついていて、何かの認識票のようにも見えるが、額につけていたのだから装飾品の一種なのだろう。これをつけていたから、額の傷がざっくりと割れず、この程度で済んだと知れる。

まじまじとそれを眺めていたユーノは、不意に心の中に浮かび上がった問いに耳を傾けた。

(これは、『何』だ?)

再び周囲を見回す。上の方から白っぽい光が差し込んでいる。

(裂け目?)

瞬きして、その光景に眉を寄せる。競り上がった岩肌が狭まり身を寄せ合う彼方、見つめていると、その向こうに広い大きな空間がある。灰色に激む空…重い雲がゆっくり動いている。

(ボクはあそこから落ちたのか)

「落ちた？」

思わず口に出した。

それは今の今まで思っても見なかった考えだった。何となくずっとここにいたような気がしていた…と、それを考え続けているユーノの頭に、もう一つの問いが浮かび上がった。

(ボクは『誰』だ?)

「星の剣士（ニスフェル）は？」

「さあ、見てないな」

「隊長は？」

「まだ帰ってないみたいだが」

「ふ…ん」

ユカルは不安な思いを抱えたまま、トシェンから離れた。シートスが星の剣士（ニスフェル）に何の用があったんだろう、と考える。

(偵察に星の剣士（ニスフェル）の腕がいるとは思えねえし)

何か妙だった。何かの噛み合なかった。コクラノの姿が見えないことも、一層ユカルの不安をかきたてた。何かよからぬこと、少なくとも星の剣士（ニスフェル）にとって好ましくないことが、ユカルの知らないところで進んでいるという感覚を捨て切れない。

ついにユカルはきゅっと唇を結び、自分の平原竜（タロ）の側に寄った。大人しく草を食んでいた相手は、主人の姿を認めて不審気に首を上げ、尖った鼻面を突き出した。

シートス達が出ているのはスオーガの中心の方だと聞いている。

「...よし」

背に剣を負い、荷を確かめる。直接出向いていくつもりになっていた。

本来ならシートの許可なしに、物見（ユカル）が隊を離れることなど言語道断の行為だったが、今のユカルには、その掟さえも取るに足らぬことのように思える。

（何か、変だ）

その勘働きも物見（ユカル）の才能の一つ、ならば従ってもいいはずだ。

怯みかける心を、脳裏に過ったユーノの笑顔が後押しした。

（叱られたら謝ればいい）

愚かな振舞いだという自覚はある。自分の愚かさに気づき、過ちを認め、懸命に償おうとする者を、シートは無闇に貶めたりしない。

いざ平原竜（タロ）に跨がろうと顔を振り上げたユカルは、視線の先にこちらへ向かって駆けてくる三騎の武人に気づいた。二騎は平原竜（タロ）、もう一騎は栗毛の馬だ。

（星の剣士（ニスフェル）？）

ほっとして気を緩めかけたユカルは、次の瞬間、今までよりも緊張した。

栗毛の馬の額に、ユーノの呼び名の一因ともなった白い星（ヒスト）がない。

（星の剣士（ニスフェル）じゃない）

だが、明らかにシートス達とわかる、その二騎の平原竜（タロ）の近くに、他の馬はいない。

「っ」

矢も盾もたまらず、ユカルは自分の平原竜（タロ）に飛び乗るや否や、シートス達に向かって駆けた。向こうもすぐにユカルの接近に気づいたらしい。乗り手が誰だか確認する短い沈黙の後、厳しい叱責が飛んで来た。

「ユカル！ 物見のくせに勝手に隊を離れるな!!」

びくっ、と体を竦ませながらも、ユカルはなおもシートスに向かって平原竜（タロ）を駆り続けた。

「ユカル！」

「隊長！」

声を荒げて叱りつけようとするシートスの声に、精一杯の意地で声を張って応じる。

「星の剣士（ニスフェル）は一緒じゃないんですか?!」

「何...？」

いつものように、詰りはしないが、十分に骨身に堪えるたしなめを口にしようとしたシートスが、ぎくりとした表情になった。ユカルはますます不安をかきたてられて、平原竜（タロ）を駆って相手の側まで迫り、そこでようやく、馬に乗っている男に気づいて目を見開いた。

「アシャ...ラズーン...」

「光栄だね。名前を知っていてくれるとは」

にこりと相手が微笑する。息を呑むほど艶やかな笑み、話には聞いていたが、実際に見たのは数えるほど、それもこれほど間近にその美貌に出くわすと、言うべきことばが雲散霧消してしまう。

しかもこの相手は、ただ美しいだけの人形ではない、『太皇（スーグ）』の第一正統後継者に選ばれたほどの才能の持ち主なのだ。

「ユカル」

シートスが、ごほん、とかなり白々しい咳払いをした。我に返ったユカルに改めて口を開こうとする、だがそれより先に、ユカルは迸るまままくしたてた。

「星の剣士（ニスフェル）を知りませんか?!」

隊長への敬意、アシャへの礼儀、そんなものを吹っ飛ばしていると気づいている、だがどれほど凄い人物であれ、今のユカルにとっては、ユーノの行方の方が遥かに大事だ。

「いや...こっちにいないのか？」

（隊長が知らない）

「さっき...」

ひやりとした感覚にことばが途切れそうになったのを、必死に声を張り上げる。

「隊長に呼ばれたと言って出て行ったまま、帰ってこないんです！」

「何？ いや、俺は呼んでおらん」

「...っ」

予想はしたが、あまりにも恐れていた通りのことばに、ユカルは怯む。と、

「誰がそう言ったんだ？」

そのユカルの興奮を一気に押しつぶす殺気を放ってアシャが口を挟み、思わず黙った。振り向くこちらを見返した紫の瞳は、研いだばかりの槍を思わせる酷薄な色、先ほどのにこやかさを微塵も残していない。

「あ、あの...ジャルノンです」

思わず声が引き攀った。答えを間違えれば殺される。そんな無意識の恐怖だ。

「彼は今どこに？」

「それが...」

しまった、それが問題だったんだ、と胸に広がる敗北感に臍を噛みながら答えた。

「コクラノと同様、姿を消している」

「まずいな」

シートスが苦い顔になった。

「アシャ、実はジャルノンはモスへの投降を疑われていた男なんです。もう少し密通している証拠を掴んで、モス側の方も始末をつけようとしていたのですが」

「...」

アシャが無言で頷いた。瞳はますます暗く冷たい色になる。

「コクラノは、この前、ユーノに恥をかかされている。星の剣士（ニスフェル）にいつか思い知らせると公言していました」

「可能性としては」

感情を強いて押さえたのだろう、アシャの声は淡々として厚みがなく、端々が胸に刺さるような鋭さだ。

「ユーノがおびき出されたというのが妥当だな」

「.....」

互いに顔を見合わせる。何のために、という問いはない。こういった暮らしをしていれば、そして、人の心の闇に少しでも接することがあるのなら、行方不明になった仲間の運命は嫌というほど思い知る。

「ジャルノンはどっちへ行った？」

「東の方です」

「こちらか.....よし」

手綱を引いたアシャはシートスを振り向いた。

「先に隊へ帰っててくれ。俺が探す」

「そういうわけにはいきません」

シートスが渋った。

「これは、野戦部隊（シーガリオン）の責任だ。私も行きます」

「周囲が落ち着いていない。こんな状況にこれ以上、兵隊だけ置いておくのは...」

「俺が行きます！」

ユカルは声を上げた。訝しげに振り向くアシャと、やれやれと言った表情のシートスに口ごもりながら、それでも主張する。

「俺だって野戦部隊（シーガリオン）の一員だし.....それに.....俺.....あいつ、じゃない、彼のことが好きですし！」

「彼？」

シートスは一瞬複雑な表情になって首を傾げ、やがて微妙な笑みを浮かべながら、アシャを振り向いた。

「星の剣士（ニスフェル）は女性、ですよ？」

「は？」

「ああ...まあ」

「え？」

二人を交互に眺め、やや強張った顔のアシャに、ようやくユカルも冗談ではないとわかる。

「え、あの...女性...って...女？ あの、隊長、星の剣士（ニスフェル）って、女、だったんですかあっ？」

「あれだけ一緒に居たくせに、気づいてなかったのか」

シートスが呆れ顔で苦笑を浮かべた。

「俺はてっきり、べったりくっついているから、他の奴らからガードしてるとばかり思ってたぞ」

「いや、だって、俺、まさか、あれほどの遣い手が女？ いや、そんなだって、あり得ねえ...っ」

うろたえて口ごもり、それでも思い出したのは細身の体や高めの声、ふとした拍子に妙に柔らかく見える仕草や表情にどきりとしてしまった自分の感情、みるみるほてってくる顔が何を意味するのかは、男ならわかること、それでもまだ、ユーノが女であって嬉しかったと口にするにはためらいがある。

「行くぞ！」

「あ、はいっ！」

気がつけば、アシャは既に先に馬を走らせている。シートスが隊を離れるのに同意してくれて、ほっとしながら素早く頷き返して、アシャの後を追う。

「は、あっ!!」

（ち、くしょうっ...!）

平原竜（タロ）の掛け声とともに、胸の中で爆発した、不思議に甘い罵倒の種類を思いつくまもなく、あっという間に距離をあけて自分を置き去りにしそうなアシャを、ユカルは必死に追いかけた。

額に布を巻き付ける。右肩が異常に熱っぽい。探してみると、やはりねっとりとした血糊の感触があった。

だが痛みはあまり感じない。激しい動きをするとそれなりに痛むが、普通の動作には支障がない。頭のどこかと同じように、そこだけ感覚が麻痺しているようだ。血がこれほど流れているのに痛みがないというのは妙な感覚だった。

(一体、ボクはどうして怪我をしたんだろう)

ぼんやりと岩肌を寄せもたれかかりながら、ユーノは考える。

(どうして、裂け目から落ちたんだろう)

繰り返す問いは、軽い頭痛とともに、一つの問いに集約されていく。

『ボクは誰なんだろう』

ここの仄かな明るさを頼りに、さきほど、手に掬った水鏡に自分を映してみた。

焦げ茶色の髪は肩のあたりで跳ね返っている。瞳は濃くて暗い色、何色かはよくわからない。顔立ちはどこらかという意地っ張りの鋭い顔、削いだような頬の線ときつく食いしばったような唇が印象的で、正直美形にはほど遠い。

だが、その鏡像がもたらしたのは虚無だけだった。何も思い出さないし、何の手がかりも与えてくれない。

額の布が僅かにずり落ち、手を上げて結び直そうとし、絡み付く髪がうっとうしくなる。

(邪魔だな)

左手で剣を掴んだ。右手で掴んだ髪をざくりと切る。少しは手当がしやすくなる。そのまま、ざくりと髪を切り落とし、水に流す。短くなった髪の毛が、それ以上上手く掴めず、剣でも切れなくなると、溜め息をついて岩にもたれた。

(疲れた)

重い疲労感、喉の渇きはあるが、水を汲むのも億劫だ。溜め息をつき、目を閉じ……そしてユーノは、己が何者かもわからぬまま、一時の眠りに落ちていった。

「どう…っ……どう」

アシャは、馬に軽く声をかけて止まらせた。汗に濡れ、額にへばりついた髪をかきあげる。

かなり走り、既に野戦部隊（シーガリオン）が見えない位置まで来ているというのに、ユーノの気配一つ、影一つもみつからない。あちこちに点在している赤茶けた岩塊の後ろを、一つ一つ探るというわけにもいかない。厳しく唇を引き締めたアシャは、背後に近づいた物音に振り向いて問う。

「ユカル」

「はいっ…」

ようやくアシャに追いついてきた少年は、軽く息を切らせて答えた。

「もし、お前が『運命（リマイン）』支配下（ロダ）の者を姿形残さず始末するとしたら、どうする？」

「えっ…はい…あの…」

ユカルは緊張した顔に微かな惑いを浮かべ、手綱を握りしめて汗ばんだらしい片手を膝の辺りにすりつけた。

「俺…俺なら…」

ここ数日間、走り回っていたスオーガの草原を見回す。岩塊の陰などは子どもだました。もし、その姿形を、一目につかぬように始末してしまうとしたら。

ふと、何かに呼ばれたように、ユカルの眼が風に波打つ草の間をくぐり抜けた。

「俺なら『風の乙女（ベルセド）の住みか』へ落とすでしょう……では！」

はっと目を見開くユカルに、アシャは苦く唇を歪めた。

「俺もそうするだろうな。特に、その人間が有名であればあるほど」

言いながら、アシャの胸の内にじりじりと焦燥が満ちてくるのを必死に押さえつける。

「この辺りの裂け目を知っているか？」

「ええ、大体は」

ユカルは、はしこそうな焦茶の目を、草原の数カ所に走らせながら応じた。

「もう少し東へ行った所に一つ、それから南に行った所はかなり大きいのが一つあります。でも、もっと小さな裂け目なら、少なくとも五つはあります」

「七、八つか」

ぐいとアシャは手綱を引いた。

「手当たり次第にあたってみるしかないな」

「では、手分けしましょうか？」

「いや、ひよっとすると伝令に飛んでもらわなければならないかも知れない」

自分の声が温度を下げる。

「どうも嫌な気配がある」

「『運命（リマイン）』の？」

ユカルはどきりとした顔になった。彼自身はそう感じていなかったのだろう。

「おそらくはな」

（余分な手間がかからなきゃいいが）

スオーガにはもう一つ厄介な魔物（パルーク）の噂がある。それは太古に生きていた生物で、近づく者を虜にするという。

「とにかく、近くの裂け目から当たってみよう」

「はい！」

アシャはユカルについて馬を進めた。

空は次第に、おどろおどろしい不気味な色に染まっていく。風が一際強く草原を吹き渡って、前に居たユカルがいましましげに眩くのが聞こえた。

「ちえっ.....『風の乙女（ベルセド）』でも出そうだ」

（『風の乙女（ベルセド）』か）

ユーノもそうだな、と頭の隅で考える。

（追いかけても抱き締めても、いつもいつも俺の腕から幻のように擦り抜けていってしまう）

「！」「アシャ！」

ユカルの不安げな声を待つまでもなく、突然前方から押し渡ってきたような風が、普通の風とは違っているのを感じた。鼻先を掠める空気、その瞬間。

（これは）

「ユカル！ 伏せろ！ 息を止めるんだ！」

叫んですぐに身を伏せる。そのアシャとユカルを巻き込むように、風は一気に吹きつけてきた。まとわりつくような異様な感触、まるで何十人という乙女が一斉に小声で話しかけてきたような錯覚を与える、ざわめいた風だ。息を堪えるアシャの鼻腔に、一瞬吸い込んだ甘ったるい匂いが染み付くように澱んでいる。

（物狂いする風.....『風の乙女（ベルセド）』が聞いて呆れる）

息を詰めながら、心の中で舌打ちする。

確かに、この風にまともに吹かれていれば、生き物、特に人間などは、ただひたすら、その甘さを求めて裂け目に飛び込みかねないだろう。粘りつくような饅えた甘い匂いは、アシャにはなじみだ。

（そうか.....スオーガの地下で蘇っていたのか、ラーシェラは）

「ぐ...」

ユカルの苦しげな呻きが、風の音の合間に漏れ聞こえる。そろそろ呼吸が苦しくなってきたのだろう。アシャの肺も熱くなってきた。助かったのは、匂いに魅了されたのか、馬も平原竜（タロ）も風に巻かれたままに呆然と竦み、動かなかったことだ。

もう限界かと思った次の一瞬後、彼らを取り巻いていた風は唐突に消え去った。

「ふ、うっ...」

体を起こして息を吐く。びくりと震えた馬が、いまさら怯えて躍り上がろうとするのをなだめ、大気にもうあの匂いが漂っていないのを確かめると、平原竜（タロ）にしがみつこうようにして体を震わせ堪えているユカルに声をかけた。

「もう、大丈夫だ」

「うっ、はあっ...！」

激しく息を吐いて、ユカルも身を跳ね上がらせた。さすがに平原竜（タロ）は落ち着いたものだ、主人が無事だと確認すればそれでよし、ゆっくりと大きく首を振り、名残の空気を振り払うように体を揺する。その上で、肩を上下させながら、ユカルはアシャを振り返った。

「今のが.....『風の乙女（ベルセド）』...ですよ...？」

「ああ」

「もし、まともに被って、吸い込んでたら、どうなってたんです...？」

息を整えながら、ユカルは好奇心を満たした目で問いかけてくる。

「あの風にはラーシェラの花粉が混じっている。物狂いとはいかなくとも、『風の乙女（ベルセド）の住みか』へは十分引っ張り込まれているだろう」

「...自分で飛び込む...と...？」

ぞくりとユカルが身を震わせた。

「ラーシェラとは...」

「太古生物の一種だ」

乱れた髪をかきあげまとめ直しながら、アシャは応じた。

「.....思考を持った植物、というところだな」

「そんなものが生き残っているんですか？ 太古生物はみんな滅んだと聞いたのに」

「.....」

訝しそうに首を傾げるユカルに、それ以上は答えず、馬を進める。もう少し聞いたような顔をしながら、ユカルが付き従ってくるのに、小さく溜め息をついた。

(そうだ、生き残っているはずがないんだ)

昔語りは、人の生活を脅かす怪物達は全て滅んだと言い聞かせてきた。それは、繊細で脆い、人と呼ばれる種族を守るための心理的な方便だったが。

(滅びるはずもない、んだが)

滅びるはずがない、『運命(リマイン)』の存在同様、アシャがここにいる意味と同様。

だが、制御はできているはずだったのだ。

(ラズーン支配が日増しに弱くなる)

気配だけではなく、こうやって明らかな脅威として目の前に立ち塞がるのを実感するほどに。

(だからこそ、何としてでも『銀の王族』を集め、ラズーンに入ろうと皆...)

「？」

ふと、考えに沈むアシャの視界に、赤茶けた草や岩とは違った反射が飛び込み、本能的にそちらへ向きを変えた。再び吹き出したのは健やかで緩やかな風、揺れる草の陰に再び沈み込んでいこうとする紅の光に無言で速度を上げる。

「アシャ？」

それは小さな岩だった。気をつけなくては見落としそうな、地表に少しだけ突き出た何の変哲もない石くれ。

だが、その表面に、明らかに奇妙な光が反射している。

背後からユカルの操る平原竜(タロ)の重い蹄の音が響いてくる。気になっていた岩まで来ると、アシャは急いで馬から飛び降り、しゃがみこんで手を触れた。

「それは...！」

ユカルがぎょっとした声で叫んだ。慌てて自分も平原竜(タロ)を降り、駆け寄ってくる。アシャの手元を覗き込み息を呑むのに頷き返す。

「...」

指を濡らしたのは血だった。

それほど前に流されたものではない。

乾き切っていない.....乾き切らぬほど大量だったのか？

「アシャ、こっちにも！」

周囲を素早く確認したユカルが、点々と続く血の跡を指差した。

辺りの草は激しく踏みにじられている。犠牲者を引きずっていったと見えなくもない。その先に、小規模ながらも底深い『風の乙女(ベルセド)の住みか』が口を開けている。

「...どうやらここらしいな」

低く呟いて裂け目の中を覗き込む。ただでさえ鈍い光は、とてもではないが、その奥まで照らしてくれはしない。

「クェアーッ!!」

唐突に猛々しい叫びが響いて、アシャとユカルは振り向いた。

曇天に白々と、クフィラの勇壮な姿が浮かび上がっている。

「サマル！」

アシャの厳しい声を叱咤と感じたのか、クフィラは渋々と言った様子で舞い降りてきた。差し出したアシャの左腕に大人しく乗ったものの、いつものようにアシャの肩へすり寄ろうとはしない。

「これ...星の剣士(ニスフェル)のクフィラだ」

「クェッ！」

これ、と者扱いされたのに苛立つように、サマルカンドはぶいと首を背けた。だが、問い正すようなアシャの冷やかな目にあうと、首を竦め、上目遣いに機嫌を伺うような様子を見せた。ユーノの側に居なかったのを恥じるように見える。

「...ん？ ...そうか、連絡があったのか」

どうして肝心の時に、サマルカンドがいなかったのかはすぐわかった。足首に通信筒がついている。ラズーンの方で呼ばれたのだろう。アシャに近い呼びかけをするもの、おそらくは『太皇(スーグ)』

あたりか。

メッセージを確かめたアシャは思わず眉を寄せる。

『急ぎ帰還せよ。ラズーン存亡の危機、来たれり』

顔をしかめたまま、アシャは通信筒をサマルカンドの足首に戻した。

「よし、サマル。俺の馬が野戦部隊（シーガリオン）に戻ったら、すぐにラズーンへ飛んでくれ」

「クエツ！」

ふわりと、質量を感じさせない軽さで、クフィラはアシャの左腕から舞い上がった。それを見送ることもなく、アシャは馬の荷を下ろし、丈夫な縄紐を取り出した。『風の乙女（ベルセド）の住みか』の端へ固定し、強度を試す。

「あ、アシャ！」

「ん？」

「この中に...降りるんですか？」

「ああ」

「だって.....ここから『風の乙女（ベルセド）』が出て来たんじゃないですか？」

「そうだ」

「じゃあ、また出てくることも」

「あり得るな」

淡々と答えながら、アシャは持ち物を確かめた。

「もし、そんなことになったら、どうするんですか？」

切り立った崖のような裂け目の壁を伝い降りる最中に、あの風に巻き込まれてしまえば、一瞬意識を失って落下してしまうかもしれない、どこが底ともわからない千丈の谷の中へ。

だが。

「下にユーノが居る」

その場にそぐわぬ笑みだったのだろう、アシャを見返したユカルが顔を引き攣らせる。

「それだけだ」

そして、それ以外のどんな理由が必要だろう、今ここでアシャが降りていく意味に。

（お前は俺の主）

ふいに胸に打ち寄せた激しい感情に、思わず目を伏せる。

（お前が居るところこそ、俺の居るべき場所）

それは昔語られた恋物語だったのだろうか、それとも恋人を口説く詩歌だったのだろうか。

脳裏を過ったのは、ユーノがいない旅の日々だ。レスファートの落ち込みも、イルファのことさらな上機嫌も引つ掛かりはする、だがそれより強く傷む想い、繰り返し繰り返し見やる、天幕（カサン）のいつもの場所に眠っていない存在を、どれほど自分が望んでいたのか、今しみじみとわかる。

「でも...っ」

軽く後じさりしかけるユカルに苦笑した。

「怖いのか？」

アシャは今怖くない、むしろ、胸が高鳴っている、ようやく再会できるのだ。ようやくもう一度、ユーノの側に自分を置けるのだ。唇が薄笑みに綻ぶのがわかった。

（どこまでも、俺はお前を追う）

いやむしろ、ユーノを追えるのが自分だけだと証明したい、今。

「怖いなら来なくていい」

そっけなく言い放ったアシャに、ユカルの強張っていた顔が見る見る赤くなった。アシャの笑みを嘲笑ととったのか、苛立った表情で、

「俺も行きます！」

「...」

「隊長に怒られる」

訝しく振り向いたアシャの目を真っ向から見据えて、険しい顔で唸る。

「あなた一人を行かせる気はない...っ」

その瞳の激しさにアシャは微かに息を呑む。

（こいつ、ひょっとして）

同じ激情をアシャは自分の中に飼っている、ユーノを誰にも渡さないという所有欲を。

「...なるほど」

応じたアシャの声の低さに、ユカルもまた気づいたのだろう、ぎっと歯を食いしばる音が響いた。

若さと情熱、それに勝る何をアシャはユーノに示せるのか。

（だが、今はそれに構っている場合じゃない）

ラーシェラもまた手強い敵だ。

「よし、来い」

「はいつ！」

縄を伝って地の底へ降り始めるアシャに、ためらうことなくユカルが続く。

「ケアアアーツ！」

無事を祈る、そう言いたげなサマルカンドの声が、鋭く天を衝いていく。

アシャ達を襲った『風の乙女（ベルセド）』は、裂け目に居たユーノをまともに包み込んだ。

「う...」

甘い匂いにむせ、呼吸ができなくなって、ユーノは目を覚ました。額と右肩の痛みは依然として感じないが、じくじくと濡れたままの包帯や長衣が出血が続いていると教えている。

「あ、ふ...」

思い切り息を吸い込んだユーノは、次の瞬間、ぐらりとくる目眩を感じた。頭の芯が白く色を失い、空洞になった部分に、その匂いが巧みに滑り込んでくる。

（何の...匂い...）

岩に体を委ねたままぼんやりと考える。ただでさえ、奇妙に麻痺したままの感情と思考が、匂いにより寸断されていく。

いらっしやい。

匂いはユーノに囁いた。有無を言わせない、けれど力の限り抗えば抜け出せる、微妙な強制力を感じさせる。

だが、ユーノはそれに歯向かおうとは考えなかった。

びくっと腕が動き、掌がのろのろと岩肌を押す。危なっかしく揺れる体を支える。両足がパシャンと軽い音をたてて、水の中に突っ込まれ、力が込められる。全て他人事のように、感覚が遠い。岩肌のざらざらしているはずの手触りも、両足を包んだ水の冷感も、力を込めた時の体の痛みさえも、恐ろしく鈍い。

こっちよ。

声が呼ぶ。

右手をぎちりと突っ張って、思わず体を強張らせた。さすがに鮮烈な痛みが走り、霧がかった頭の中を揺り起こす。

「あ...？」

少し眉をしかめた。

心のどこかで警告の鐘が打ち鳴らされている。切羽詰まった祈りのような、掠れたか細い響き。

消えそうなそれに耳を傾けようとしたユーノは、ごつつ、と水流の中に突き出していた岩に躓いた。バシャン!!

「くっ」

まともに水の中へ倒れ込み、慌てて体を起こす。窒息しまいとした本能的な動きだったが、それが曇ったユーノの心に微かに光を差し込ませる。

（まえに.....こんなことがあった.....）

水の流れの中だった。

辺りは夜の闇だった。

哀しくて哀しくて、ただ泣いていた。

そのユーノに差し伸べられた手があった。

暖かく抱き締めてくれるその手に、すがりついた、すがりついて.....なのに、哀しかった。

これは夢なのだ、何度も言い聞かせなくてはならない、そうわかっていた。

（痛い...）

ユーノは胸の奥を貫いた想いに顔を歪めた。

なぜかはわからないけど、この記憶は心を息苦しく締め付ける。

そのユーノの怯みに、匂いは巧妙に忍び込む。

おやめなさい。こっちよ。こっちにくるの。

（こっち...？）

水粒を滴らせながら立ち上がった。匂いが導くように辺りを取り巻き、ユーノを誘い込む。

一步.....一步.....。

夢の中のような危うい歩みをユーノは続けた。

ぼたん。紅まじりの水滴が緋色の花のように岩の上に砕ける。

声が呼び続ける。

こっちよ。こっちに來るの。哀しいんでしょ。痛いんでしょ。つらいんでしょ。慰めてあげるわよ。

岩の行路をどれほど歩いたのか、水流が少し先の岩組みの中へ吸い込まれる辺りで、ユーノは歩みを止めた。

だめだ。行くな。お前は帰らなくちゃならない。

(どこへ?)

決まっている。お前を待っている人の所だ。

(誰がボクを待っているって?何が.....ボクを?)

ふらりとユーノは岩によりかかった。額から生暖かいものが流れてくるのを感じる。

(出血...?)

額に手を当てようとして、よろめいた。崩れかけ、岩角を曲がるようにたたらを踏み、かろうじて持ちこたえる、と、そのとたん、匂いは甘く強く、ユーノの全神経を支配した。

(あ...あ)

そこは、さながら淡く月光を浴びた妖精の寝所とも見えた。

小部屋ほどはある岩屋の中一面、薄い黄色のフワフワした塊が微かに光を放って転がっている。塊の一つ一つは人のこぶし程度の大きさで、柔らかそうな和毛は生まれたばかりの鳥の雛を思わせた。

それが何なのかはユーノにははっきりわからなかった。が、ただ、ユーノを優しく受け止めてくれるだろうということはわかった。その柔らかそうな絨毯に向かって、自分の体が倒れ込んでいくのを、ユーノは止めなかった。

ぼす...っ。

衝撃はすぐに和毛の塊に吸収された。まるで、細かな粒子が風に煽られて浮き上がるように、幾つか飛び上がった塊がフワッ.....フワッ.....とユーノの体の上に降りてくる。と、パン、と微かな音をたてて黄金色の粒を吐いて砕け、あのどこか、妖しい甘い匂いが充満した。

「ん...」

頭の隅、彼方の遠いところから強烈な眠気が襲ってきて、ユーノは再び眠り込んだ。

「.....」

ユカルは声もかけられないまま、黙々とアシャの後ろについていった。

先ほど岩の上にどうやら血の染みらしい黒々とした汚れを見て取ってから、アシャは寡黙になり、ユカルに足下と進路上の注意をする以外は口をきかなくなっていた。整った顔立ちだけに表情は厳しく、こんな薄闇でもよく見えているかのように先を急いだ。

足下を流れる水は冷たくユカルの脚を凍えさせた。きっとラズーンの雪解け水が、遙かな距離を旅して来て、この裂け目の流れているのだろう。

「ふ...う」

流れる汗を拭おうとして岩角に手をつきぎよっとする。掌にぬるりとした手触り、確認して手についた薄赤いものに気づく。

「アシャ...」

声をかけて、ユカルは相手が既に岩角を曲がってしまっているのに気づいた。慌てて後を追ひ、アシャが淡光を放っている岩屋の前で立ちすくんでいるのに出くわす。

「どうしたんです...」

続くことばをユカルは呑み込んだ。

岩屋のほぼ正面に、妙に毒々しい緑の木があった。

しかし、それは樹、と呼んでいいのだろうか。

ほぼ人間の胴回りほどの緑の蔓が十数本、お互いに絡み合って岩屋の天井へと伸び上がり、そこから天井を這って岩屋を覆うように垂れ下がっている。

その太い蔓から人間の腕程度に細い蔓が、何十本となくゆらゆらと空中に漂っていた。そしてその蔓という蔓に、結実を示す、豊かに実ったクリーム色のふわふわした塊がついている。塊は、岩屋の床にも絨毯と見まごうほどに転がっていた。

岩屋の隅の方に細い縦長の裂け目がある。そこから微風が流れ、塊の和毛を揺らせている。

「ラーシェラ...」

ユカルのことばに、アシャは重く頷いた。その目は、正面の緑の蔓の塊に、食い入るように注がれている。

「...ユーノ...」

蔓には、まるで抱かれるように細身の体がもたれかかっていた。右肩と額のあたりに紅の花が開き、緑の蔓を背景に妙に鮮やかだ。短くなった髪が濡れそぼって張り付き、まるで十五、六の少年のように見える。

と、その目がゆっくりと見開かれてこちらを見た。深くどこか虚ろな黒の瞳だ。

「星の剣士(ニスフェル)！」

ユカルが喜びの声を上げてラーシェラの実を踏みしだき、ユーノの側へ駆け寄ろうとするのを、アシャは厳しい表情で止めた。

「待て」

「どうしてですか？」

「ユーノの意識は俺達にない」

「だって」

ユカルのわけがわからぬまま、アシャとユーノを見比べた。

「こっちを見ているのに...」

「いや...」

アシャが苦い顔になった。

「ユーノが見ているのは俺達じゃない.....あいつの心の中の誰か、だ」

「.....」

「ラーシェラは引き寄せた生物のもっとも強い感情を増幅させて、その身の動けない退屈を紛らせるんだ。普通のラーシェラのように地上に生えていたなら、獲物は次々見つかるから一つの獲物に固執することはないだろうが.....これほどの地下へ、生きたまま獲物を引き寄せるのは容易じゃないからな。ちょっとやそつとではユーノを離さないだろうし、まずくすれば俺達も巻き込まれる」

アシャのことばを聞いたように、ラーシェラのしなやかな蔓が揺れ動き、幾つかの塊を落とした。ユカルに踏まれても割れなかったものもあるのに、今落ちた実はポン、ポンと次々に弾け、黄金色の粉を吹き出す。

「ユカル！ 吸い込むな！」

アシャの警告に、指示された通りに鼻と口を布で覆い、ぐっと歯を噛み締めた。同じようにしてアシャが息を止め、舞う金粉がおさまるのを待っている。と、それまでぐったりと緑の蔓に抱かれていたユーノが、ふいにのろのろと立ち上がり、こちらへ歩み出してきた。まるで誘うように緩やかに手を差し伸べてくる。

「なに...」

くぐもった声でユカルが問うと、アシャは複雑な表情になった。

「俺達を誘い込もうと言うんだろう。ユーノが心の中で描いている誰かと、俺達の姿を重ね合わせるようにラーシェラが仕組んでいるんだ」

「じゃあ、星の剣士（ニスフェル）が呼んでいるのは、俺達じゃないんですか？」

「おそらくは、な」

アシャは顔を歪めた。

（誰を探している...誰を求めているんだ、ユーノ）

苛立たいしい想いが湧き上がってくるのを押しえ込んで、アシャは踊りのように静かに腕を舞わせるユーノを見守った。

甘い匂いが満ちる岩屋の中、陽炎じみた儂い姿が緩やかに漂っている。長衣の裾が乱れるのを僅かな脚さばきで払い、片腕を回し、ユーノは空中に紋様を描いた。片手を天井へ差し伸べる。もう片手で自分の体を抱く。顔を俯け目を伏せる。切なげにすぼめた唇が灰かに開き、柔らかい吐息を押し出す。

脚が止まった。

まるで誰かに出会ったようにユーノはたじろぎ、一点を見つめ、腕を解いた。少し笑っておずおずと両手をそちらへ伸ばす。恥ずかしげな、ためらいがちな求愛の動作だった。

『愛してもいいですか』

「...」

その動作に含まれた問いかけを、アシャは読み取る。

『愛してもいいですか。好きになってもいいですか。いいと言って下さいますか』

切なげな視線。震える吐息。

(けれど、俺じゃない)

アシャが欲して止まぬものは、今別の誰かに向けられている。その一途さ素直さに胸の奥がじくじくする。

ユーノの髪から水滴が光りながら零れ落ちた。瞳が甘えるように優しい光を帯びる、と、次の瞬間、ユーノの顔が強張り、顔色が青ざめた。差し伸べた手を凍り付かせる。

(...拒まれた！)

まるでその傷みを自分が感じたように、アシャは唇を引き締めた。

ユーノの求愛は受け入れられなかった。両手が下がる。涙がこぼれ出すかと思った目がゆっくりと細められた。頑なに引き締められていた唇がそっと.....淡く笑う。

わかってたよ、とその姿は呟いている。

『わかってた。この想いが届かないことぐらい』

(ユーノ)

『誰の罪でもない。あなたが悪いのではない。ただ...私があまりにも私だだけのこと.....だけど...
...わかってたけど...』

(ユーノ...)

微笑したまま、眉をひそめて自分の胸を抱き締めるユーノに、アシャは息苦しくなる。

(それほどの想いを...)

誰が拒んだんだ？

(知りたい、が、知りたくない)

その男はどれほど長くユーノの側に居たのだろうか。アシャよりも長く、アシャよりも深く、ユーノの心に触れていたのだろうか。きり、と小さく奥歯が鳴る。

『大丈夫』

静かにユーノの唇が動いた。

『わかってたから.....大丈夫』

だが、それでも、わずかに上げた瞳の黒は、想いを込めて相手を追っている、追っている、追っている...

「アシャ...」

ユカルの呼びかけに、我に返った。

「あれは一体何をしてるんですか」

「ユーノが感じている一番強い感情の表現だ。ある人間を好きになった。気持ちを伝えても拒まれた。なのにそいつを諦め切れない」

自分の声が硬く単調なものになっているのを感じた。

(誰なんだ)

荒々しい声が胸で弾ける。

(ユーノの想いを拒んだのは誰なんだ。あいつに、あんな想いをさせている男とは、一体どんな奴なんだ)

旅の最中にユーノが見せたためらいが、次々とアシャの脳裏に浮かんでくる。

一番誰よりも幸せになってほしい人間。

(俺には絶対わからないと言ってた)

そいつならば、ユーノはその心を、その身を委ねるのだろうか。アシャの時のようにためらうことなく、腕の中へ身を投げるのだろうか。

「...つつ」

じり、と焼け付く胸に顔をしかめる。

(嫉妬か)

気づいて苦笑する。

(まったく、ざまあない、これじゃそらのガキと同じだ)

ふ、っと息を吐いた。心を統制し鎮めにかかる。自分を嘲笑いながら言い聞かせる、なるほどえらく切羽詰まっているが、そういうことは死地を脱出してからのんびりやることだ。

(よし)

腰の辺りを探って、小さなカプセルを三個取り出す。

「ユカル」

振り向く相手に一つ差し出す。

「これを含んでいろ。『風の乙女（ベルセド）』が出たら軽く噛むんだ。中から空気が溢れ出て、口さえ閉じていれば、しばらくは息がもつ」

「はい...」

ユカルは不思議そうに酸素発生剤を受け取った。

残り二つを片方の掌に転がし、傷みを抱え込むように体を揺らせているユーノを見やる。自分で切ったのかばらばらに乱れた髪、苦痛を堪える顔が痛々しい。どんなに大切な想いかは知らないが、ラーシェラのお楽しみを満たすために差し出し続ける必要もないだろう。得られる資格があるのは。

(全テヲ、ヨコセ、コノ俺ニ)

喉の奥で吐きそうになった台詞を噛み殺す。

「俺はラーシェラの手に乗ってみる」

「え？」

「遅かれ早かれ『風の乙女（ベルセド）』が出るだろう。あの中にいる限りユーノは幻覚から逃れられない。かといって、急に引っ張り出すと、心が夢の中へ置き去りにされてしまう」

物狂いの風とはよく言ったものだ。

「じゃ、じゃあ、どうするんですか」

「一か八か、ラーシェラの手に乗って、ユーノの夢の中へ入り込んでやろうと思う。上手く行けば、あいつを夢から連れ出せる」

「でも...」

困惑した顔で眉を寄せるユカルに、少し笑った。

「心配だろうが、先に降りて来たところに戻って、足場を確保しておいてくれ。必ず助け出していく」

「...わかりました」

さすがに太古生物では分が悪すぎると思ったのだろう、ユカルは考え込みながらも頷いた。

「先に行って、お待ちします、アシャ・ラズーン」

「いい子だ」

「...俺は子どもじゃありません」

ちらりと挑発的な視線を投げ、ユカルは降りて来た裂け目の方へ戻っていった。

見送ってアシャは再び岩屋に向き直った。カプセルを二つとも口に含む。噛みはしない。含んだまま、そっとふわふわしたクリーム色の絨毯の上、和毛の塊を押しおけるように足を降ろした。

ざわり、とラーシェラが揺れる。アシャの意図に気づいたようだ。

だが、逆に挑んでくるように、蔓を揺らめかせてなお幾つかの実を落とし、黄金色の粉を撒き散らした。

何かをまた刺激されたのだろうか。ふ、とユーノがアシャを認めたように、再び求愛の動作を繰り返す。

手を差し伸べる、優しく微笑む。

踊りを申し込まれたように、アシャも静かに相手の動作に答えを返した。

手を差し伸べる、笑みかける、だがそこで止める。嫌いじゃないよ、とも、好きだ、ともとれる曖昧な動作は意識的なものだ。

不審そうに眉をよせたユーノが、一歩彼に近づいてきた。どうやらうまく夢の中へ入り込めたらしい。

ユーノは片手を差し伸べて小首を傾げる。その手をとって、アシャはユーノを引き寄せる。

一瞬怯えたような表情がぼんやりとしていたユーノの面を覆った。びっくりと体を震わせ、身を引こうとするのを、アシャはそのまま手を放してやる。

ラーシェラは夢の中に居る人間に対して無理強い禁物だ、特にあまり接触が確かでない場合は、強く拒まれたが最後、永久に夢から連れ出せなくなってしまう。

「.....」

ぎりぎり胸を締めつけてくる焦燥感に耐え、アシャはわずかに遠ざかってしまったユーノをじっと待った。汗が滲む。このまま、この娘が自分の手に戻らなかつたらどうしよう、そんな迷いを必死に振り切る。

(今は俺を消す)

自我をなくし、ユーノの夢に同化することが先決、アシャの存在はただの記号でいい。

数歩急ぎ足に離れたユーノは、立ち止まり、そっとアシャを振り返った。

「...？」

おどおどした目がアシャを見つめる。

「.....」

応えて、アシャは両手をそっと開いた。

(ここへおいで)

戻れといたいのは山々だが、初めて会った娘のように、そっと誘いをかけていく。

(ここは安全だから)

ユーノはためらい、戸惑った顔で首を傾げつつ竦み、次の瞬間、まるで崖から飛ぶような勢いで、一足飛びにアシャの腕の中に飛び込んできた。ほっと小さく息を吐いて、アシャの胸に身を寄せる。

(こんなに、冷えてる)

小さな体は凍えていた。いつぞやの、なかなか命が戻らなかった夜を思い出して胸苦しくなる。近くで見た横顔には血の跡がある。またどこかを怪我しているのだ、見えている以上に。

(また、俺の知らないところで)

静かにユーノの体に腕を回す。

「！」

どきりとしたようにユーノが身を起こし、離れようとする。対するアシャはそれを止めない。飛び離れかけた相手に乱れそうな気持ちを堪え、再び静かに腕を開く。

逃げるな、では戻ってこない。囁くべきことばは一つ。

(ここだ)

「.....」

ユーノは逃げなかった。自分の体から離れた腕を見つめ、そっと指先で触れてアシャを見上げる。頷いて、もう一度、ユーノを抱く。今度は相手は身動きせず、じっとアシャの胸に体を休ませている。

「...ふ...」

カプセルを吐き出してしまうないように、静かに息を吐いた。

(まず一段落)

続いてもう一度、今度は腕に力を込める。ユーノの反応を見ながら、怯えさせないように、少しずつ。

それはまだるっこしい過程だった。

ほんの少しずつユーノを抱き締めていきながら、決してユーノの夢を壊さないようにしなくてはならない。ユーノの夢に、それとわからぬほどの微細な干渉を加え続け、現実へ現実へとゆっくり引き戻していくのだ。だが。

(意外にこれは楽しいな)

ユーノの頬に軽いキス、体を強張らせるのをなだめて、もう一度。

ユーノの心を世界から隔てている障壁を、感触でもってほんの僅かずつ切り崩していく。

互いの体を重ねるのに似ている、と不謹慎なことを思う。あれもまた、夢を現実に繋いでいく儀式と言えなくもない。

額の紅に染まった布に手を触れると、ユーノはぎくりと体を震わせてアシャを見た。安心させるように頷いて、額の布を取り出した新しいものに変える。アシャの体にそっと身を寄せているユーノは逃げない。甘えるように右肩を差し出したので、その傷も手当できた。

一つ触れ、一つ手当が進むごとに、ユーノの目の奥で何かが動き、やがて傷に触れると痛みに体を強張らせるようになった。

「あ...りがと...」

ようやく掠れた声が響く。

「...ああ...」

随分長いこと聞かなかった声だ、と胸が呻いた。同時に自分が、体の全てが、これほどユーノの不在に餓えていたと気づいて、胸が甘酸っぱくなった矢先、

「あなた.....誰.....？」

心底訝しげな声にひやりとした。

「...、に...？」

思わず見下ろす黒の瞳は、もう澄み渡って晴れつつある。立ち方もしっかりとし、さきほどまでの危うい頼りなげな気配はない。ユーノがほとんど覚醒しているのは確かだ、なのに。

(今、何て言った?)

「.....っ！」

ふいにラーシェラの気配がざわめくように濃厚になった。どうやらユーノを失うまいとしているらしい。

一刻の猶予もない。ぐっと酸素発生剤を噛み、ユーノの顎を押し上げる。

「あ、う」

いきなりの挙動、小さく呻いて眉を寄せたユーノの唇に口を重ね、酸素発生剤の一つを舌で押し入れ含ませた。驚きに目を見張ってもがこうとする相手の体を強く抱く。ラーシェラの実が蔓についたまま、次々と弾け始めた。床に広がっていた塊も、連鎖反応のようにあっという間に黄金の煙に変わっていく。

「ん...つむ」

ユーノが意識を失ったように腕で崩れた。ラーシェラがユーノの支配から手を引き、実を弾けさせるのに集中しだしたらしい。膝が崩れて座り込もうとするユーノの体を片腕で引き上げ、口を布で覆って縛り、軽々肩へ担ぎ上げる。

(もらっていくぞ)

ちらりと樹を振り返って響かせた想いは嘲笑だ。

(お前じゃ格不足だ)

「!!!」

声なき怒号が岩屋を満たす。荒れ狂うように黄金の粉を吹き付け、蔓を揺らめかせたが、アシャは立ち止まることもなく、『風の乙女（ベルセド）』に吹き送られるように脱出していった。